

## 2.2 環境影響予測及び評価検討

地下水及び動物・植物に係る環境影響予測及び評価検討を実施した。

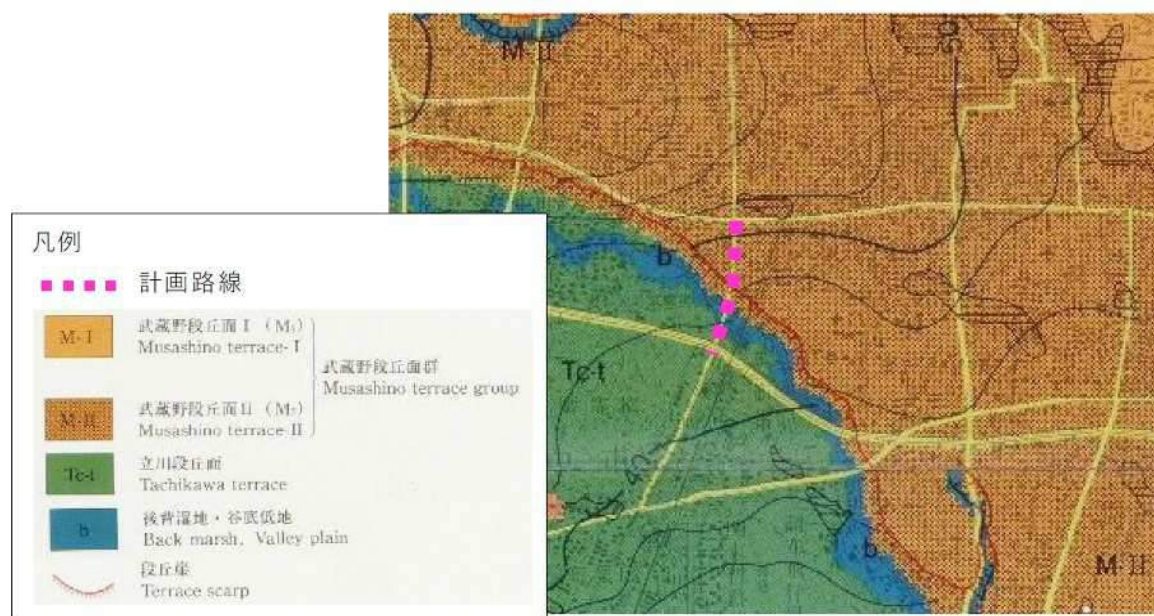
### 2.2.1 地下水

#### (1) 地下水等の状況

##### ア 地形の状況

計画路線周辺の地形の状況は図 2.2.1-1 に示すとおりである。

計画路線は武蔵野台地に位置し、起点となる南側の地形は立川段丘面、終点となる北側の地形は武蔵野段丘面に分類され、計画路線の中央付近において两段丘面を区切る段丘崖（国分寺崖線）及び国分寺崖線に沿って立川段丘面上を流下する野川と交差する。当該地域の地形は多摩川の出水等により形成された河岸段丘であり、立川段丘面と武蔵野段丘面とで約 15m の高低差がある。



資料：土地分類基本調査（5万分の1、東京西北部）（平成10年、東京都）

図 2.2.1-1 地形分類図

##### イ 地質の状況

計画路線沿いの想定地質縦断図は図 2.2.1-2～図 2.2.1-4 に示すとおりである。当該地域の地層は上総層群を基盤とし、その上部に立川礫層及び武蔵野礫層が重なり、表部は関東ローム層及び埋土で覆われている。

80.000

70.000

No. 1  
T.P. 47.97m  
dep = 18.35 m

No. 2  
T.P. 45.08m  
dep = 17.33 m

No. 3  
T.P. 46.82m  
dep = 20.45 m

No. 5  
T.P. 50.74m  
dep = 33.25 m

No. 4  
T.P. 57.67m  
dep = 14.45 m

No. 6  
T.P. 61.01m  
dep = 11.60 m

20.000

1/2

凡例

地層層序

時代	地層名	地層記号	主な土質名
完新世	表土・埋土・崩積土	T	黒ボク
	崩積土	dt	ローム質砂礫 粘土, 砂質粘土
第四紀	黒ボク	Kb	黒ボク
	立川ローム	Lm1	ローム, 粘土
	立川礫層	Tg	砂礫
	武蔵野ローム	Lm2	ローム
	武蔵野礫層	Mg	砂礫, 細砂
	砂質土層	KZ-s	細砂, 粘土混じり細砂, 粘土質細砂, 砂質粘土
上新世	浮石層	KZ-p	浮石, 細砂
	固結粘土層	KZ-c	粘土, 砂混じり粘土, シルト, 砂質粘土
	礫質土層	KZ-g	砂礫, 礫混じり細砂, 細砂

- 観測井 ストレータ位置
- ▽ 観測水位 (2022/3/17 日平均値)
- ▽ 観測水位 (2022/9/26 日平均値)

- 計画線
- - - 推定地下水位



※この想定地質縦断図は、「地質調査(2北南-小金井3・4・11外1路線)報告書(令和3年3月、東京都北多摩南部建設事務所、大建基礎株式会社)」及び「地質調査(3北南-小金井3・4・11外1路線)報告書(令和3年10月、東京都北多摩南部建設事務所、大建基礎株式会社)」の成果を補正したものである。  
 ※ここでは、現時点で想定している道路計画の「橋梁案」を、赤線で示した。

図 2.2.1-2 想定地質縦断図1 ※橋梁案を重ねた場合

80.000

70.000

No. 1  
T.P. 47.97m  
dep = 18.35 m

No. 2  
T.P. 45.08m  
dep = 17.33 m

No. 3  
T.P. 46.82m  
dep = 20.45 m

No. 5  
T.P. 50.74m  
dep = 33.25 m

No. 4  
T.P. 57.67m  
dep = 14.45 m

No. 6  
T.P. 61.01m  
dep = 11.50 m

20.000

1/2

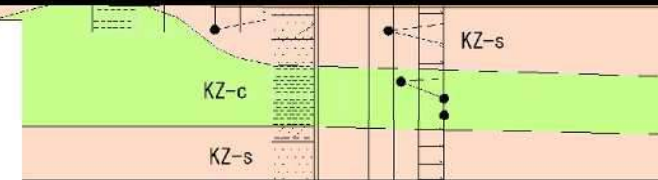
凡例

地層層序

時代	地層名	地層記号	主な土質名
完新世	表土・埋土・崩積土	T	黒ボク
	崩積土	dt	ローム質砂礫、粘土、砂質粘土
第四紀	黒ボク	Kb	黒ボク
	立川ローム	Lm1	ローム、粘土
	立川礫層	Tg	砂礫
	武蔵野ローム <small>(立川ロームを含む)</small>	Lm2	ローム
	武蔵野礫層	Mg	砂礫、細砂
更新世	砂質土層	KZ-s	細砂、粘土混じり細砂、粘土質細砂、砂質粘土
	浮石層	KZ-p	浮石、細砂
	固結粘土層	KZ-c	粘土、砂混じり粘土、シルト、砂質粘土
	礫質土層	KZ-g	砂礫、礫混じり細砂、細砂

- 観測井 ストレーナ位置
- ▽ 観測水位 (2022/3/17 日平均値)
- ▽ 観測水位 (2022/9/26 日平均値)

- 計画線
- - - 推定地下水位



※この想定地質縦断図は、「地質調査(2北南-小金井3・4・11外1路線)報告書(令和3年3月、東京都北多摩南部建設事務所、大建基礎株式会社)」及び「地質調査(3北南-小金井3・4・11外1路線)報告書(令和3年10月、東京都北多摩南部建設事務所、大建基礎株式会社)」の成果を補正したものである。  
 ※ここでは、現時点で想定している道路計画の「掘割案」を、赤線で示した。

図 2.2.1-3 想定地質縦断図2 ※掘割案を重ねた場合



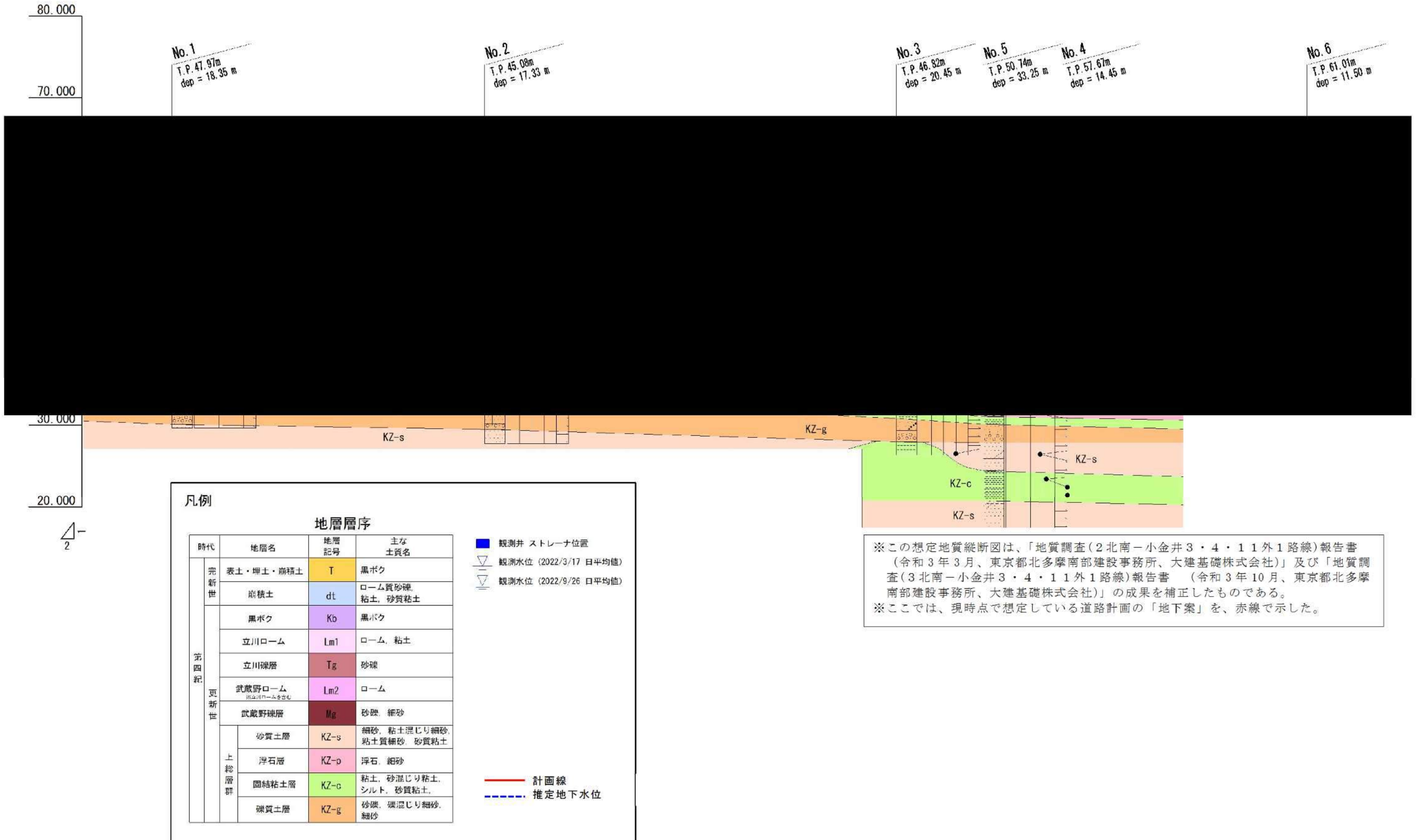


図 2.2.1-4 想定地質縦断図3 ※地下案を重ねた場合

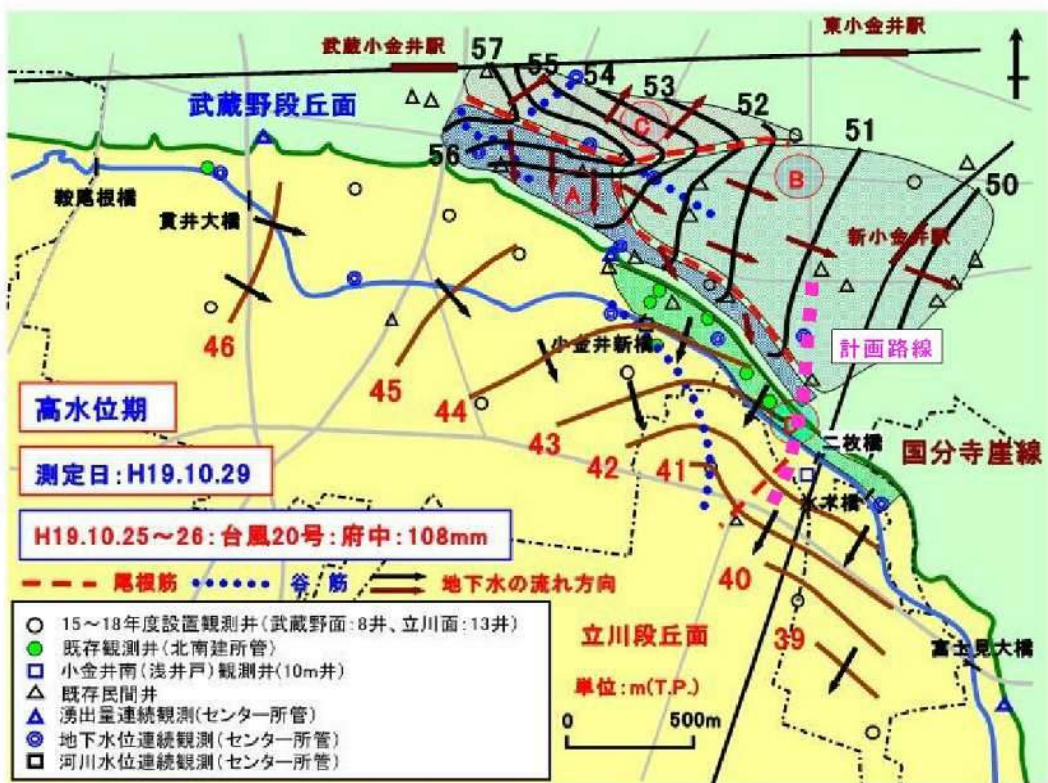


## ウ 地下水等の状況

計画路線沿いの想定地質縦断図は図 2.2.1-2～図 2.2.1-4 に示したとおりで、計画路線及びその周辺において地表面に近い浅層地下水を胚胎する帯水層は、武蔵野礫層、立川礫層と、これらに連続する上総層群上層の砂質土層及び礫質土層と想定される。なお、上総層群には、浅層地下水の帯水層以深に固結粘土層が存在し、さらに下位には深層地下水を胚胎すると想定される砂質土層及び礫質土層が分布している。

計画路線周辺の浅層地下水の状況は図 2.2.1-5 に示すとおりである。既存資料によると、武蔵野段丘面における計画路線周辺の地下水の流れ方向は大きく北西から南東方向であり、計画路線縦断方向に対し直交に近い関係となっている。ただし、国分寺崖線頂端から北側に尾根筋があり、この尾根筋を境に武蔵野段丘面から立川段丘面方向に流下する地下水の流れも見られる。なお、武蔵野段丘面に分布する浅層地下水は立川段丘面に分布する浅層地下水に対し一段高い状況にあり、武蔵野段丘面に分布する地下水が段丘崖である国分寺崖線を介し、湧水として地表に湧出している（図 2.2.1-6 参照）。

立川段丘面における計画路線周辺の地下水の流れ方向は大きく北から南方向であり、計画路線の縦断方向と概ね並行に流動している。



※図中のA、B、Cは、武蔵野段丘面の地下水面を2つの尾根筋(赤破線)で3地域に区分したものである。

資料: 野川上流域における河川水量確保に関する検討(平20.都土木技術センター年報)

図 2.2.1-5 計画路線周辺の地下水の状況



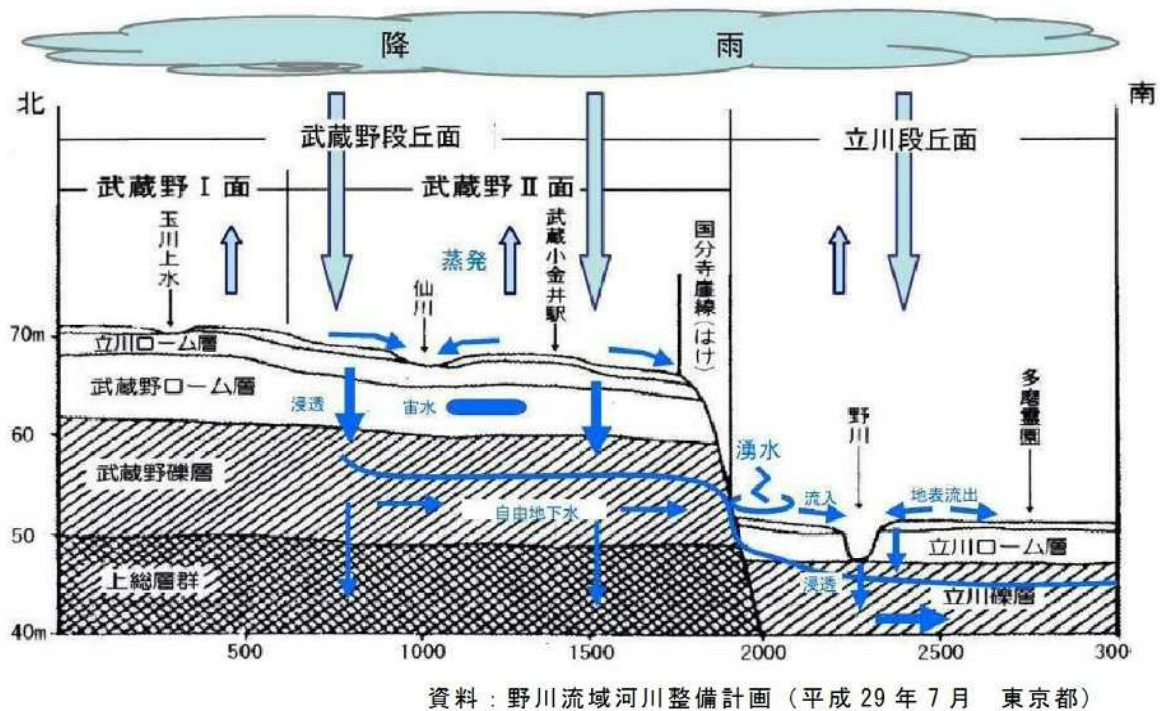


図 2.2.1-6 計画路線周辺の地質構造及び浅層地下水の概念図

計画路線周辺で実施した地下水位の現地調査結果を表 2.2.1-1 及び図 2.2.1-7 に示す。この現地調査は、計画路線周辺の 9 箇所に観測井を設置し、2021 年 11 月 15 日より自記水位計による連続測定を行ったものである。

立川面の No. 1、No. 2、No. 3 で測定された地下水位は TP. 42~43m 前後であり、GL からの深さは約 2.5~5.5m と、比較的浅い深度で地下水面が出現する。なお、北側の No. 3 から南側の No. 1 に向かうにつれ水位が低くなっている。また、水位の時間変動は概ね同じ状況にあり、降雨に対する敏感な反応が確認される。

武蔵野面の No. 4、No. 6、No. 7、No. 9 で測定された地下水位は TP. 50~51m 前後で、地域の地下水流動の上流に該当する No. 6 の水位が他の地点に対し約 1m ほど高い状況にある。GL からの深さは約 9~10m である。水位の時間変動の傾向は概ね同じで、降雨に対する反応は立川面の地下水に比べ緩やかな傾向にある。

立川面と武蔵野面との水位差を比較するとその差は約 7~8m である。また、崖線中腹部に該当する No. 5、No. 8 の水位は、立川面と武蔵野面の中間にあたる水位を示している。なお、全体的な水位変動傾向として、2 月から 3 月が低水位期であることが確認される。

これらは、既存文献に示されている地域の地下水の傾向と概ね一致している。



表 2.2.1-1 現地調査結果（地下水の水位）

調査地点 (観測井標高(T.P.))		No.1 (47.97)	No.2 (45.08)	No.3 (46.82)	No.4 (57.67)	No.5 (50.74)	No.6 (61.01)	No.7 (59.80)	No.8 (51.16)	No.9 (60.01)
対象層		立川面	立川面	立川面	武蔵野面	崖線部	武蔵野面	武蔵野面	崖線部	武蔵野面
		Tg	Tg	Tg	Mg、KZs	KZs	Mg、KZs	Mg、KZs	KZs	Mg、KZs
2021.11	最大値(T.P.)	42.63	42.75	43.05	50.00	49.38	51.10	49.98	47.16	49.94
	最小値(T.P.)	42.54	42.68	42.88	49.93	49.29	51.02	49.86	47.12	49.81
	変動幅	0.09	0.07	0.17	0.07	0.09	0.08	0.12	0.04	0.13
	平均値(T.P.)	42.59	42.71	42.94	49.96	49.34	51.05	49.91	47.14	49.87
2021.12	最大値(T.P.)	42.86	43.02	43.56	50.10	49.28	51.17	49.99	47.38	49.94
	最小値(T.P.)	42.56	42.65	42.93	49.94	49.15	51.02	49.87	47.14	49.81
	変動幅	0.30	0.37	0.63	0.16	0.13	0.15	0.12	0.24	0.13
	平均値(T.P.)	42.69	42.75	43.11	50.02	49.21	51.12	49.94	47.21	49.90
2022.1	最大値(T.P.)	42.56	42.64	42.91	49.93	49.15	51.09	49.86	47.13	49.81
	最小値(T.P.)	42.42	42.54	42.72	49.74	49.05	50.93	49.67	47.09	49.63
	変動幅	0.14	0.10	0.19	0.19	0.10	0.16	0.19	0.04	0.18
	平均値(T.P.)	42.48	42.59	42.80	49.84	49.10	51.00	49.76	47.11	49.72
2022.2	最大値(T.P.)	42.44	42.57	42.85	49.73	49.04	50.95	49.67	47.14	49.62
	最小値(T.P.)	42.35	42.48	42.67	49.66	48.92	50.82	49.62	47.08	49.57
	変動幅	0.09	0.09	0.18	0.07	0.12	0.13	0.05	0.06	0.05
	平均値(T.P.)	42.40	42.52	42.72	49.69	48.98	50.91	49.64	47.10	49.59
2022.3	最大値(T.P.)	42.49	42.62	43.02	49.74	48.91	50.81	49.64	47.23	49.60
	最小値(T.P.)	42.29	42.41	42.56	49.60	48.79	50.59	49.59	47.09	49.54
	変動幅	0.20	0.21	0.46	0.14	0.12	0.22	0.05	0.14	0.06
	平均値(T.P.)	42.38	42.51	42.72	49.66	48.83	50.66	49.62	47.14	49.57
2022.4	最大値(T.P.)	42.91	42.92	43.57	50.02	48.79	51.13	49.83	47.40	49.77
	最小値(T.P.)	42.44	42.57	42.82	49.73	48.71	50.61	49.65	47.16	49.60
	変動幅	0.47	0.35	0.75	0.29	0.08	0.52	0.18	0.24	0.17
	平均値(T.P.)	42.62	42.69	43.04	49.93	48.74	50.96	49.78	47.23	49.70
2022.5	最大値(T.P.)	42.73	42.78	43.19	50.02	48.71	51.17	49.84	47.25	49.78
	最小値(T.P.)	42.47	42.60	42.80	49.92	48.67	51.09	49.79	47.13	49.66
	変動幅	0.26	0.18	0.39	0.10	0.04	0.08	0.05	0.12	0.12
	平均値(T.P.)	42.55	42.66	42.93	49.97	48.69	51.14	49.82	47.17	49.71
2022.6	最大値(T.P.)	42.69	42.79	43.20	49.98	48.67	51.11	49.82	47.18	49.70
	最小値(T.P.)	42.47	42.62	42.78	49.83	48.64	51.03	49.74	47.09	49.60
	変動幅	0.22	0.17	0.42	0.15	0.03	0.08	0.08	0.09	0.10
	平均値(T.P.)	42.54	42.67	42.89	49.91	48.66	51.08	49.79	47.14	49.66
2022.7	最大値(T.P.)	42.77	42.87	43.24	49.92	48.64	51.04	49.80	47.17	49.67
	最小値(T.P.)	42.44	42.61	42.75	49.73	48.62	50.95	49.69	47.06	49.55
	変動幅	0.33	0.26	0.49	0.19	0.02	0.09	0.11	0.11	0.12
	平均値(T.P.)	42.53	42.69	42.88	49.82	48.63	50.99	49.75	47.10	49.61
2022.8	最大値(T.P.)	42.71	42.86	43.34	49.82	48.62	50.96	49.81	47.16	49.67
	最小値(T.P.)	42.43	42.62	42.76	49.68	48.59	50.84	49.72	47.04	49.58
	変動幅	0.28	0.24	0.58	0.14	0.03	0.12	0.09	0.12	0.09
	平均値(T.P.)	42.51	42.68	42.87	49.77	48.60	50.90	49.77	47.10	49.63
2022.9	最大値(T.P.)	43.21	43.26	43.86	50.12	48.59	51.29	50.18	47.40	50.03
	最小値(T.P.)	42.41	42.60	42.75	49.67	48.55	50.80	49.73	47.06	49.59
	変動幅	0.80	0.66	1.11	0.45	0.04	0.49	0.45	0.34	0.44
	平均値(T.P.)	42.62	42.76	43.03	49.81	48.56	50.93	49.85	47.15	49.71
2022.10	最大値(T.P.)	42.87	42.95	43.41	50.02	48.55	51.28	50.17	47.29	50.02
	最小値(T.P.)	42.57	42.75	42.97	49.87	48.54	51.06	50.00	47.16	49.85
	変動幅	0.30	0.20	0.44	0.15	0.01	0.22	0.17	0.13	0.17
	平均値(T.P.)	42.69	42.82	43.11	49.95	48.54	51.17	50.11	47.23	49.97

※表中に記載した調査結果の対象期間：2021年11月15日～2022年10月31日

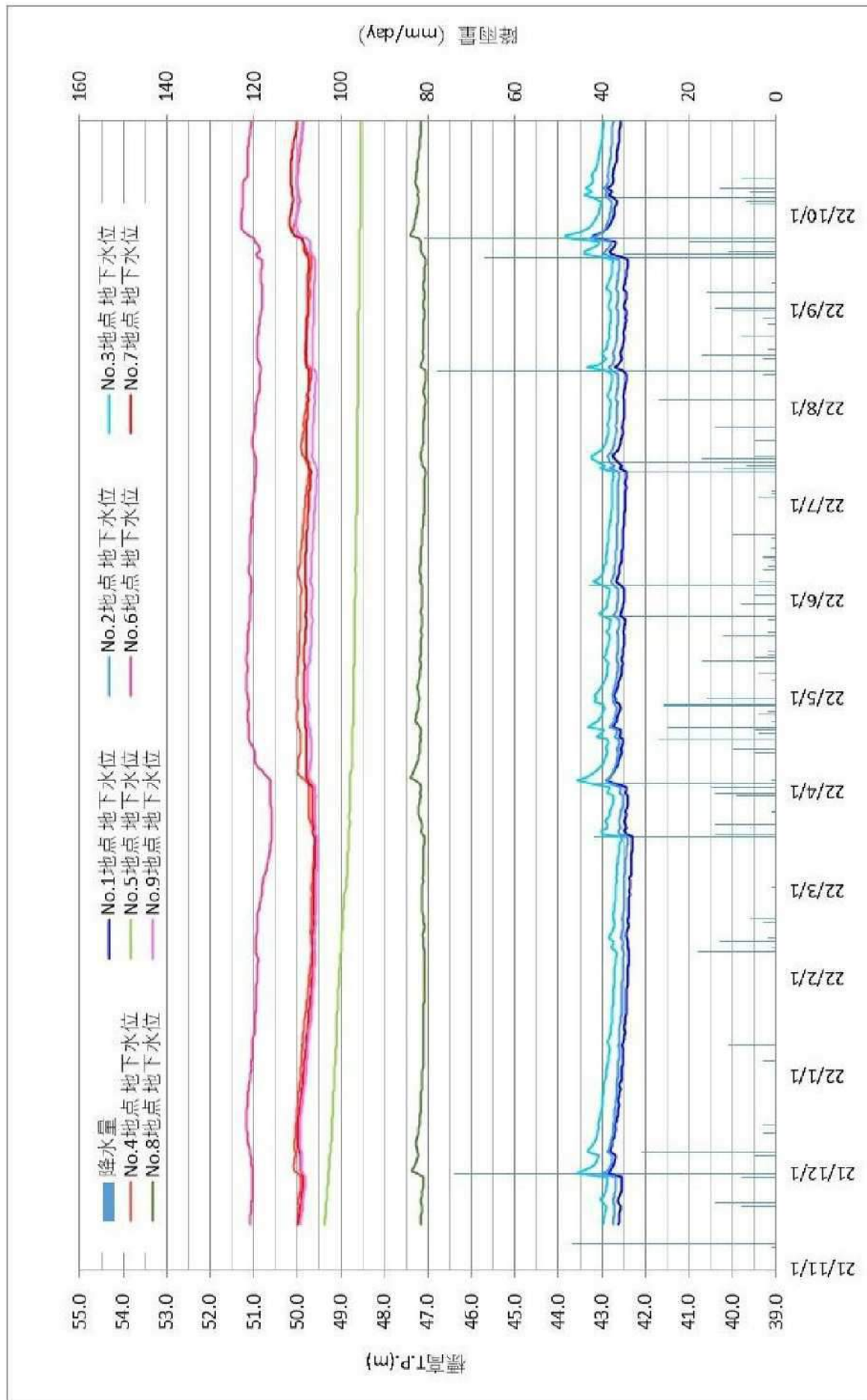


図 2.2.1-7 現地調査結果（地下水の水位の変動状況、日平均値）



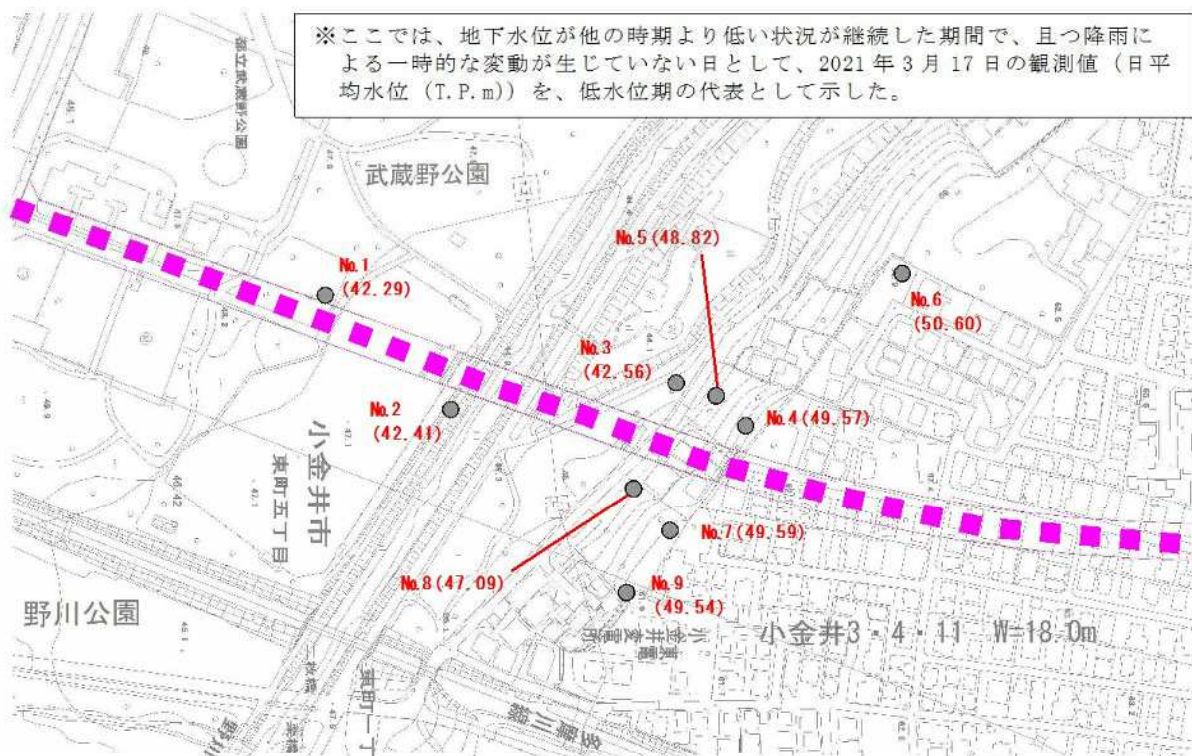


図 2.2.1-8 現地調査地点と観測状況（低水位期）

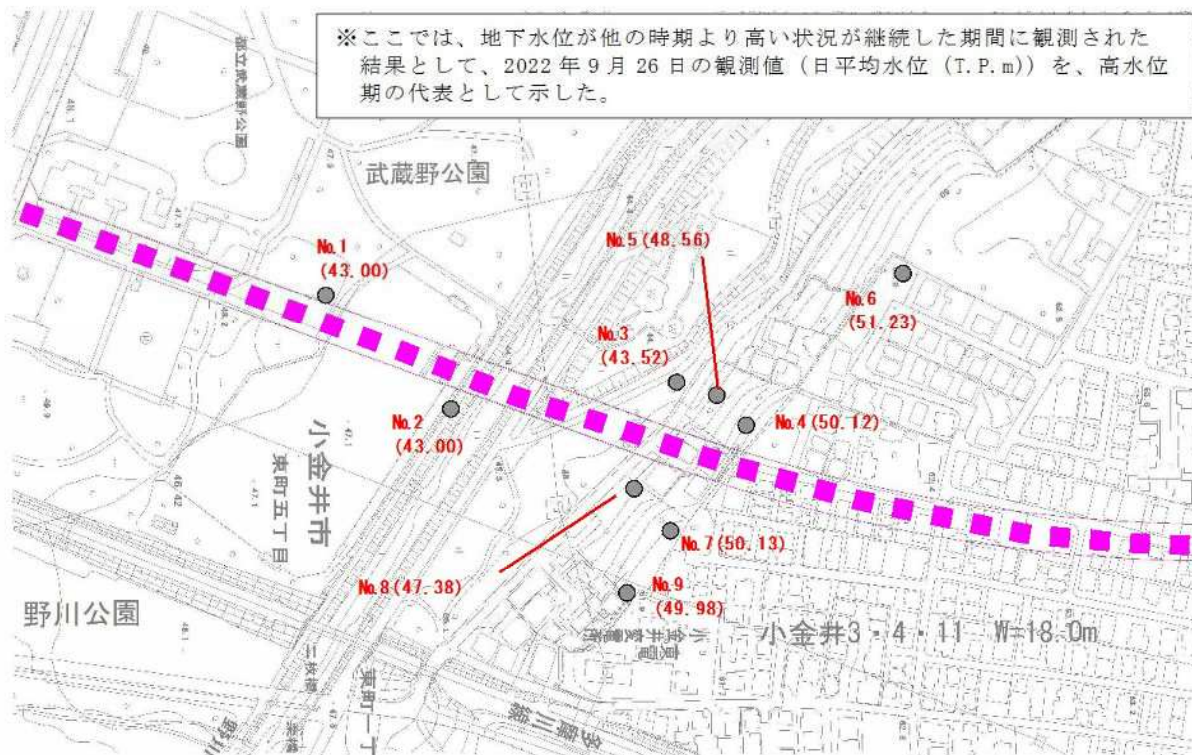


図 2.2.1-9 現地調査地点と観測状況（高水位期）



## オ 湧水の状況

「東京の湧水マップ 平成30年度調査」に示されている主な湧水地点は図2.2.1-10のとおりであり、計画路線に近接する湧水として、南東側約500m付近の「都立野川公園蜚池流入口 (Mu-68)」、南東側約910m付近の「野川公園 (Mu-37、41、42)」、北西側約850m付近の「美術の森緑地 (Mu-65)」が示されている。この内、「野川公園」及び「美術の森緑地 (はげの森美術館)」については、東京の名湧水57選に選定されている湧水となる。なお、上述した地域の地下水の流れを考慮した場合、南東側の「都立野川公園蜚池流入口」及び「野川公園」は計画路線から下流側に位置することとなる。

また、計画路線に隣接する野川第一調節池内には、国分寺崖線からの湧水を活用しピオトープとして整備された「ドジョウ池」が存在する。なお、ドジョウ池に流入する湧水の涵養域は、上述した地域の地下水流動から、計画路線の上流側に分布する武蔵野礫層の地下水であると推察される。



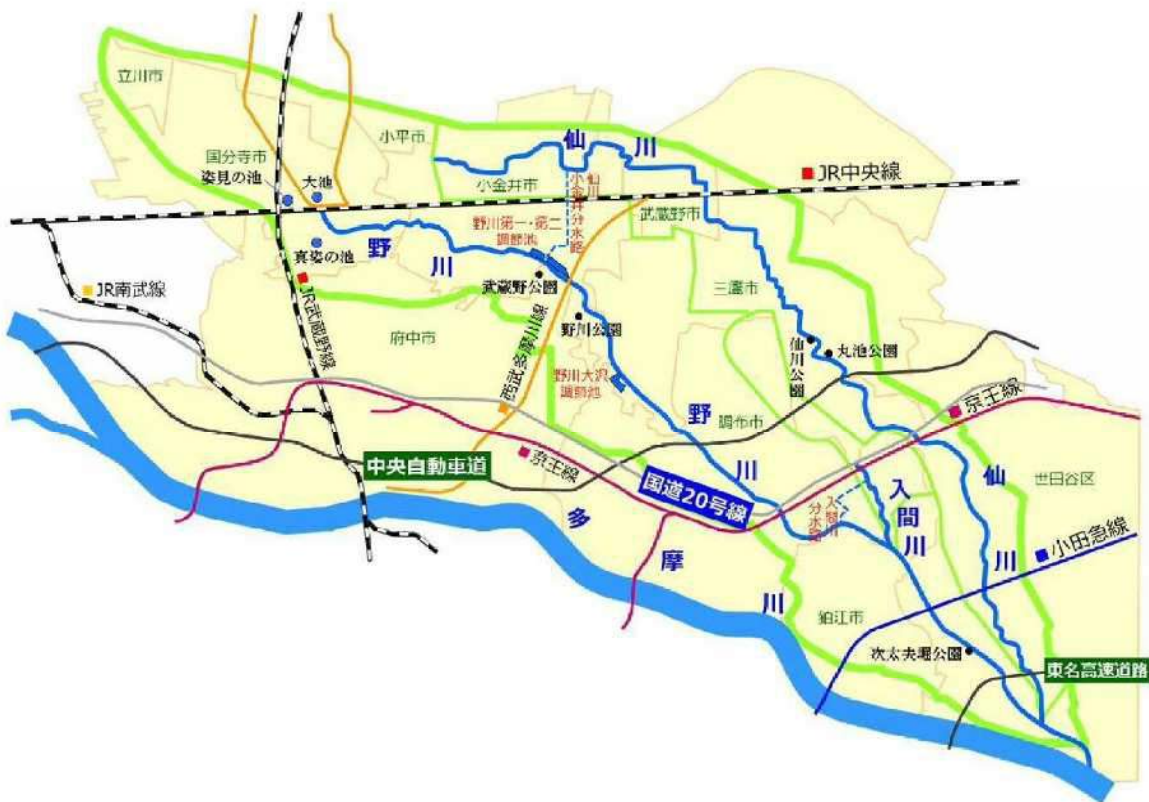
資料：東京の湧水マップ 平成30年度調査

図 2.2.1-10 計画路線周辺の主な湧水

## キ 河川の状況

計画路線が交差する野川は多摩川の一次支川であり、国分寺市東恋ヶ窪の株式会社日立製作所中央研究所敷地内の大池に源を発し、国分寺崖線の湧水を集めながら崖線下をほぼ南東方向に流れ、小金井市、三鷹市、調布市及び狛江市を経て、世田谷区二子玉川付近で多摩川に合流している。野川の支川には仙川及び入間川があり、その他に清水川、逆川、佐須用水等が流入している。

湧き水を主たる水源とする野川では、流域の市街化により雨水が地下に浸透しにくい状況が生まれ、水の需給バランスが維持されるような望ましい水循環の形成が困難になっている。結果、安定した流量が確保できず、しばしば瀬切れが発生する状況となっている。そのため、野川では河川流量を確保するため、粘土張りにより河川水の地下への浸透を低減する対策が行われている。



資料：野川流域河川整備計画 概要（東京都 HP）

図 2.2.1-11 河川の状況



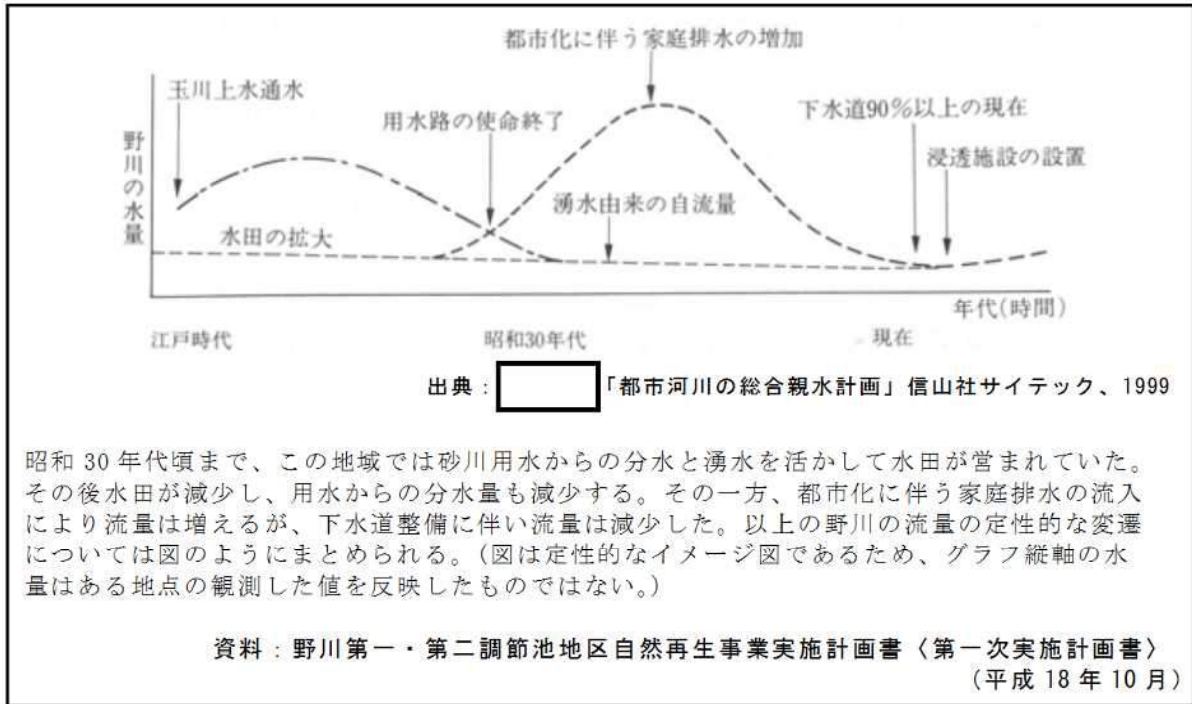
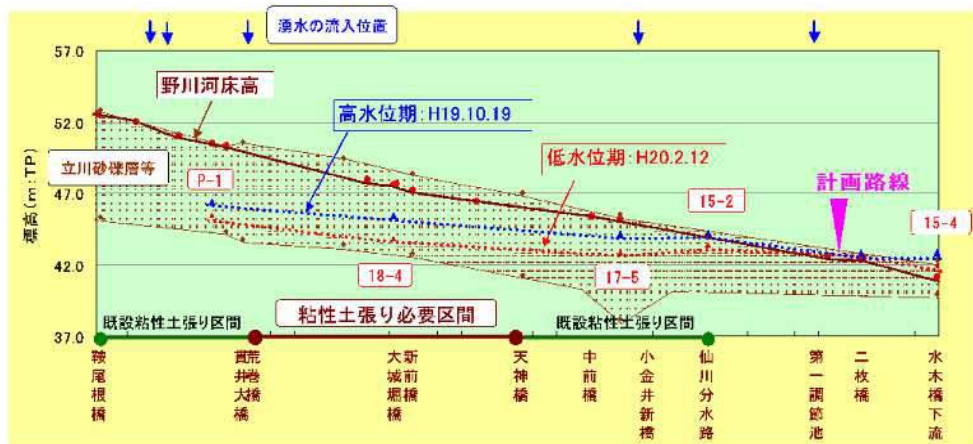


図 2.2.1-12 野川の流量の歴史的変遷・模式図

野川の河床高と浅層地下水との関係を図 2.2.1-13 に示す。この図によると野川の河床は立川砂礫層のほぼ上部に位置するが、上流側では立川砂礫層中の地下水が河床より常時低い状況となっており、河床から地下への漏水が避けられない状況にある。一方、計画路線は第一調節池と二枚坂の間に位置するが、当該区間前後で地下水位と河床高とが同程度となる。



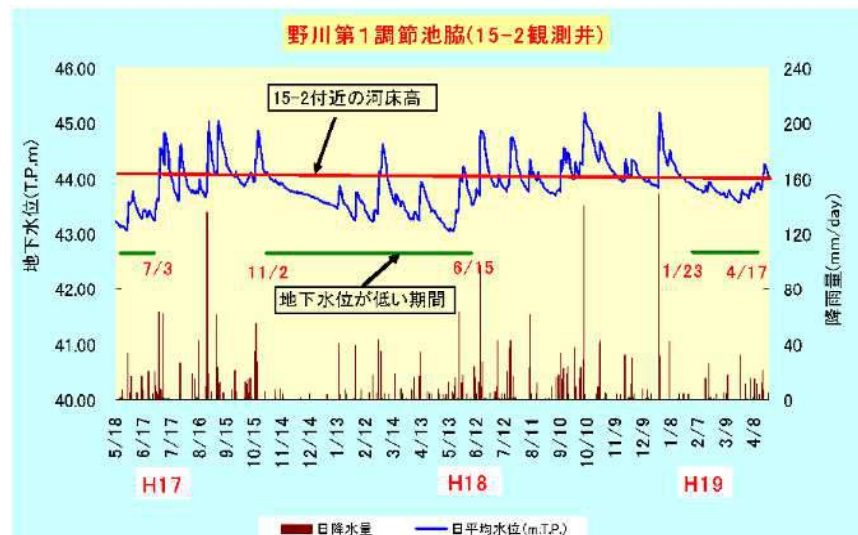
資料：野川上流域における河川水量確保に関する検討（平 20. 都土木技術センター年報）

図 2.2.1-13 野川の河床高と浅層地下水との関係（鞍尾根橋～水木橋下流）



過去に第一調節池脇の観測井で確認された地下水位変動と河床との関係を図 2.2.1-14 に示す。当時の調査結果によれば、地下水位が河床より高い時期と低い時期が混在しており、年間を通じて地下水位が河床より低いという状況ではない。

以上の関係性は図 2.2.1-2～図 2.2.1-4 の通り今回実施している地下水の現地調査結果からも伺える。



資料：野川上流域における地下水環境と河川水量確保に関する検討  
(平 19. 都土木技術センター年報)

図 2.2.1-14 野川の河床高と浅層地下水との関係（第一調節池脇）

## (2) 予測・評価及び環境保全対策の検討

事業の実施に伴う地下水への影響について、地域の地下水の状況と事業計画を重ね合わせ、定性的に予測を実施した。また、地下水の影響を最小限に留めるための環境保全対策について検討を行った。

なお、本検討においては、現時点で橋梁、掘割、地下の3つの計画案が検討されているため、各案毎に検討を行い比較評価を行った。

### ア 予測・評価の前提条件

前提条件とした計画案の概要等を図 2.2.1-2～図 2.2.1-4 及び表 2.2.1-1 に示す。

### イ 予測・評価の結果

予測・評価結果を表 2.2.1-3～表 2.2.1-4 に示す。また、環境保全対策を表 2.2.1-6 に示す。

表 2.2.1-2 予測・評価の前提条件（変更範囲等）


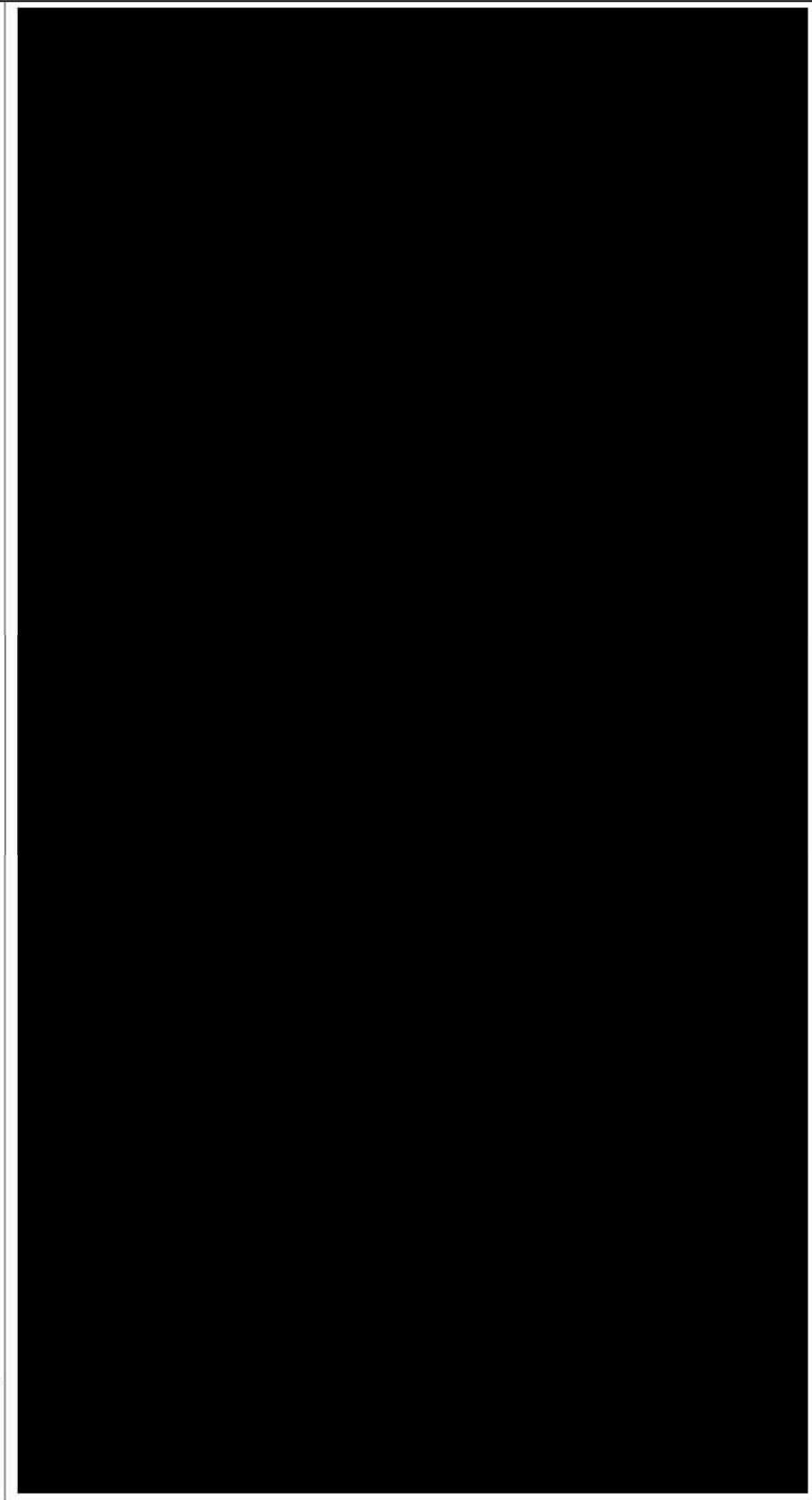
橋梁案	掘割案	地下案
		



表 2.2.1-3 予測・評価の結果

想定される影響など	橋梁案	掘削案	地下案
<p><b>&lt;地下掘削による影響&gt;</b>  地下の掘削作業時に、掘削面から多量の地下水が湧出することで、周囲の地下水位が低下するおそれがある。  影響リスクは、帯水層の改変範囲の大きさ、湧出時間（＝地下工事の期間）に比例する。  湧出を抑制すれば、時間の経過と共に水位の復水が見込まれる。</p>	(立川面)	(立川面)	(立川面)
	(武蔵野面)	(武蔵野面)	(武蔵野面)
<p><b>&lt;地下構造物による流動阻害&gt;</b>  土留壁や本体構造物が地下水流動を阻害することで、上流側でダムアップによる地下水位の上昇、下流側でダムダウンによる地下水位の低下が生じるおそれがある。  一方で、地下水は3次元的に広がっているため、構造物に対する地下水の回り込みが生じる。そのため、水位変化は構造物背面で顕著に生じるが、離隔に比例して影響は小さくなる。  地下水の流れ方向に対し構造物が直角に交差するほど、また、帯水層を遮断する範囲が大きいほど、水位変動におよぼす影響が大きい、影響範囲も広がる。</p>	(立川面)	(立川面)	(立川面)
	(武蔵野面)	(武蔵野面)	(武蔵野面)

表 2.2.1-4 予測・評価の結果

想定される影響など	橋梁案	掘割案	地下案
<p><b>&lt;地下構造物内への漏水&gt;</b>            構築後の地下構造物に地下水が多量に漏水することで、周囲の地下水位が低下するおそれがある。            構造物の止水性が確保できれば、漏水による影響は防止できる。</p>	<p>(立川面)</p>	<p>(立川面)</p>	<p>(立川面)</p>
<p><b>&lt;地下水の低下に起因する湧水への影響&gt;</b>            地下水の著しい低下が生じる範囲に湧水が存在する場合、湧水量の減少もしくは枯渇が生じるおそれがある。</p>	<p>(武蔵野面)</p>	<p>(武蔵野面)</p>	<p>(武蔵野面)</p>



表 2.2.1-5 予測・評価の結果

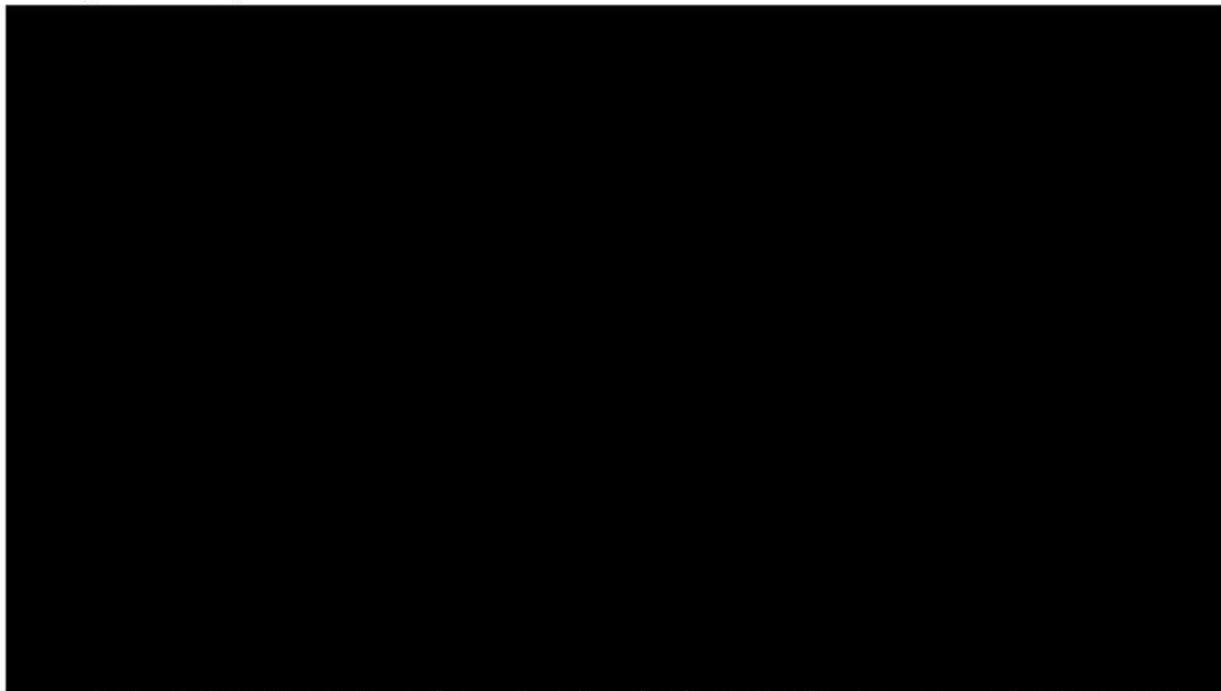
想定される影響など	橋梁案	掘割案	地下案
<地下水及び湧水の変化に伴う野川への影響>			
評価			

表 2.2.1-6 環境保全対策

環境保全対策	橋梁案	掘割案	地下案



(影響範囲の試算)



資料：地質調査(2北南-小金井3・4・11外1路線)報告書(令和3年3月、大建基礎株式会社)  
 資料：地質調査(3北南-小金井3・4・11外1路線)報告書(令和3年10月、大建基礎株式会社)

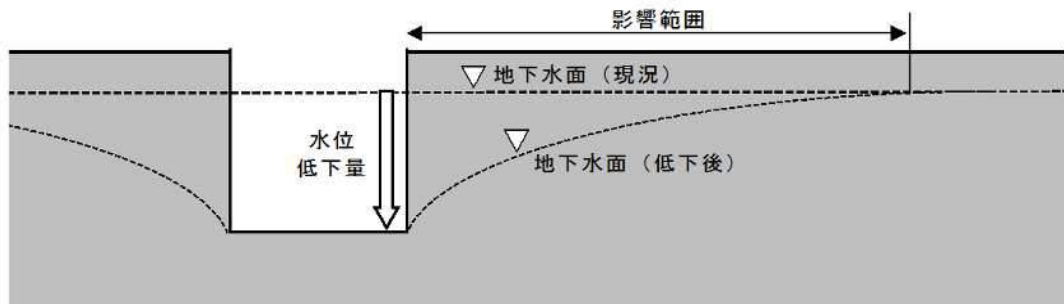


図 影響範囲の概念図

地層層序			
時代	地層名	地層記号	主な土質名
更新世	表土・埋土・崩積土	T	黒ボク
	崩積土	dt	ローム質砂礫土、砂質粘土
	黒ボク	Kb	黒ボク
第四紀	立川ローム	Lm1	ローム、粘土
	立川礫層	Tg	砂礫
	武蔵野ローム	Lm2	ローム
	武蔵野礫層	Mg	砂礫、細砂
上部層序	砂質土層	KZ-g	細砂、粘土混じり細砂、粘土質細砂、砂質粘土
	浮石層	KZ-p	浮石、細砂
	固縮粘土層	KZ-c	粘土、砂混じり粘土、シルト、砂質粘土
	礫質土層	KZ-g	砂礫、礫混じり細砂、細砂

図 試算に用いた条件の根拠

表 現場透水試験結果

表4-3-1 現場透水試験結果
[Redacted]
表4-3-1 現場透水試験結果
[Redacted]

資料：地質調査(2北南-小金井3・4・11外1路線)報告書 (令和3年3月、大建基礎株式会社)

資料：地質調査(3北南-小金井3・4・11外1路線)報告書 (令和3年10月、大建基礎株式会社)



## 2.2.2 動物・植物

### (1) 動物・植物の状況

#### ア 既往の現地調査の概要

計画路線周辺に生息・生育する動物・植物について、既往の現地調査結果を用いて把握した。使用した既往の現地調査結果報告書を表 2.2.2-1 に示す。

なお、調査Ⅰは本業務の検討対象である都市計画道路小金井3・4・11号線に係る環境調査として現地調査を実施したもので、動物については道路計画線端部から250m程度の範囲を、植物については道路計画線端部から100m程度の範囲を調査範囲とし現地調査を実施したものである。

一方、調査Ⅱ～調査Ⅶは別事業の一環として行われている調査であり、調査時期や調査範囲にバラつきがあるものの、一部が調査Ⅰの調査範囲と重複するため、それぞれの調査結果を活用し動物・植物の生息・生育に係る情報を補完した。

※調査Ⅱ～調査Ⅵ：「野川第一・第二調節池地区自然再生事業」の一環として実施したモニタリング調査  
 調査Ⅶ：武蔵野公園の環境調査

表 2.2.2-1 使用した現地調査結果報告書

	報告書名等	調査期間	備考
調査Ⅰ	環境概況調査委託（2北南-小金井3・4・11外1路線）報告書 （令和3年11月、ユーロフィン日本環境株式会社）	令和2年11月 ～令和3年8月	
調査Ⅱ	野川生物調査委託（その8）報告書 （平成28年3月、株式会社フィスコ）	平成27年7月 ～平成28年2月	情報補完
調査Ⅲ	野川生物調査委託（その9）報告書 （平成29年3月、株式会社フィスコ）	平成28年7月 ～平成29年1月	情報補完
調査Ⅳ	野川生物調査委託（その10）報告書 （平成30年3月、株式会社海洋生物研究所）	平成29年8月 ～平成30年1月	情報補完
調査Ⅴ	野川生物調査委託（その11）報告書 （平成31年3月、株式会社水辺環境研究所）	平成30年6月 ～平成31年1月	情報補完
調査Ⅵ	野川生物調査委託（その12）報告書 （令和2年3月、株式会社フィスコ）	令和元年6月 ～令和2年2月	情報補完
調査Ⅶ	西部公園緑地事務所委託業務報告書（速報版）	令和3年4月 ～令和4年5月	情報補完

表 2.2.2-2 現地調査の実施状況

	哺乳類	鳥類	両生類 爬虫類	昆虫類	魚類	底生動物	クモ類	陸産貝類	植物
調査Ⅰ	○	○	○	○	○	○	—	—	○
調査Ⅱ	—	—※	—	○	○	○	—	—	○
調査Ⅲ	—	—※	—	○	○	○	—	—	○
調査Ⅳ	—	—※	—	○	○	○	—	—	○
調査Ⅴ	—	—※	—	○	○	○	—	—	○
調査Ⅵ	—	—※	—	○	○	○	—	—	○
調査Ⅶ	○	○	○	○	—	—	○	○	○

※調査Ⅱ～調査Ⅵでは複数の地域で調査を実施しているため、ここでは計画路線に近い委託箇所①の調査結果を補完情報として取り扱った（図 2.2.2-2 参照）。なお、鳥類の調査は委託箇所①で行われていないため、補完情報から除外した。

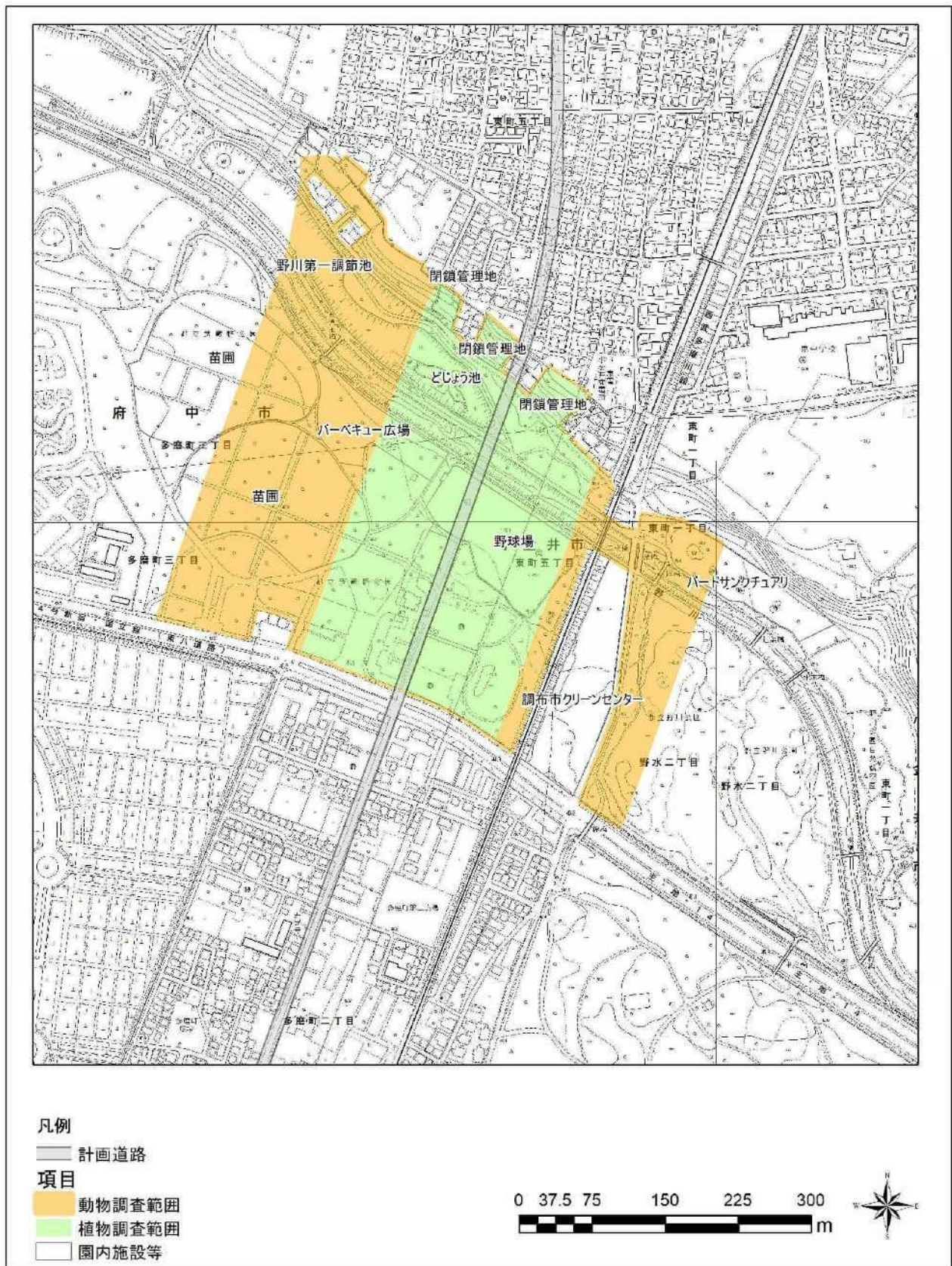
表 2.2.2-3 現地調査の概要（調査Ⅰ）

調査項目		調査地点、調査範囲	実施時期
動物	哺乳類	道路計画線端部から 250m 程度の範囲、 トラップ 2 箇所	春季(令和 3 年 4 月 19・20 日) 秋季(令和 2 年 11 月 12・13 日)
	鳥類	道路計画線端部から 250m 程度の範囲	冬季(令和 3 年 1 月 13 日) 春季(令和 3 年 5 月 11 日) 夏季(令和 3 年 7 月 6 日)
	両生類・ 爬虫類	道路計画線端部から 250m 程度の範囲	春季(令和 3 年 4 月 19・20 日) 夏季(令和 3 年 7 月 2 日)
	昆虫類	道路計画線端部から 250m 程度の範囲、 トラップ 2 箇所程度	春季(令和 3 年 5 月 6・7 日) 夏季(令和 3 年 8 月 2・3 日)
	魚類	道路計画線端部から 250m 程度の範囲の 河川(野川及び自然再生地)	夏季(令和 3 年 8 月 20 日)
	底生動物	道路計画線端部から 250m 程度の範囲の 河川(野川及び自然再生地)	夏季(令和 3 年 7 月 29 日)※
植物	植物相	道路計画線端部から 100m 程度の範囲	早春(令和 3 年 3 月 17 日) 春季(令和 3 年 4 月 27 日) 夏季(令和 3 年 7 月 2 日) 秋季(令和 2 年 11 月 4 日)
	植物群落	道路計画線端部から 100m 程度の範囲、 コドラート 7 カ所	夏季(令和 3 年 7 月 20 日)

※底生動物調査は春季に予定していたが、調査対象区間の野川は 6 月下旬まで水が無く調査ができない状況だったことから 7 月下旬の実施となった。

資料：環境概況調査委託（2 北南－小金井 3・4・11 外 1 路線）報告書  
（令和 3 年 11 月、ユーロフィン日本環境株式会社）





資料：環境概況調査委託（2北南－小金井3・4・11外1路線）報告書  
 （令和3年11月、ユーロフィン日本環境株式会社）

図 2.2.2-1 調査範囲（調査 I）

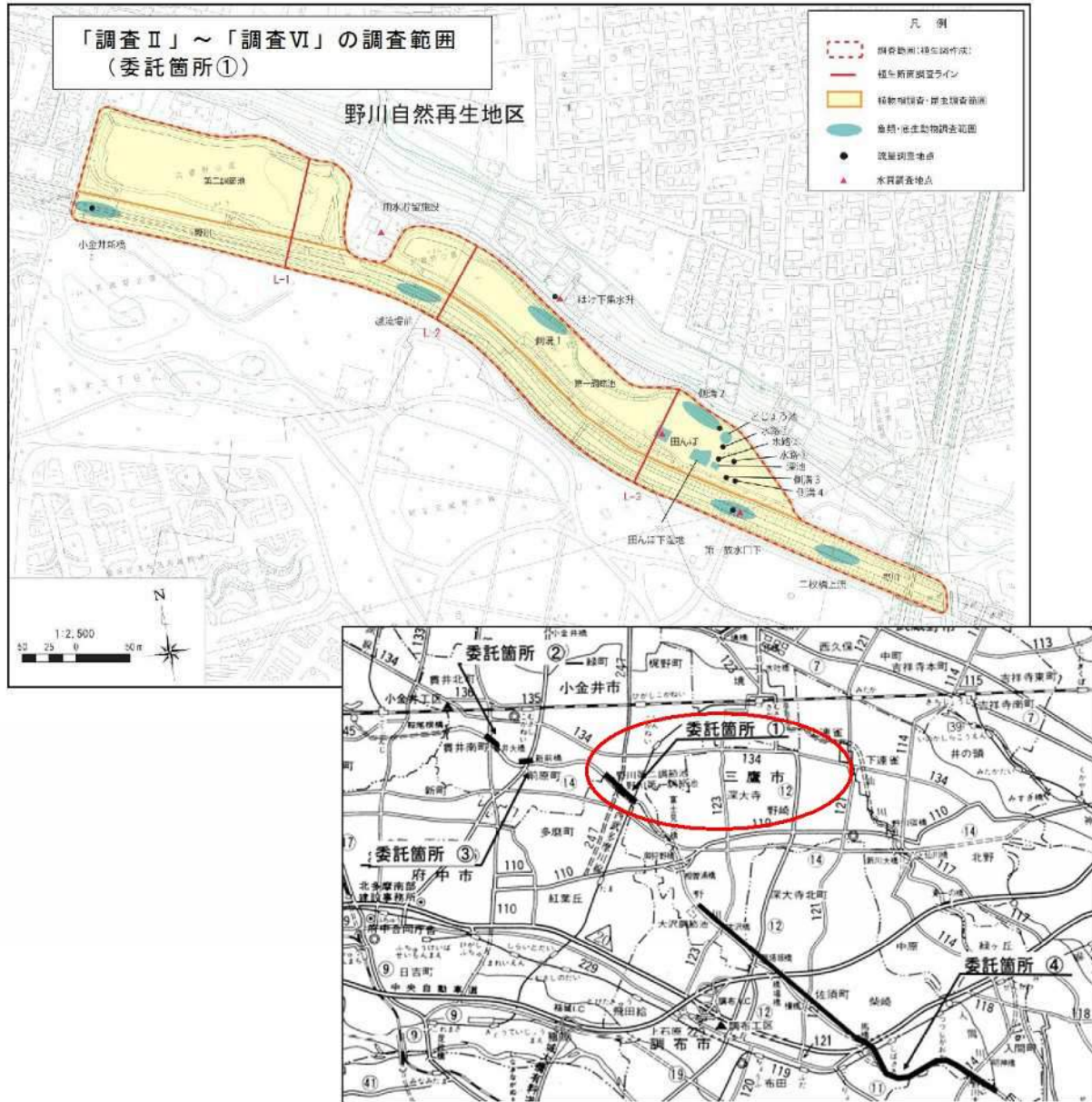


表 2.2.2-4 現地調査の概要①（その他の調査（調査Ⅱ～調査Ⅶ））

調査項目	実施時期	
哺乳類	調査Ⅶ	2021/8/10、11、17、18（夏季） 2021/10/26、28、11/4（秋季） 2022/2/3（冬季） 2022/3/24、25（早春季）
鳥類	調査Ⅱ	2015/7/31（夏季） 2015/10/13（秋季） 2016/2/3（冬季）
	調査Ⅲ	2016/8/1（夏季） 2016/10/14（秋季） 2017/1/1（冬季）
	調査Ⅳ	2017/8/9、10、18（夏季） 2017/10/14、11/6、7（秋季） 2018/1/15、16（冬季）
	調査Ⅴ	2018/8/15、16、17（夏季） 2018/10/20、21、22、23（秋季） 2019/1/15、16、17（冬季）
	調査Ⅶ	2021/4/28（春季） 2021/8/10、11（夏季） 2021/11/4、5、11（秋季） 2022/1/4、2/3（冬季）
両生類・爬虫類	調査Ⅶ	2021/8/10、11、17、18（夏季） 2021/10/26、28、11/4（秋季） 2022/2/3（冬季） 2022/3/24、25（早春季）
昆虫類	調査Ⅱ	2015/8/7、8、9、15、16（夏季） 2015/10/13、14、15、16、11/5（秋季） 2016/2/20、21（冬季）
	調査Ⅲ	2016/7/11、12、15（夏季） 2016/10/12、13、14（秋季） 2017/1/30、31（冬季）
	調査Ⅳ	2017/8/9、10（夏季） 2017/11/6、7（秋季） 2018/1/15、16（冬季）
	調査Ⅴ	2018/8/15、16、17（夏季） 2018/10/20、21、22、23（秋季） 2019/1/15、16、17（冬季）
	調査Ⅵ	2019/5/13、14（春季） 2019/7/22、8/1、2、5（夏季） 2019/9/30、10/1（秋季） 2020/2/3、4（冬季）
	調査Ⅶ	2021/4/30、5/6、7、11（春季） 2021/6/10、11、15、16（初夏季） 2021/8/2、3、4、5、10、11、17、18（夏季） 2021/10/20、21、26、28、11/4、10、11、17、18（秋季）
クモ類	調査Ⅶ	2021/6/10、11、15（初夏季） 2021/8/2、3、4、5、11（夏季） 2021/10/20、21、26、27、28、11/4、9、11（秋季）
陸産貝類	調査Ⅶ	2021/6/10、11、15、16（初夏季） 2021/8/17（夏季） 2021/10/26、27、11/9、10（秋季）
魚類	調査Ⅱ	2015/8/3、4、5（夏季） 2015/10/19、20、21（秋季） 2016/1/22、23、31（冬季）
	調査Ⅲ	2016/8/1、2、3（夏季） 2016/10/21、26（秋季） 2017/1/23、24、25（冬季）
	調査Ⅳ	2017/8/1、2、3、4（夏季） 2017/10/25、26、27、11/7（秋季） 2018/1/16、17、18、19（冬季）
	調査Ⅴ	2018/8/15、16、17（夏季） 2018/10/23、24、25（秋季） 2019/1/22、23、24（冬季）
	調査Ⅵ	2019/6/5（春季） 2019/8/5（夏季） 2019/10/21（秋季） 2020/2/3、4（冬季）
底生動物	調査Ⅱ	2015/8/3、4、5（夏季） 2015/10/19、20、21（秋季） 2016/1/22、23、31（冬季）
	調査Ⅲ	2016/8/1、2、3（夏季） 2016/10/21、26（秋季） 2017/1/23、24、25（冬季）
	調査Ⅳ	2017/8/1、2、3、4（夏季） 2017/10/25、26、27、11/7（秋季） 2018/1/16、17、18、19（冬季）
	調査Ⅴ	2018/8/15、16、17（夏季） 2018/10/23、24、25（秋季） 2019/1/22、23、24（冬季）
	調査Ⅵ	2019/6/5（春季） 2019/8/5（夏季） 2019/10/21（秋季） 2020/2/3、4（冬季）

表 2.2.2-5 現地調査の概要②（その他の調査（調査Ⅱ～調査Ⅶ））

調査項目	実施時期	
植物調査	調査Ⅱ	2015/7/29、30、31、8/10（夏季）      2015/10/26、28、29、30（秋季） 2016/2/1、3（冬季）
	調査Ⅲ	2016/7/6、7、8、14、19（夏季） 2016/10/7、10、11、13、15、19（秋季） 2017/1/22、23、25、28、29（冬季）
	調査Ⅳ	2017/8/9、10、18（夏季）      2017/11/6、7、8（秋季） 2018/1/15、16（冬季）
	調査Ⅴ	2018/6/26（初夏季）      2018/8/15、16、17、18、19、20（夏季） 2018/11/7、8、9、10（秋季）      2019/1/16、17、18、19（冬季）
	調査Ⅵ	2019/5/27、28（春季）      2019/7/22、24（夏季） 2019/9/30、10/1（秋季）      2020/2/3、4（冬季）
	調査Ⅶ	2021/4/28、30、5/6、7、12（春季） 2021/8/2、3、4、5、9（夏季）      2021/10/20、21、26、27、28（秋季） 2022/3/24、25（早春季）      2022/4/7（春季）



資料：野川生物調査委託（その12）報告書（令和2年3月、株式会社フィスコ）  
野川生物調査委託（その11）報告書（平成31年3月、株式会社水辺環境研究所）

※調査Ⅶの調査範囲は、武蔵野公園全域となっている。

図 2.2.2-2 調査範囲（その他の調査（調査Ⅱ～調査Ⅶ））



## イ 調査結果

### ①動物相

計画路線周辺の動物について、2021年度に実施した調査Ⅰにおいて哺乳類3目4科4種、鳥類10目25科35種、両生類・爬虫類3目7科8種、昆虫類14目136科425種、魚類3目4科11種、底生動物18目37科66種が確認された。

調査Ⅰ～調査Ⅶで確認された動物種について、表2.2.2-6の選定基準により注目される種を選定した。その結果、計画路線周辺に生息する注目される種として、表2.2.2-7～表2.2.2-8に示す鳥類10種、爬虫類5種、両生類2種、昆虫類18種、クモ類1種、陸産貝類1種、魚類8種、底生動物5種の注目される種が選定された。哺乳類については注目される種は確認されなかった。

※注目される種の確認位置図は、資料編に示す。

表 2.2.2-6 注目される動物種の選定基準

No.	略称	選定基準
①	文化財保護法	文化財保護法（昭和 25 年法律第 214 号、最終改正：令和 3 年 4 月 23 日法律第 22 号）に基づく国の天然記念物、特別天然記念物 ・特別天然記念物(特天) ・天然記念物(国天)
②	種の保存法	絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律（平成 4 年法律第 75 号、最終改正：令和 1 年 6 月 14 日法律第 37 号）における国内希少野生動植物種・国際希少野生動植物種 ・国内希少野生動植物種(国内) ・特定第一種国内希少野生動植物種(一種) ・特定第二種国内希少野生動植物種(二種) ・国際希少野生動植物種(国際)
③	環境省 2020	環境省レッドリスト 2020（令和 2 年 3 月、環境省） ・絶滅(EX)：我が国ではすでに絶滅したと考えられる種 ・野生絶滅(EW)：飼育・栽培下あるいは自然分布域の明らかに外側で野生化した状態でのみ存続している種 ・絶滅危惧 I 類(CR+EN)：絶滅の危機に瀕している種 ・絶滅危惧 I A 類(CR)：ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの ・絶滅危惧 I B 類(EN)：I A 類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの ・絶滅危惧 II 類(VU)：絶滅の危険が増大している種 ・準絶滅危惧(NT)：現時点での絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」に移行する可能性がある種 ・情報不足(DD)：評価するだけの情報が不足している種 ・絶滅のおそれのある地域個体群(LP)：地域的に孤立している個体群で、絶滅のおそれが高いもの
④	東京都 2020	東京都レッドリスト(本土部)2020 年版（令和 3 年 4 月、東京都環境局） ・絶滅(EX)：当該地域において、過去に生息していたことが確認されており、飼育・栽培下を含めすでに絶滅したと考えられるもの ・野生絶滅(EW)：当該地域において、過去に生息していたことが確認されており、飼育・栽培下では存続しているが、野生ではすでに絶滅したと考えられるもの ・絶滅危惧 I 類(CR+EN)：現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、野生での存続が困難なもの ・絶滅危惧 I A 類(CR)：ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの ・絶滅危惧 I B 類(EN)：I A 類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの ・絶滅危惧 II 類(VU)：現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、近い将来「絶滅危惧 I 類」のランクに移行することが確実と考えられるもの ・準絶滅危惧(NT)：現時点での絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」として上位ランクに移行する要素を有するもの ・情報不足(DD)：環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧のカテゴリーに移行し得る属性を有しているが、生息状況をはじめとして、ランクを判定するに足る情報が得られていないもの ・留意種(*)：現時点では準絶滅危惧のレベルではないが、相対的に数が少ない種であり、次の理由（選定理由①～⑥）のいずれかにより容易に個体数が減少することがあり得るため、その動向に留意する必要があるもの ＜選定理由＞ ①生息、生育環境が減少もしくは悪化することで、個体数が減少するおそれがある。 ②生息地の限定もしくは分断による個体群の縮小あるいは孤立化により、個体数が減少するおそれがある。 ③人為的な環境配慮により個体群が維持されているが、人為的な環境配慮が失われた場合、個体数が減少するおそれがある。 ④外来種の影響により、個体数が減少するおそれがある。 ⑤生活史の一部または全部で特殊な環境条件を必要としている種であり、これら特殊な環境が失われた場合、個体数が減少するおそれがある。 ⑥かつて悪化していた環境の回復にともない個体群規模が戻ったが、その状況は不安定であり、環境が変化すれば個体数が減少するおそれがある。

表 2.2.2-7 既往の現地調査結果から把握した注目される種（動物相①）

分類	No.	日名	科名	和名(和名)	和名(学名)	現地調査							東海北陸道東山連					
						I	II	III	IV	V	VI	VII	①	②	③	④		
哺乳類	計	0種	0科	0種	0種	0種												
	1	ツル	クイナ	クイナ	<i>Nellus squaricus</i>	●												DO
	2	タカ	タカ	ツル	<i>Accipiter gularis</i>							●						VI
	3	ツル	カワセミ	カワセミ	<i>Alcedo atthis</i>	●												NT
	4	ツル	カワセミ	カワセミ	<i>Alcedo atthis</i>	●												NT
	5	スズメ	サンショウクイ	サンショウクイ	<i>Parus montanus</i>													VI
	6	スズメ	サンショウクイ	リュウキュウサンショウクイ	<i>Parus montanus</i>													DO
	7	スズメ	モズ	モズ	<i>Lanius excubitorides</i>	●												VI
	8	スズメ	カラス	カラス	<i>Cyanoptera cyaneus</i>	●												NT
	9	スズメ	ムシクイ	ヒンダイムシクイ	<i>Phylloscopus coleroides</i>	●												CR
10	スズメ	アトリ	アトリ	<i>Lophopus inornatus</i>	●												NT	
計	4種	8科	10種	10種	7種							5種	0種	0種	0種	2種	10種	
鳥類	1	ヤモリ	ニホンヤモリ	ニホンヤモリ	<i>Troglodytes japonicus</i>	●												●
	2	ヒヨドリ	ヒヨドリ	ヒヨドリ	<i>Ploceus hypoleucos</i>	●												VI
	3	カサハシ	カサハシ	カサハシ	<i>Actinopygia leucostriata</i>	●												VI
	4	アミハシ	アミハシ	アミハシ	<i>Elanus leucurus</i>	●												VI
	5	アオダイショウ	アオダイショウ	アオダイショウ	<i>Elanus leucurus</i>	●												NT
計	1種	2科	5種	5種	4種							4種	0種	0種	0種	2種	2種	
両生類	1	ヒキガエル	ヒキガエル	ヒキガエル(和名)	<i>Rana japonica</i>	●												VI
	2	アズマヒキガエル	アズマヒキガエル	アズマヒキガエル	<i>Discophrys japonica</i>	●												VI
計	1種	2科	2種	2種	2種													2種
昆虫類	1	トンボ	アオイトトンボ	アオイトトンボ	<i>Isotriaeta japonica</i>													IN
	2	トンボ	アオイトトンボ	アオイトトンボ	<i>Isotriaeta japonica</i>													VI
	3	トンボ	アオイトトンボ	アオイトトンボ	<i>Isotriaeta japonica</i>	●												NT
	4	トンボ	アオイトトンボ	アオイトトンボ	<i>Isotriaeta japonica</i>	●												NT
	5	トンボ	アオイトトンボ	アオイトトンボ	<i>Isotriaeta japonica</i>	●												NT
	6	トンボ	アオイトトンボ	アオイトトンボ	<i>Isotriaeta japonica</i>	●												NT
	7	カメムシ	カメムシ	カメムシ	<i>Stenopoma japonica</i>	●												NT
	8	カメムシ	カメムシ	カメムシ	<i>Stenopoma japonica</i>	●												NT
	9	カメムシ	カメムシ	カメムシ	<i>Stenopoma japonica</i>	●												NT
	10	カメムシ	カメムシ	カメムシ	<i>Stenopoma japonica</i>	●												NT
	11	カメムシ	カメムシ	カメムシ	<i>Stenopoma japonica</i>	●												NT
	12	カメムシ	カメムシ	カメムシ	<i>Stenopoma japonica</i>	●												NT
	13	カメムシ	カメムシ	カメムシ	<i>Stenopoma japonica</i>	●												DO
	14	カメムシ	カメムシ	カメムシ	<i>Stenopoma japonica</i>	●												NT
	15	カメムシ	カメムシ	カメムシ	<i>Stenopoma japonica</i>	●												NT
	16	カメムシ	カメムシ	カメムシ	<i>Stenopoma japonica</i>	●												NT
	17	ハチ	ハチ	ハチ	<i>Apis mellifera</i>	●												DO
	18	ハチ	ハチ	ハチ	<i>Apis mellifera</i>	●												NT
計	5種	11科	18種	18種	9種	4種	3種	0種	0種	3種	7種	0種	0種	1種	13種			

- ※1 種名及び分類は、原則として「河川水辺の国勢調査のための生物リスト(2021年版)(令和3年、国土交通省)」に準拠した。
- ※2 ヒキガエルについて
  - ・東京都は亜種アズマヒキガエルの自然分布域であるが、西日本の亜種ニホンヒキガエルと交雑が進んでいることが明らかにされている。今回確認されたのは幼体と幼生であることから、亜種アズマヒキガエルかニホンヒキガエルか同定されていないため「ヒキガエル」とした。
  - (資料：環境概況調査委託(2北南-小金井3・4・11外1路線)報告書(令和3年11月、ユーロフィン日本環境株式会社))
  - ・ここでは、「ヒキガエル」が「アズマヒキガエル」である可能性が否定できないため、アズマヒキガエルと同様の扱いとした。
- ※3 既往の現地調査結果報告書で「シラホシハナムグリ(昆虫類)」が確認されているが、東京都では外来個体が侵入しており、報告書でも移入個体群として記録されている。そのため、重要種として扱わなかった。
- (資料：環境概況調査委託(2北南-小金井3・4・11外1路線)報告書(令和3年11月、ユーロフィン日本環境株式会社))



表 2.2.2-8 既往の現地調査結果から把握した注目される種（動物相②）

分類	No.	日名	科名	種名 (和名)	種名 (学名)	現地調査							重要種選定基準			
						I	II	III	IV	V	VI	VII	①	②	③	
タモ類	1	タモ	トウナグモ	キシノウエトウナグモ	<i>Latouchia typica</i>							●				NT
	計	1日	1科	1種		0種	0種	0種	0種	0種	0種	1種	0種	0種	0種	1種
陸生 昆虫	1	明眼	スナガイ	スナガイ	<i>Gastroscoia armigera</i>							●				NT
	計	1日	1科	1種		0種	0種	0種	0種	0種	0種	1種	0種	0種	0種	1種
魚類	1	コイ	コイ	ギンブナ	<i>Carrasius</i> sp.			●	●	●	●					DD
	-			フナ類 (※2)	<i>Carrasius</i> sp.		●									(DD)
	2			オイカワ	<i>Opsarichthys platypus</i>		●	●	●	●	●					DD
	3			タナゴ (※3)	<i>Acheilognathus neohobbesi</i>						●					EX
	4			ドジョウ類 (※4)	<i>Dioscorus angusticaudatus</i> sp. complex		●	●	●	●	●					3I-DD
	5			ヒメシマドジョウ	<i>Gobitis</i> sp. BIRAL type 1		●									VI
	-			シマドジョウ種群 (※5)	<i>Gobitis hime</i> complex			●				●				(VI)
	6			ホトケドジョウ	<i>Lebia schizogona</i>			●								EX
	7	メダカ	メダカ	ミナミメダカ	<i>Oryzias latipes</i>		●									VI
	-			メダカ類 (※6)	<i>Oryzias</i> sp.			●	●	●	●					(VI)
	8	スズキ	ハゼ	ウキゴリ	<i>Gymnocheilus aratazai</i>											NT
計	3日	4科	8種		5種	5種	5種	4種	5種	5種	0種	0種	0種	4種	11種	
水生 動物	1	明眼	オカモノソウガイ	ナガオカモノソウガイ	<i>Dryoloma hirasei</i>		●									NT
	2	混有種	オカモノソウガイ	カワヨシソウガイ	<i>Dryoloma kawayoshi</i>				●		●					CR
	3	ゴビ	オカモノソウ	スジゴビ	<i>Dryoloma kawayoshi</i>			●								+
	4	カメムシ (半翅)	アメンボ	オオアメンボ	<i>Amenobas</i>		●									NT
	5	ヘビトンボ	センブリ	センブリ属 (※7)	<i>Stalys</i> sp.						●					CR
計	5日	5科	5種		3種	1種	0種	1種	0種	3種	0種	0種	0種	0種	5種	

- ※1 種名及び分類は、原則として「河川水辺の国勢調査のための生物リスト(2021年版)(令和3年、国土交通省)」に準拠した。
- ※2 フナ類について  
フナ類は確実な種の同定に至らなかったが、「ギンブナ」に該当する可能性が高いため重要種として扱った。(資料：環境概況調査委託(2北南-小金井3・4・11外1路線)報告書(令和3年11月、ユーロフィン日本環境株式会社))
- ※3 タナゴについて  
「レッドデータブック東京」によると、タナゴは都内の区部、北多摩部では絶滅したと考えられている。そのため、確認された個体は放流由来個体の可能性がある。
- ※4 ドジョウ類について  
・ドジョウ類は確実な種の同定に至らなかったが、「ドジョウ」「キタドジョウ」に該当する可能性が高いため重要種として扱った。ドジョウ類は近年、遺伝子レベルの分析から外観から識別の難しい複数の種からなることが明らかになっており、今回確認されたものはドジョウかキタドジョウと考えられる。(資料：環境概況調査委託(2北南-小金井3・4・11外1路線)報告書(令和3年11月、ユーロフィン日本環境株式会社))  
・ドジョウは近年、「ドジョウ」、「キタドジョウ」、「シノビドジョウ」、「ヒョウモンドジョウ」に細分された。このうち、東京都に自然分布する可能性が考えられる種は「ドジョウ」或いは「キタドジョウ」となる。環境省レッドリストでは「ドジョウ」はNT、「キタドジョウ」はDDに該当する。東京都レッドリストでは北多摩及び本土部で、いずれもDDに該当する。
- ※5 シマドジョウ種群について  
・ここでは、委託報告書で「シマドジョウ」と掲載されていた種を「シマドジョウ種群」とした。  
・シマドジョウは近年、「ヒガシシマドジョウ」、「ニシシマドジョウ」、「オオシマドジョウ」に細分されたが、このうち東京都に自然分布する種は「ヒガシシマドジョウ」のみである。そのため、ここでは「ヒガシシマドジョウ」と同様の扱いとした。
- ※6 メダカ類について  
・ここでは、委託報告書で「メダカ」及び「メダカ類」と掲載されていた種を「メダカ類」とした。  
・メダカは近年、「キタノメダカ」及び「ミナミメダカ」に細分された。このうち東京都に自然分布する種は「ミナミメダカ」のみである。ただし、ヒメダカ等放流由来の個体との交雑が各地で進んでいるため、確認個体が交雑種の可能性がある。しかし、ここでは「ミナミメダカ」と同様の扱いとした。  
・ここでは、「ミナミメダカ」である可能性が否定できないため、ミナミメダカと同様の扱いとした。
- ※7 センブリ属について  
・センブリ属は、「ネグロセンブリ」、「トウホククロセンブリ」、「ヤマトセンブリ」等の可能性がある。「ネグロセンブリ」及び「トウホククロセンブリ」の場合は東京都レッドリストのVUに該当する。「ヤマトセンブリ」の場合は環境省レッドリストのDD及び東京都レッドリストのCRに該当する。その他の場合はランク外となる。

表 2.2.2-9 注目される動物種の生息状況（鳥類①）


	<p>タイナ（ツル科） 東京都レッドリスト 情報不足 (DD)</p>
	<p>生態等 体長 29cm。成鳥は額から尾までの上面は茶褐色で、顔から胸にかけては青灰色。平地から低山地の河川、湖沼、湿地などに生息し、植物の種子や昆虫類、カエル類、小魚などを食べる。 都内では海岸の埋立地や河川のヨシやガマが生育する湿地に少数渡来し越冬する。近年やや増加傾向にある。</p> <p>確認状況 2021 年度秋季に [ ] において、1 箇所 で 1 例 が確認された。</p>
 <p>※写真は「レッドデータブック東京」より</p>	<p>ツミ（タカ科） 東京都レッドリスト 絶滅危惧 II 類 (VU)</p>
	<p>生態等 体長雄 27cm、雌 30cm。雄成鳥は頭部からの上面が暗青灰色で体下面は白く、胸から脇は淡橙色。平地から山地の樹林に生息し、繁殖する。主にスズメ、シジュウカラなどの小鳥や昆虫類を食べる。 都内では、平地や丘陵地、山地などの樹林や河畔林に生息するが、個体数は少ない。最近では市街地の公園などの樹林でも営巣することがある。</p> <p>確認状況 2021 年度春季に [ ] の上空を飛翔する 1 例 が確認された。</p>
	<p>オオタカ（タカ科） 環境省レッドリスト 準絶滅危惧 (NT) 東京都レッドリスト 絶滅危惧 II 類 (VU)</p>
	<p>生態等 体長雄 50cm、雌 56.5cm。頭部からの体上面は暗青灰色で、体下面は白く細い暗灰色の横帯がある。平地から山地の樹林に生息し、繁殖する。ハト類やカモ類など主に中型の鳥類を食べる。 都内では低山地から丘陵地、平地の人があまり立ち入らない樹林で営巣するが、個体数は少ない。冬は、公園など都市緑地の樹林でも見られる。 [ ] で営巣しているとの情報がある。</p> <p>確認状況 2021 年度秋季に [ ] の上空を飛翔する 1 例 が確認された。 2022 年春季に [ ] の上空を飛翔する 1 例 が確認された。</p>



表 2.2.2-10 注目される動物種の生息状況（鳥類②）

	<p>カワセミ（ブッポウソウ科） 東京都レッドリスト 準絶滅危惧 (NT)</p> <p>生態等 体長 17cm。成鳥は背面が光沢のある青色で、頭部、頬、雨覆は黒褐色。胸からの体下面は橙色。平地から低山地の河川、湖沼、都市公園の池などに生息する。小魚やザリガニ、エビ類、カエル類などを食べる。 都内では水質汚染が激しかった 1960～70 年代は多摩地域の西部まで分布が縮小したが、近年は都市部の小河川や公園の池でも見られる。</p> <p>確認状況 2021 年度秋季及び冬季に [ ] において、3 箇所 で 3 例が確認された。</p>
 <p>※写真は「レッドデータブック東京」より</p>	<p>サンショウクイ（サンショウクイ科） 環境省レッドリスト 絶滅危惧 II 類 (VU) 東京都レッドリスト 準絶滅危惧 (NT)</p> <p>生態等 体長 20cm。雄成鳥は額、喉から側頭と体下面は白く、背面は灰色。翼と尾は黒褐色。頭頂から後頭、過眼線は黒くつながっており、嘴と足は黒色。平地から山地の広葉樹林に生息し、昆虫類やクモ類を食べる。 都内では、以前は都心部の樹林で繁殖期の記録があり、南多摩や西多摩の樹林に生息していたが、近年は渡りの時期に通過個体が見られるのみである。</p> <p>確認状況 2021 年度春季に [ ] の上空を飛行する 1 例が確認された。</p>
<p>写真なし</p>	<p>リュウキュウサンショウクイ（サンショウクイ科） 東京都レッドリスト 情報不足 (DD)</p> <p>生態等 体長 20 cm。雄成鳥は額から眉斑が白く、その面積が狭い。頭頂からの体下面は光沢のある青黒色。雌成鳥は頭頂から背に灰色みがある。 2008 年以降九州北部から四国南部に生息域が拡大し、東京都でも 2017 年に記録されている。</p> <p>確認状況 2021 年度秋季に [ ] 内において、1 箇所 で 1 例が確認された。</p>



表 2.2.2-11 注目される動物種の生息状況（鳥類③）

	モズ（モズ科） 東京都レッドリスト 絶滅危惧 II 類 (VU)
	<p>生態等</p> <p>体長 20cm。雄成鳥は頭部から後頭が茶褐色で、過眼線は黒い。背面は灰色、翼と尾は黒褐色。平地から山地の疎林、耕作地、河畔林、公園などに生息し、昆虫類やミミズ類、両生・爬虫類などを食べる。 都内では河川敷、丘陵地の低木林や草地、雑木林、耕作地、公園、住宅地などに広く生息し、繁殖をしている。</p>
<p>確認状況</p> <p>2021 年度秋季及び冬季に [ ] や [ ] 付近において、3 箇所 で 3 例が、2022 年度秋季に [ ] 内において、1 箇所 で 1 例が確認された。</p>	
	オナガ（カラス科） 東京都レッドリスト 準絶滅危惧 (NT)
	<p>生態等</p> <p>体長 37cm。雌雄同色。成鳥は頭部が黒く、頸は白い。背は灰色で、翼と尾羽は白色。尾羽の羽先は白い。市街地から山地の林に生息し、昆虫類の幼虫、草木の実や種子など、なんでも採食する。</p>
<p>確認状況</p> <p>2021 年度春季に [ ] において、1 箇所 で 1 例の声が確認された。</p>	
	センダイムシクイ（ムシクイ科） 東京都レッドリスト 絶滅危惧 IA 類 (CR)
	<p>生態等</p> <p>体長 12.5cm。成鳥は頭部から背にかけてオリーブ色。頭中央線は淡色だが個体によっては不明瞭。平地から山地の落葉広葉樹林に生息し、昆虫類などを食べる。 都内では西多摩や南多摩の丘陵地や山地の広葉樹林に渡来し、繁殖している。春・秋の渡りの時期には、平地の樹林でも見られる。</p>
<p>確認状況</p> <p>2021 年度春季に [ ] において、1 箇所 でさえずっている個体 1 例が、2022 年度春季に [ ] 内において、1 箇所 で 1 例が確認された。</p>	
	イカル（アトリ科） 東京都レッドリスト 準絶滅危惧 (NT)
	<p>生態等</p> <p>体長 23cm。成鳥は頭部が黒色で、顔や後頭から背、腰、喉から腹までは灰褐色。嘴は黄色で、太く大きい。平地から山地の落葉広葉樹林に生息し、木の実や種子を食べる。冬は暖地に移動する。 都内では南多摩や西多摩の自然林に周年生息し、繁殖している。冬は平地の樹林にも移動する。</p>
<p>確認状況</p> <p>2021 年度冬季に [ ] 1 箇所 で 1 例が確認されたほか、2021 年度夏季に [ ] において、1 箇所 で 1 例の声が確認された。</p>	

表 2.2.2-12 注目される動物種の生息状況（爬虫類①）




	<p>ニホンヤモリ（ヤモリ科） 東京都レッドリスト 留意種(*)</p> <p>生態等 体長 4~16cm。日本産のカエルの中では大型である。四肢は比較的短く、指端に吸盤を持たない。後肢趾間に発達した悪いみずかき、鼓膜上後部に発達した耳腺を持つ。背面や側面に大小様々な隆起が見られる。体色は灰暗色から茶褐色を帯びる。成体は昆虫類やミミズ類などを食べる。 都内では区部の都市公園・人家の緑地から西多摩の山間地まで広く生息している。</p> <p>確認状況 2021 年度に [ ] 等の 4 箇所 で成体 4 個体 幼体が確認されたほか、 [ ] や [ ] で幼生が確認された。合計 6 箇所 で、幼生 10 個体以上、幼体 3 個体が確認された。</p>
	<p>ヒガシニホントカゲ（トカゲ科） 東京都レッドリスト 絶滅危惧 II 類 (VU)</p> <p>生態等 本種は長らくニホントカゲと同種とされていたが、2012 年に遺伝的差異に基づいて独立種とされた。ニホントカゲと酷似するが、本種は吻部の上にある 2 枚の前額板という鱗が離れていることが多い。成体のオスは褐色で体側面に茶褐色の太い縦条が入る。繁殖期のメスは頭部から腹部にかけてオレンジ色に染まる。幼体は尾が青い。昼行性で節足動物やミミズなどの小型無脊椎動物を食べる。尾は自切する。 都内では市街地から山地まで広く分布し、日当たりのよい草地や石垣などがある環境を好む。</p> <p>確認状況 2021 年度に [ ]、[ ] 付近において、合計 2 箇所 で幼体 1 個体以上、成体 1 個体が、2022 年度に [ ] 内において 2 箇所 で 2 個体以上が確認された。</p>
	<p>ニホンカナヘビ（カナヘビ科） 東京都レッドリスト 絶滅危惧 II 類 (VU)</p> <p>生態等 全長 16~27cm 程度。ニホントカゲに比べずっと細身で尾は長く全長の 3 分の 2 強。体色は背面が褐色、腹面は白または黄色。体側に白と暗褐色の縞がはしる。背面の鱗にはうね(キール)があり、ザラザラした感じ。幼体の体色は全体に暗く、特に尾部は顕著。昼行性でクモ類や昆虫類、ダンゴムシなど陸生甲殻類などを食べる肉食性。尾は自切する。 都内では市街地から低山地まで広く分布し、日当たりのよい草地や藪を好む。</p> <p>確認状況 2021 年度に [ ] 内やその周辺において、合計 6 箇所 で幼体 1 個体、成体 3 個体以上が、2022 年度に [ ] 内の広範囲で確認された。</p>



表 2.2.2-13 注目される動物種の生息状況（爬虫類②）



 <p>※写真は「レッドデータブック東京」より</p>	シマヘビ（ナミヘビ科）
	東京都レッドリスト 絶滅危惧 II 類 (VU)
	<p>生態等</p> <p>全長 80～150cm 程度。背面は淡褐色の地肌に黒褐色の 4 本の縦縞が入るのが一般的。ただしカラスヘビと呼ばれる全身真っ黒の個体などもいて様々な変異のある種。虹彩は赤色。幼蛇は淡褐色から赤の強い赤褐色の地肌に暗赤色の横帯があり、縦縞はない。基本的に地上性だが木に登ることもある。幅広い食性を持つがカエル類を最も好み、トカゲ類や小型のヘビ類も好食する。他に小型哺乳類、鳥類、魚類などを食べる。</p> <p>都内では、昼行性で日当たりのよい水辺周辺を好む。</p>
確認状況	2022 年度に [ ] において、1 箇所を確認された。
	アオダイショウ（ナミヘビ科）
	東京都レッドリスト 準絶滅危惧 (NT)
	<p>生態等</p> <p>全長 110～190cm 程度で、本土最大のヘビ。体色は褐色からオリーブ色と個体差が大きい。背面に黒色や暗褐色の不明瞭な 4 本の縞が入る。幼蛇ははしご状の斑紋が並び、マムシとよく間違えられる。樹上性傾向があり立体的な運動能力が非常に高いが地上でも活発に活動する。成蛇は主にネズミ類と鳥類を捕食する。幼蛇はカエル類、トカゲ類、ヤモリを好食し、成蛇と大きく違う。</p> <p>都内では平地から山地の民家周辺から森林まで様々な環境に見られる。人間とうまく共存している動物(シナントロープ)である。</p>
確認状況	2021 年度に [ ] や [ ] [ ] において、合計 2 箇所成体 2 個体が、2022 年度に [ ] 内の 1 箇所を確認された。



表 2.2.2-14 注目される動物種の生息状況（両生類）

	ヒキガエル*（ヒキガエル科）
	東京都レッドリスト 絶滅危惧 II 類 (VU)
	<p>生態等</p> <p>体長 4～16cm。日本産のカエルの中では大型である。四肢は比較的短く、指端に吸盤を持たない。後肢趾間に発達した悪いみずかき、鼓膜上後部に発達した耳腺を持つ。背面や側面に大小様々な隆起が見られる。体色は灰暗色から茶褐色を帯びる。成体は昆虫類やミミズ類などを食べる。</p> <p>都内では区部の都市公園・人家の緑地から西多摩の山間地まで広く生息している。</p>
確認状況	<p>2021 年度に [ ] で幼体が確認されたほか、[ ] や [ ] で幼生が確認された。合計 7 箇所、幼生 10 個体以上、幼体 3 個体が確認された。また、2022 年度にはけの道において 1 箇所を確認された。</p>
	ニホンアマガエル（アマガエル科）
	東京都レッドリスト 絶滅危惧 II 類 (VU)
	<p>生態等</p> <p>体長 2～5cm。本州に生息するカエルでは最も小型である。四肢の指端に吸盤を、趾間にみずかきをそれぞれ持つ。前肢のみずかきはほとんど発達していない。背面の皮膚は平滑で隆起は見られない。背面の体色は緑黄色から灰色にまで変化する。成体は昆虫類やクモ類などを食べる。</p> <p>都内では山地の林縁から開けた草地、水田の周辺、庭園などに生息する。</p>
確認状況	<p>2021 年度に [ ] の 1 箇所、2 個体の鳴き声を確認された。</p>

※ヒキガエルについて

- ・東京都は亜種アズマヒキガエルの自然分布域であるが、西日本の亜種ニホンヒキガエルと交雑が進んでいることが明らかにされている。今回確認されたのは幼体と幼生であることから、亜種アズマヒキガエルかニホンヒキガエルか同定されていないため「ヒキガエル」とした。（資料：環境概況調査委託（2北南－小金井3・4・11外1路線）報告書（令和3年11月、ユーロフィン日本環境株式会社））
- ・ここでは、「ヒキガエル」が「アズマヒキガエル」である可能性が否定できないため、アズマヒキガエルと同様の扱いとした。

表 2.2.2-15 注目される動物種の生息状況（昆虫類①）


<p>写真なし</p>	<p>ホソミオツネトンボ（アオイトトンボ科）</p>
	<p>東京都レッドリスト 絶滅危惧 IB 類 (EN)</p>
<p>生態等</p>	<p>本州、四国、九州に分布する。平地から山地の抽水植物の繁茂する池沼、湿地、水田、緩やかな河川等に生息する。6～8月にかけて羽化し、成虫で越冬する。前年の夏に羽化した成虫は冬を越し、春になると成熟して水辺で生殖活動を行う。水辺の抽水植物に連結態で産卵するが、♀単独での産卵もみられる。</p>
<p>確認状況</p>	<p>2022 年度に [ ] において、1 箇所を確認された。</p>
 <p>※写真は「レッドデータブック東京」より</p>	<p>アオイトトンボ（アオイトトンボ科）</p>
	<p>東京都レッドリスト 絶滅危惧 II 類 (VU)</p>
<p>生態等</p>	<p>腹長 28～34mm。♂♀ともに地色は黄白色で、翅胸背面は金属光沢を持つ緑色。成熟すると地色は黒ずみ、♂では翅胸の下半分と腹端部に青白色の粉をまとう。春から秋に見られる。 都内では平地から丘陵地の水生植物の豊富な池沼や水溜りのある湿地に生息する。区部の記録は東部に多く、多摩地域では多摩川流域に集中し、狭山丘陵にも生息する。</p>
<p>確認状況</p>	<p>2015 年度に [ ] 周辺の 2 箇所で、2022 年度に [ ] 内において 1 箇所を確認された。</p>
	<p>ハラビロトンボ（トンボ科）</p>
	<p>東京都レッドリスト 準絶滅危惧 (NT)</p>
<p>生態等</p>	<p>腹長 20～25mm。腹部が極端に扁平となり、特に♀では顕著。頭部前額は強い金属光沢のある青藍色。未熟個体は黄色を主体とした地色に黒色条斑がある。♂は成熟するにつれ黒味が増して、腹部に青白色の粉をまとう。♀はあまり変化しない。初夏から夏に見られる。 都内では平地から丘陵地の植生が豊富な湿地に生息する。草丈の低い場所を好む。</p>
<p>確認状況</p>	<p>2021 年度に [ ] 1 箇所で 1 個体を確認された。</p>
 <p>※写真は「日本のトンボ」より</p>	<p>マユタテアカネ（トンボ科）</p>
	<p>東京都レッドリスト 準絶滅危惧 (NT)</p>
<p>生態等</p>	<p>北海道、本州、四国、九州に分布する。平地～山地の周囲に樹林のある池沼、湿地、水田などに生息する。河川敷や用水路でも見られる。卵期間は半年程度、幼虫期間 3～5 か月程度。卵で越冬する。</p>
<p>確認状況</p>	<p>2015 年度に [ ] や [ ] で、2022 年度に [ ] 内の 1 箇所を確認された。</p>



表 2.2.2-16 注目される動物種の生息状況（昆虫類②）

 <p>※写真は「レッドデータブック東京」より</p>	<p>ミヤマアカネ（トンボ科） 東京都レッドリスト 準絶滅危惧 (NT)</p>
	<p>生態等</p> <p>腹長 23～28mm。翅胸はほぼ無斑、翅の縁紋付近から内側にかけて幅広い褐色帯が入る。♂では成熟すると全身鮮やかな赤色となり、縁紋も赤くなる。♀は黄褐色。初夏から秋に見られる。 都内では平地から丘陵地の緩やかな砂泥底の細流に生息する。</p> <p>確認状況</p> <p>2015年度、2016年度、2019年度に [ ] や [ ] において確認された。</p>
	<p>リスアカネ（トンボ科） 東京都レッドリスト 準絶滅危惧 (NT)</p>
	<p>生態等</p> <p>腹長 24～30mm。翅端部に顕著な黒褐色斑がある。コノシメトンボやノシメトンボに似るが、成熟♂が腹部のみ鮮やかな赤色となることや、翅胸の斑紋などで区別される。夏から秋に見られる。 都内では平地から丘陵地の樹木に覆われた池沼や湿地に生息する。</p> <p>確認状況</p> <p>2021年度に [ ] 1箇所、[ ] 1箇所、[ ] 1箇所、[ ] 1箇所で1個体が確認された。</p>
	<p>エノキカイガラキジラミ（キジラミ科） 環境省レッドリスト 準絶滅危惧 (NT)</p>
	<p>生態等</p> <p>本州と九州の丘陵地から低山地に分布する。幼虫は寄主植物であるエノキの葉にツノ状の虫えい（ゴール）を形成し、その開口部を貝殻状の白色分泌物で覆う特性がある。</p> <p>確認状況</p> <p>2021年度に [ ] や [ ] 内において、合計4箇所、210個の虫えいが確認された。</p>
	<p>オオアメンボ（アメンボ科） 東京都レッドリスト 準絶滅危惧 (NT)</p>
	<p>生態等</p> <p>体長 19～27mm。日本産アメンボ科の最大種。大きさから他種との区別は容易。 都内では平地から低山地の緩やかな流れや池沼に生息する。</p> <p>確認状況</p> <p>2021年度に [ ] 付近の1箇所で1個体が確認された。</p>



表 2.2.2-17 注目される動物種の生息状況（昆虫類③）

 <p>※写真は「日本のチョウ」より</p>	<p>ギンイチモンジセセリ（セセリチョウ科）                      環境省レッドリスト 準絶滅危惧 (NT)                      東京都レッドリスト 準絶滅危惧 (NT)</p> <p>生態等                      関東地方以西の平地～低山地では通常年2回（4月下旬～5月中旬、7月中旬～8月上旬）出現。高標高地では年1回（6月中旬～7月下旬）、春型の斑紋をした個体のみが出現。成虫は陽当たりのよい、ススキなどイネ科雑草の生えている山地の草原・丘陵・堤防・鉄道線路の土手などに多く棲息。飛翔は緩やかで、草上によく止まる。ヒメジョオンなど主に白色の花を好んで吸蜜に飛来し、湿地や汚物にくることもある。越冬態は亜終齢幼虫。イネ科のススキ・カリヤス・アブラススキ・チガヤなどを食べる。</p> <p>確認状況                      [ ] で、2022年度に1箇所を確認された。</p>
 <p>※写真は「レッドデータブック東京」より</p>	<p>ジャノメチョウ（タテハチョウ科）                      東京都レッドリスト 準絶滅危惧 (NT)</p> <p>生態等                      開長 50～60mm 程度である。♂の翅表は黒褐色で、通常前翅に2個、後翅に1個の目玉模様がある。翅裏は、地色が茶褐色で、全体に細かい縞模様がある。♀は♂よりも一回り大型で、翅形が丸く、表裏共地色が薄い。年1回夏に発生し、幼虫はススキ、スズメノカタビラなどのイネ科やヒカゲスゲなどのカヤツリグサ科を食べる。                      都内では山地や丘陵地、河川沿いなどの雑木林周辺のススキ草地に生息する。区部は1990年代に絶滅したと考えられるが、2000年代に1例記録がある。区部の記録は人為分布の可能性も考えられるが詳細は不明である。他地域は普通に生息しているが、宅地化の進んだ地域は減少している。</p> <p>確認状況                      2015年度に [ ] において確認された。</p>
 <p>※写真は「日本のチョウ」より</p>	<p>ホシミスジ（タテハチョウ科）                      東京都レッドリスト 絶滅危惧 II 類 (VU)</p> <p>生態等                      本州に分布する。産地は局地的。中部地方以北や高地では年1回、稀に2回。成虫は陽当たりのよい樹林周辺に多く、飛翔は緩やか、オカトラノオ・キンレイカ・リョウブ・クルマバナなどの花で吸蜜する。越冬態は3齢幼虫。シモツケ（バラ科）が主な食草、近畿地方ではユキヤナギ・コデマリなどの栽培種を食べる。</p> <p>確認状況                      2019年度に [ ] で、2022年度に [ ] 内の1箇所を確認された。</p>

表 2.2.2-18 注目される動物種の生息状況（昆虫類④）


	<p>ヒオドシチョウ（タテハチョウ科） 東京都レッドリスト 準絶滅危惧 (NT)</p> <p>生態等 開長 60～80mm 程度である。翅表は、赤味を帯びた橙色の地色の中に黒色の斑紋があり、後翅垂外縁部には青色の点筋が出現する。翅裏は、基部側が茶褐色で外側が薄い黄褐色で翅表に対応するよう青色の点筋がぼやけて出現する。年1回初夏に発生し、そのまま成虫で越冬する。幼虫はエノキやハルニレ、ヤナギ類を食べる。 都内では区部における記録は1990年代にわずかにある。現在でも一時的に発生する可能性は考えられる。北多摩では、植生の多様な地域に生息している。山地帯のある多摩地域では割合普通に見られる。</p> <p>確認状況 2021年度に [ ] や [ ] 内の合計2箇所で見つかる幼虫106個体が確認された。</p>
 <p>※写真は「レッドデータブック東京」より</p>	<p>ムナビロアオゴミムシ（オサムシ科） 東京都レッドリスト 情報不足 (DD)</p> <p>生態等 体長 13.2～14.5mm。体は金緑色の細毛に覆われる。前胸背は幅広く、中央より後方で最も広い。近似種がいるが、腹面から見て、上翅側片基部に毛がなく、滑沢であることによっても区別できる。灯火によく飛来する。 都内では平地から丘陵地の河川敷や湿地などに生息する。</p> <p>確認状況 2021年度に [ ] において確認された。</p>
	<p>ウバタマムシ（タマムシ科） 東京都レッドリスト 準絶滅危惧 (NT)</p> <p>生態等 体長 20～40mm。体は金銅色、上翅は3～4対の縦隆起線が走り、中央辺に2対の不鮮明な明色紋がある。成虫は初夏から夏に出現し、マツ類の伐採木に集まるが、ときに越冬個体も見つかる。 都内では平地から山地に分布し、アカマツなどマツ科に依存する。</p> <p>確認状況 2021年度に [ ] 1箇所で見つかる1個体が確認された。</p>
 <p>※写真は「レッドデータブック東京」より</p>	<p>ヤマトタマムシ（タマムシ科） 東京都レッドリスト 準絶滅危惧 (NT)</p> <p>生態等 体長 25～40mm。体は美しい緑色、上翅は1対の赤い縦条紋が走る。成虫は夏に出現し、特にエノキの梢に集まる。 都内では平地から山地に分布し、エノキやケヤキ、クヌギなど広葉樹に依存する。</p> <p>確認状況 2016年度、2019年度に [ ] や [ ] で、2022年度に [ ] の1箇所で見つかる1個体が確認された。</p>



表 2.2.2-19 注目される動物種の生息状況（昆虫類⑤）

	<p>トラフカミキリ（カミキリムシ科） 東京都レッドリスト 準絶滅危惧 (NT)</p> <p>生態等 体長 17～26mm。触角は非常に短く、上翅肩部を少し越える程度。前胸はほぼ円形、前方に黄、黒、赤褐色の横帯を持つ。上翅の虎縞もようは独特。活動時はスズメバチ類を思わせる。成虫は夏に出現する。 都内では平地から低山地に分布し、住宅地にも見られる。クワ類の古木に依存する。</p> <p>確認状況 [ ] において、2021 年度に 1 箇所 で 1 個体が確認された。</p>
	<p>モンスズメバチ（スズメバチ科） 環境省レッドリスト 情報不足 (DD)</p> <p>生態等 女王バチ 25～28mm、働きバチ 19～24mm、オス 22～25mm、東部は橙色で頭楯と大腿は黄色。前胸背板と脚は赤褐色。中胸背板の前縁は赤褐色で、以下第 5 節まで黄色の上に左右対称の黒色斑紋が続く。本種はセミ類を好んで狩りの対象にする。</p> <p>確認状況 2016 年度に [ ] の 1 箇所 で、2021 年度に [ ] の 2 箇所 で 7 個体が確認された。</p>
 <p>※写真は「レッドデータブック東京」より</p>	<p>クロマルハナバチ（ミツバチ科） 環境省レッドリスト 準絶滅危惧 (NT)</p> <p>生態等 体長♂約 20mm、♀19～23mm、ワーカー（働き蜂）12～19mm。♀とワーカーは同じ毛色で、全体黒色の長毛を密生し、腹端 3 節に赤褐色毛がある。♂は黄色長毛に覆われ、胸背中央部と第 3 腹背板の毛は黒色。平地から低山地に生息し、春から秋まで見られる。一般的に太平洋側では個体数は少ない。 都内では、平地では、かつては広く分布していたと推定される。</p> <p>確認状況 2022 年度に [ ] 内において、1 箇所 で確認された。</p>



表 2.2.2-20 注目される動物種の生息状況（クモ類）

 <p>※写真は「レッドデータブック東京」より</p>		キシノウエトタテグモ（トタテグモ科）
		東京都レッドリスト 準絶滅危惧 (NT)
生態等	<p>体長♀12～20mm、♂10～15mm。前体は黒褐色で歩脚はやや赤みを帯びる。腹部は紫褐色、褐色あるいは黒褐色。トタテグモ下目に属する原始的なクモで、8眼、3爪を有し、書肺は2対。上顎は強大で馬鋏を有し、下顎に多数の歯状突起を備える。前内疣の基部はやや接近する。地中に比較的短い管状住居を作り、入り口に扉をつける。</p> <p>都内では、平地から山地の樹林に生息し、市街地でも社寺林や公園、人家の庭に見られる。</p>	
確認状況	<p>2022年度に [ ] 内において、1箇所確認された。</p>	

表 2.2.2-21 注目される動物種の生息状況（陸産貝類）


 <p>※写真は「レッドデータブック東京」より</p>		スナガイ（スナガイ科）
		環境省レッドリスト 準絶滅危惧 (NT)
生態等	<p>殻高2.2mm、殻径1.0mm程度の蛹形、殻はやや薄質で堅固。臍穴はわずかに開く。体層周縁は丸い。縫合はやや深い。殻表はほぼ平滑で、弱い光沢がある。半透明白色。外唇は肥厚する。殻口内に多くの歯を持つ。海岸や河川敷などに生息する。</p> <p>都内では、主に海岸部や河川敷の草地などに生息する。</p>	
確認状況	<p>2022年度に [ ] 内において、1箇所確認された。</p>	

表 2.2.2-22 注目される動物種の生息状況（魚類①）

ギンプナ（フナ類）※ <sup>1</sup> （コイ科）	
東京都レッドリスト 情報不足 (DD)	
生態等	<p>体長 15cm 程度。体型は扁平するが他のフナ類と比べると体高は低い。口ひげはなく、背面は黒暗色で側面は黄褐色、鱗がやや粗い。河川の中・下流の緩流域、それに続く用水路、浅い池沼などに生息する。</p> <p>都内では北多摩、南多摩、西多摩には生息環境が残っており少数が生息している。区部の小河川はコンクリート化が進み生息環境がほとんどない。</p>
確認状況	<p>〇〇や〇〇等において、2018年度に1箇所以上、2021年度に6箇所で6個体が確認された。このほか、2016年度、2017年度、2019年度に〇〇や〇〇において確認された。</p>
オイカワ（コイ科）	
東京都レッドリスト 情報不足 (DD)	
生態等	<p>体長 12～15cm。体はイワシのように細長い側扁形で、臀びれは大きく伸長する。口裂は小さく直線的。体色は銀白色で、体側にはやや不明瞭な横帯が不規則に並ぶ。平野部を流れる河川の中・下流域とそれに続く水路、きれいな湖沼に生息する。やや流れのある砂底や礫底の岸よりに多い。</p>
確認状況	<p>2021年度に〇〇において、11箇所ですべて11個体が確認された。このほか、2015年度、2016年度、2017年度、2018年度、2019年度に〇〇や〇〇において確認された。</p>
タナゴ※ <sup>2</sup> （コイ科）	
東京都レッドリスト 絶滅 (EX)	
生態等	<p>体長 6cm 程度。体型は扁平するが体高は低く、1対の口ひげがある。えらの後ろの暗色斑が三角形。流れが緩やかで水草の豊富な河川、湖、池沼、用水路などに生息する。</p> <p>都内では区部、北多摩では野生種が自然に生息している場所は見あたらず、絶滅したと考えられるが、稀に放流個体らしいものが捕獲される。南多摩では以前は生息していた可能性があるが、最近の確認情報はない。</p>
確認状況	<p>2018年度に〇〇で確認された。</p>

※1 フナ類について




フナ類は確実な種の同定に至らなかったが、「ギンプナ」に該当する可能性が高いため重要種として扱った。（資料：環境概況調査委託（2北南-小金井3・4・11外1路線）報告書（令和3年11月、ユーロフィン日本環境株式会社））

※2 タナゴについて

「レッドデータブック東京」によると、タナゴは都内の区部、北多摩部では絶滅したと考えられている。そのため、確認された個体は放流由来個体の可能性がある。



表 2.2.2-23 注目される動物種の生息状況（魚類②）

		ドジョウ類 <sup>※1</sup> （ドジョウ科）	
		環境省レッドリスト 準絶滅危惧 (NT)・情報不足 (DD) 東京都レッドリスト 情報不足 (DD)	
生態等		<p>身体は延長し、体後部にかけてやや側偏する。5対の口髭を持つ。ドジョウは雄成魚の胸鰭基部に斧状の骨質盤が発達する。体色は褐色から暗褐色で、腹部が明色であるが変異に富む。尾鰭基部上部に1小黑斑があることが多い。キタドジョウは雄成魚の胸鰭基部にシャモジ状の骨質盤が発達する。体色は黒褐色～茶褐色。比較的眼径が小さく、頭頂から吻端にかけて直線状。</p>	
確認状況		<p>〇〇や〇〇において、2015年度に1箇所、2016年度に1箇所、2017年度に2箇所、2018年度に1箇所、2019年度に3箇所、2021年度に1箇所1個体が確認された。</p>	
		ヒガシシマドジョウ（シマドジョウ種群） <sup>※2</sup> （ドジョウ科）	
		東京都レッドリスト 絶滅危惧 II 類 (VU)	
生態等		<p>体長10cm程度。体型は細長く、体側に黒褐色の縞模様がある。3対の口ひげがあり、体表はぬめりが強い。河川の中流域の砂礫底に生息する。</p> <p>都内では昭和50年代に河川の汚染が進んだ時代に区部、北多摩、南多摩の河川の多くから姿を消したが、近年水質の改善とともに多摩川や柳瀬川などで増えている。西多摩では多摩川と秋川の合流点より上流で普通に見られる。</p>	
確認状況		<p>〇〇において、2015年度に2箇所、2016年度に1箇所、2019年度に3箇所、2021年度に16箇所、2022年度に16個体が確認された。</p>	
 <p>※写真は「日本の淡水魚」より</p>		ホトケドジョウ（ドジョウ科）	
		環境省レッドリスト 絶滅危惧 IB 類 (EN) 東京都レッドリスト 絶滅危惧 IB 類 (EN)	
生態等		<p>体長6cm程度。体型は細長い紡錘形。4対の口ひげがあり、体表はぬめりが強い。水温が低く流れの緩やかな河川や湿地、水田などに生息する。</p> <p>人里付近の河川や湧水由来の水域などに広く生息していたが、区部、北多摩の小河川のコンクリート化の進行で生息環境がほとんど失われた。まだ限られた水域に生息可能な環境が残っており、少数が生息しているが、生息環境の悪化は今も続いている。南多摩、西多摩には生息環境が残っており少数が生息している。</p>	
確認状況		<p>〇〇において、2015年度に1箇所、2022年度に1個体が確認された。</p>	

※1 ドジョウ類について

・ドジョウ類は確実な種の同定に至らなかったが、「ドジョウ」「キタドジョウ」に該当する可能性が高いため重要種として扱った。ドジョウ類は近年、遺伝子レベルの分析から外観から識別の難しい複数の種からなることが明らかになっており、今回確認されたものはドジョウかキタドジョウと考えられる。（資料：環境概況調査委託（2北南-小金井3・4・11外1路線）報告書（令和3年11月、ユーロフィン日本環境株式会社））

・ドジョウは近年、「ドジョウ」、「キタドジョウ」、「シノビドジョウ」、「ヒョウモンドジョウ」に細分された。このうち、東京都に自然分布する可能性が考えられる種は「ドジョウ」或いは「キタドジョウ」となる。環境省レッドリストでは「ドジョウ」はNT、「キタドジョウ」はDDに該当する。東京都レッドリストでは北多摩及び本土部で、いずれもDDに該当する。



※2 シマドジョウ種群について

・ここでは、委託報告書で「シマドジョウ」と掲載されていた種を「シマドジョウ種群」とした。

・シマドジョウは近年、「ヒガシシマドジョウ」、「ニシシマドジョウ」、「オオシマドジョウ」に細分されたが、このうち東京都に自然分布する種は「ヒガシシマドジョウ」のみである。そのため、ここでは「ヒガシシマドジョウ」と同様の扱いとした。



表 2.2.2-24 注目される動物種の生息状況（魚類③）

	ミナミメダカ（メダカ類）*（メダカ科） 環境省レッドリスト 絶滅危惧 II 類(VU) 東京都レッドリスト 絶滅危惧 IA 類(CR)
	生態等 体長 3cm 程度。体型は紡錘型で、頭部はやや扁平する。尾びれは湾入せず目が大きく、口は上を向き小さく口ひげがない。流れの緩やかな河川や水路などに生息する。 都内では、東京都本土部の大河川から小河川まで、水がきれい流れの緩やかな水域に広く見られた。現在も捕獲される水域はかなり広いが、その多くは在来個体群ではなく放流された個体に由来する。在来個体群の多くは河川水質が悪化した昭和 50 年代に絶滅したか、あるいは他産地の放流魚との交雑が進んでしまい、現在では絶滅の危機に瀕している。
	確認状況 [ ] や [ ] 等において、2015 年度に 7 箇所、2016 年度に 5 箇所、2017 年度に 6 箇所、2018 年度に 12 箇所、2021 年度に 7 箇所 7 個体が確認された。このほか、2019 年度に [ ] や [ ] において確認された。
 <p>※写真は「日本の淡水魚」より</p>	ウキゴリ（ハゼ科） 東京都レッドリスト 準絶滅危惧(NT)
	生態等 体長 15cm 程度。体型はやや側扁した円筒形で、頭部は縦扁する。口が大きく、下あごの後端は眼の中央直下に達する。体色は淡い褐色で、体側に 6～7 個の暗色斑がある。近似のスミウキゴリとは第 1 背びれの後縁に明瞭な黒色斑があることで、シマウキゴリとは尾びれ基底の黒色斑後端が二又しないことで区別できる。河川の汽水域から中流域に生息し、淵などの流れの緩やかなところに多い。
	確認状況 2018 年度に [ ] において確認された。

※ メダカ類について

- ・ここでは、委託報告書で「メダカ」及び「メダカ類」と掲載されていた種を「メダカ類」とした。
- ・メダカは近年、「キタノメダカ」及び「ミナミメダカ」に細分された。このうち東京都に自然分布する種は「ミナミメダカ」のみである。ただし、ヒメメダカ等放流由来の個体との交雑が各地で進んでいるため、確認個体が交雑種の可能性がある。しかし、ここでは「ミナミメダカ」と同様の扱いとした。
- ・ここでは、「ミナミメダカ」である可能性が否定できないため、ミナミメダカと同様の扱いとした。

表 2.2.2-25 注目される動物種の生息状況（底生動物①）



	ナガオカモノアラガイ（オカモノアラガイ科） 環境省レッドリスト 準絶滅危惧 (NT) 東京都レッドリスト 準絶滅危惧 (NT)	
	生態等	殻高 12mm、殻径 7mm 程度の長卵形、背腹に扁平、殻は著しく薄質。螺塔は極めて小さく、体層がほとんどを占める。半透明淡黄褐色。殻表はやや光沢があり、平滑。殻口縁は肥厚・反転しない。淡水産のモノアラガイ類に殻形態が近似するが、軸唇が肥厚せず、ねじれず、生体の眼は触角の先端にある。池沼や河川敷などの水辺に生息し、水際の草本類に付着する。 都内では低地の止水・流水両方の水際の草本に付着する。陸産種であるが、淡水産種と同時に得られる。
	確認状況	2021 年度に [ ] に生育する植物上において、1 箇所 で 2 個体が確認された。
 <p>※写真は「日本産淡水貝」より</p>	カワコザラガイ（カワコザラガイ科） 環境省レッドリスト 絶滅危惧 IA 類 (CR)	
	生態等	殻の長径約 4.5mm、短径約 3mm、笠形で螺塔は低く、薄質で脆い。殻表は微弱な成長脈を除き平滑、淡い黄褐色であるが付着物に覆われて黒褐色となる個体もある。北米原産の外来種で日本全国に広がっている <i>Ferrissia californica</i> (Rowell 1863) メリケンコザラに似るが、本種は前後により太短く、螺塔も低い傾向にある。淡水域の浅い止水・緩い流水中で水底の落葉などに付着する。
	確認状況	2017 年度、2019 年度に [ ] や [ ] [ ] において確認された。

表 2.2.2-26 注目される動物種の生息状況（底生動物②）




スジエビ（テナガエビ科）	
東京都レッドリスト 留意種(*)	
	<p>生態等</p> <p>体長約 5cm(額角を含める)。額角は頭胸甲長の約 1/2 で、先端がやや上を向く。上縁に 5、6 歯、先端近くに 1 小歯、下縁に 2 歯がある。尾節の背側縁と末端近くの両側に各 2 対のとげがある。第 1、2 胸脚は小さなはさみを持ち、後方 3 対の胸脚は後方ほど長い。透明感のある体に明瞭な黒色縞模様があり、各胸脚の関節部は黄色い。河川、大型湖、池沼など多様な淡水環境に生息し、河口に近い汽水域でも見られる。</p> <p>都内では東京湾に注ぐ河川の下流域から中流域まで、止水環境から緩やかな流れの中まで幅広く見られる。</p>
確認状況	<p>□ や □ 等で、2015 年度に 1 箇所 で 2 個体が、2019 年度に 1 箇所 で 2 個体が、2021 年度に 1 箇所 で 2 個体が確認された。</p>
オオアメンボ（アメンボ科）	
東京都レッドリスト 準絶滅危惧 (NT)	
	<p>生態等</p> <p>体長 19～27mm。日本産アメンボ科の最大種。大きさから他種との区別は容易。都内では平地から低山地の緩やかな流れや池沼に生息する。</p>
確認状況	<p>2021 年度に □ において、1 箇所 で 1 個体が確認された。</p>



表 2.2.2-27 注目される動物種の生息状況（底生動物③）

 <p>※写真は「レッドデータブック東京」より ※記載した種は「ヤマトセンブリ」</p>	センブリ属（センブリ科）* 環境省レッドリスト 該当なし(-)/情報不足(DD) 東京都レッドリスト 絶滅危惧 II 類(VU)/絶滅危惧 IA 類(CR)
	生態等 ヤマトセンブリは、前翅長 8~14mm。翅は全体が薄い茶褐色。ネグロセンブリは、前翅長 8.5~15.5mm。翅は全体が薄い黒褐色で前翅基部付近は濃色となる。トウホククロセンブリは、前翅長 7.5~18mm。翅は全体が薄い黒褐色で前翅基部付近は濃色となる。ネグロセンブリに酷似するが、本種の方が全体的に黒味が強く濃色となる。各種の幼虫は水生で、昆虫類などの水生生物を捕えて食べる肉食性。主に丘陵地の湿地や小規模な池沼に生息するが、ヤマトセンブリは平地から丘陵地の湧水が見られる湿地や小規模な池沼に生息する。
	確認状況 2019 年度に <input type="text"/> や <input type="text"/> において確認された。

※ センブリ属について  
 センブリ属は、「ネグロセンブリ」、「トウホククロセンブリ」、「ヤマトセンブリ」等の可能性がある。「ネグロセンブリ」及び「トウホククロセンブリ」の場合は東京都レッドリストの VU に該当する。「ヤマトセンブリ」の場合は環境省レッドリストの DD 及び東京都レッドリストの CR に該当する。その他の場合はランク外となる。

②オオタカに係る現地調査

オオタカに係る現地調査は、西部公園緑地事務所で実施した調査Ⅶで行われており、内で繁殖していることが確認されている。当該調査の結果（2022年2月～4月）を以下に示す。

表 2.2.2-28 現地調査結果（オオタカ）

調査日	調査結果
2022.2.21	<ul style="list-style-type: none"> <li>以下の猛禽類1種を確認した。 オオタカ：1例</li> </ul>
2022.2.24	<ul style="list-style-type: none"> <li>以下の猛禽類6種を確認した。 オオタカ：8例                      ノスリ：1例 ハイタカ：1例                      ツミ：3例 ミサゴ：1例</li> <li>繁殖行動は以下を確認した。 オオタカ：<span style="border: 1px solid black; display: inline-block; width: 50px; height: 15px;"></span>で鳴き声の確認。</li> </ul>
2022.3.3	<ul style="list-style-type: none"> <li>以下の猛禽類3種を確認した。 オオタカ：11例                      ノスリ：3例 ツミ：3例</li> <li>繁殖行動は以下を確認した。 オオタカ：<span style="border: 1px solid black; display: inline-block; width: 50px; height: 15px;"></span>で鳴き声の確認。<span style="border: 1px solid black; display: inline-block; width: 20px; height: 15px;"></span>周辺でのディスプレイを確認。</li> </ul>
2022.3.17	<ul style="list-style-type: none"> <li>以下の猛禽類3種を確認した。 オオタカ：5例                      ツミ：1例 ハイタカ：2例</li> <li>繁殖行動は以下を確認した。 オオタカ：<span style="border: 1px solid black; display: inline-block; width: 50px; height: 15px;"></span>で鳴き声の確認。<span style="border: 1px solid black; display: inline-block; width: 20px; height: 15px;"></span>周辺でのディスプレイを確認。</li> </ul>
2022.3.25	<ul style="list-style-type: none"> <li>以下の猛禽類4種を確認した。 オオタカ：8例                      ツミ：9例 ノスリ：1例                      チョウゲンボウ：1例</li> <li>繁殖行動は以下を確認した。 オオタカ：<span style="border: 1px solid black; display: inline-block; width: 50px; height: 15px;"></span>で鳴き声の確認。<span style="border: 1px solid black; display: inline-block; width: 20px; height: 15px;"></span>周辺でのオオタカ別個体への攻撃を確認。 ツミ：<span style="border: 1px solid black; display: inline-block; width: 20px; height: 15px;"></span>～<span style="border: 1px solid black; display: inline-block; width: 50px; height: 15px;"></span>周辺でのツミ別個体への攻撃を確認。</li> </ul>
2022.4.8	<ul style="list-style-type: none"> <li>以下の猛禽類4種を確認した。 オオタカ：5例                      ツミ：1例 ハイタカ：1例                      チョウゲンボウ：1例</li> <li>※事前情報があった<span style="border: 1px solid black; display: inline-block; width: 100px; height: 15px;"></span>でオオタカの巣を考えられる造巢中の巣を確認。</li> <li>繁殖行動は以下を確認した。 オオタカ：上記の<span style="border: 1px solid black; display: inline-block; width: 50px; height: 15px;"></span>の周辺で鳴き声を2羽分確認。飛翔を確認。</li> </ul>
その他	<ul style="list-style-type: none"> <li>4.22の調査で抱卵を確認。</li> <li>確認された採餌行動は1例のみ。 2.24：<span style="border: 1px solid black; display: inline-block; width: 50px; height: 15px;"></span>でドバトを狩ったオス成鳥個体を確認。狩りは失敗し、<span style="border: 1px solid black; display: inline-block; width: 50px; height: 15px;"></span>方向へ飛去。</li> </ul>

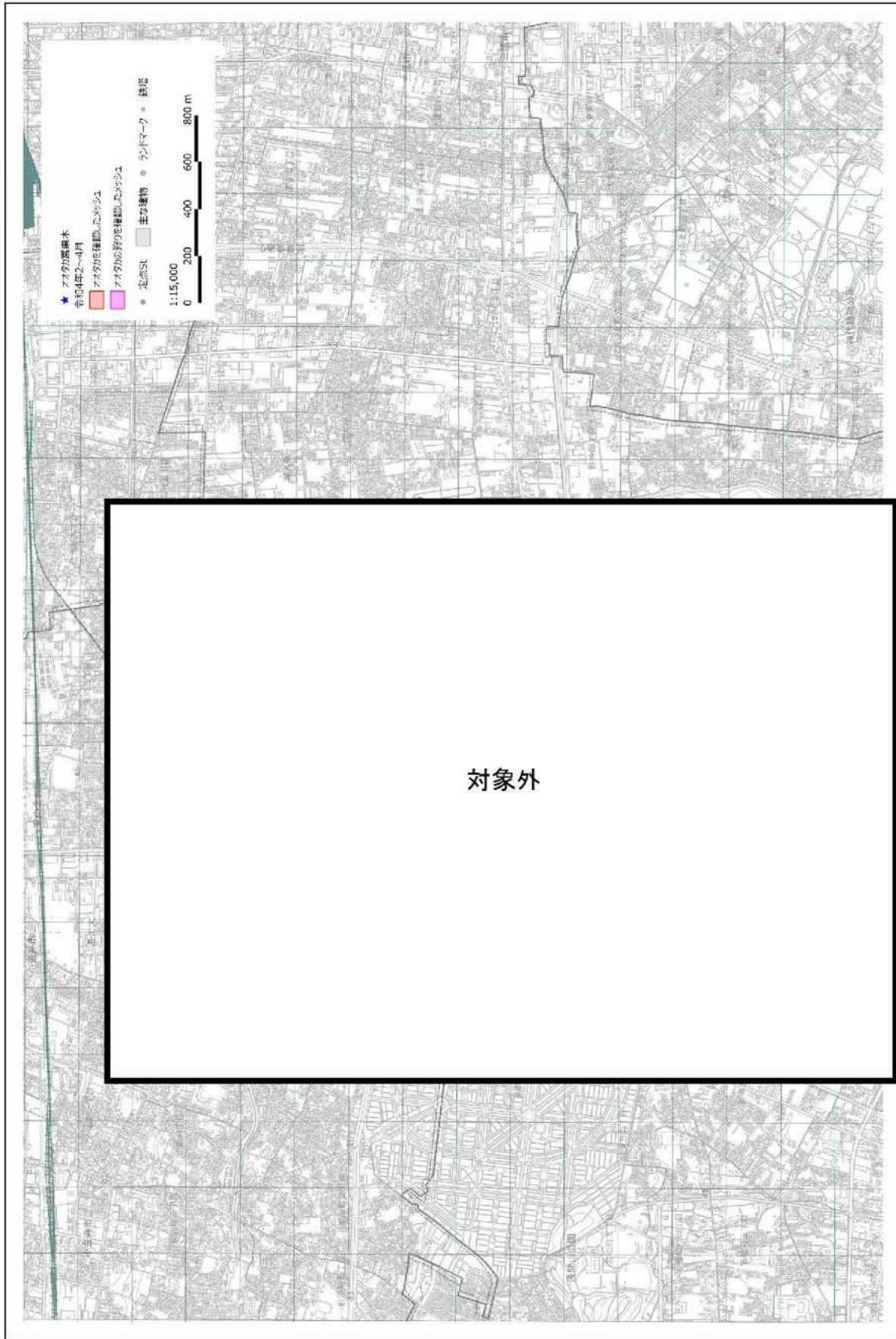


図 2.2.2-3 オオタカの出現状況（飛翔等確認メッシュ（令和4年2~4月））



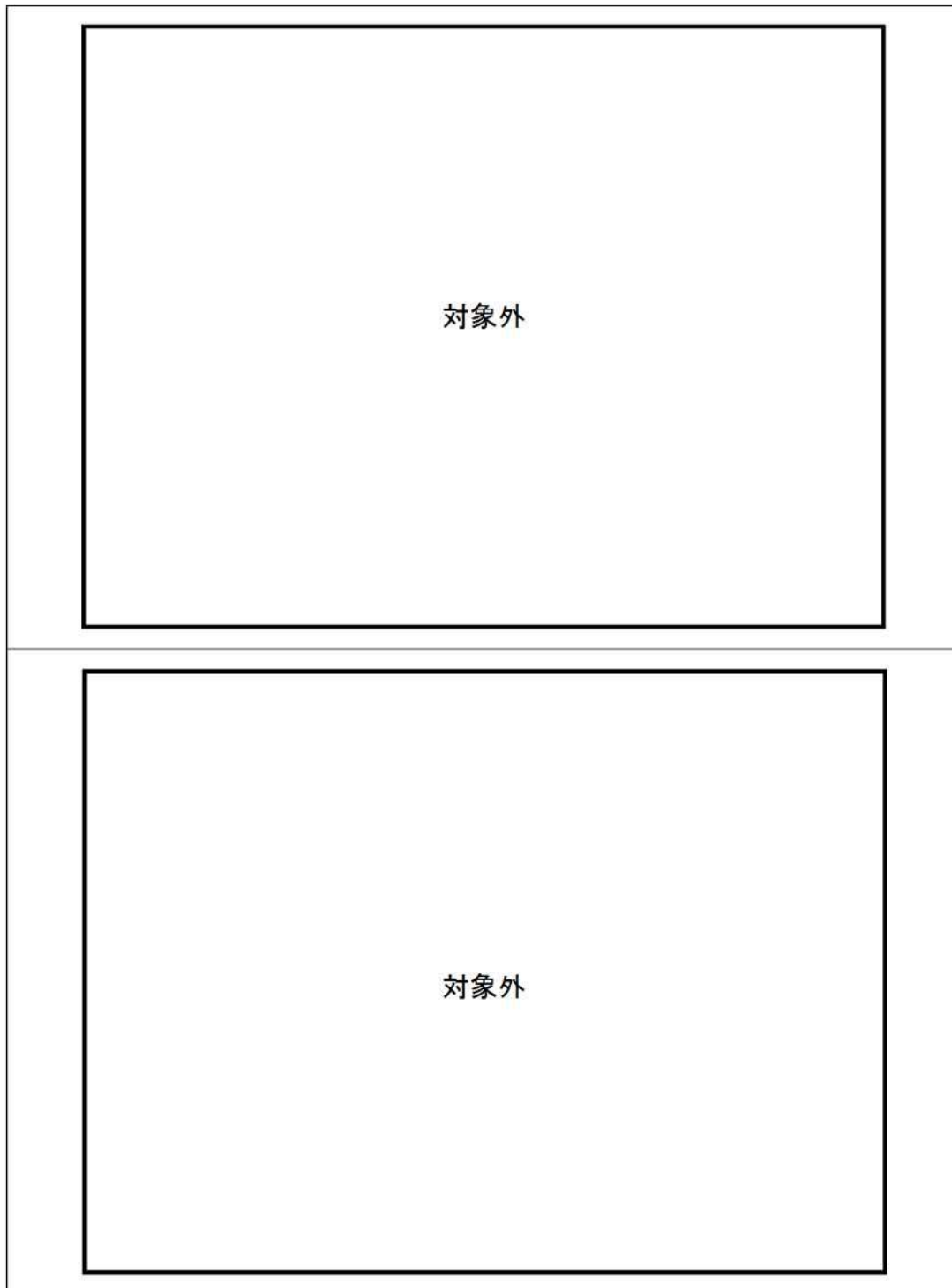


図 2.2.2-4 営巣木等の状況

### ③植物相

計画路線周辺の植物について、2021年度に実施した調査Ⅰにおいて111科493種の植物種が確認された。

調査Ⅰ～調査Ⅶで確認された植物種について、表2.2.2-6の選定基準により注目される種を選定した。その結果、計画路線周辺に生育する注目される種として、表2.2.2-29に示す17種の注目される種が選定された。

※注目される種の確認位置図は、資料編に示す。

表 2.2.2-29 既往の現地調査結果から把握した注目される種（植物相）

No.	科名	種名(和名)	種名(学名)	現地調査							重要種選定基準					
				I	II	III	IV	V	VI	VII	①	②	③	④		
1	ハナヤスリ	ナツノハナワラビ	<i>Botrychium virginianum</i>	●												VU
2	ウマノスズクサ	ウマノスズクサ	<i>Aristolochia debilis</i>								●					VU
3	ラン	ギンラン	<i>Cephalanthera erecta</i>								●					EN
4		キンラン	<i>Cephalanthera falcata</i>	●							●					VU NT
5		ササバギンラン	<i>Cephalanthera longibracteata</i>	●												NT
6	ススキノキ	ノカンゾウ	<i>Homocallis fulva var. disticha</i>	●	●	●	●			●	●					NT
7	ヒガンバナ	キツネノカミソリ	<i>Lycoris sanguinea</i>								●					VU
8	ガマ	ミクリ	<i>Sparganium erectum</i>	●	●	●	●	●	●	●						NT NT
9	カヤツリグサ	ウキヤガラ	<i>Bolboschoenus fluviatilis ssp. yugawa</i>	●	●	●	●	●	●							VU
10		ミコシガヤ	<i>Carex neurocarpa</i>	●			●	●	●							NT
11		カンエンガヤツリ	<i>Cyperus exaltatus var. iwasakii</i>			●										VU NT
12	キンボウゲ	ニリンソウ	<i>Anemone flaccida var. flaccida</i>	●							●					NT
13	バラ	ズミ	<i>Malus toringo var. toringo</i>				●									VU
14	ヤナギ	ジャヤナギ	<i>Salix eriocarpa</i>					●								NT
15	オオバコ	カワヂシャ	<i>Veronica undulata</i>	●		●				●						NT VU
16	シソ	ハッカ	<i>Mentha canadensis</i>				●	●	●							VU
17	キク	タカラブドウ	<i>Eclipta thermalis</i>				●									*
計	13科	17種		9種	3種	6種	7種	5種	6種	6種	0種	0種	4種	17種		

- ※1 種名及び分類は、原則として「河川水辺の国勢調査のための生物リスト(2021年版)(令和3年、国土交通省)」に準拠した。
- ※2 既往の現地調査結果報告書では、「トキワマンサク、シロヤマブキ、キハダ、ハクチョウゲ、コムラサキ」が確認されているが、分布や生育状況から植栽起源と考えられるため、重要種として扱わないこととした。(資料：環境概況調査委託(2北南一小金井3・4・11外1路線)報告書(令和3年11月、ユーロフィン日本環境株式会社))
- 同様に、「シデコブシ」も確認されているが、分布や生育状況から植栽起源と考えられるため、重要種として扱わないこととした。(資料：野川生物調査委託(その9)報告書(平成29年3月 株式会社フィスコ))

表 2.2.2-30 注目される植物種の生育状況（植物①）

ナツノハナワラビ（ハナヤスリ科）	
東京都レッドリスト 絶滅危惧 II 類 (VU)	
生態等	<p>夏緑性シダ。担葉体は長さ 15～35cm、栄養葉は無柄、3 出葉的に 3～4 回羽状に細裂し、五角形状で、長さ 5～28cm、幅 7～30cm、薄い草質で、裏面中脈上に白毛がある。小羽片は楕円状で鋭尖頭、辺縁は深裂または明らかな鋸歯がある。孢子葉は葉身の基部から分出し、柄は長さ 10～30cm、孢子穂は 3～4 回羽状分岐し、長さ 10～20cm、孢子の表面には、いぼ状突起がある。山地の樹林内に生育する。</p> <p>都内では区部に記録はあるが、現状はごく稀である。南多摩や西多摩では分布がやや山地に片寄る。</p>
確認状況	2021 年度に [ ] において、3 箇所 で 3 株が確認された。
ウマノスズクサ（ウマノスズクサ科）	
東京都レッドリスト 絶滅危惧 II 類 (VU)	
生態等	<p>つる性の多年草。高さ 1m ぐらいに伸びる。葉は三角状狭卵形、長さ 4～7cm。花期は 6～8 月。花は長さ 3～4cm、黄緑色で、葉腋に 1 個つく。萼筒は細くて、やや上方へ湾曲し、基部は球形にふくらみ、舷部は斜めに切られたような形で上へ向かい、狭三角形、舷部内面は紫褐色。さく果は球形で、長さ 1.5cm。山野に生育する。</p> <p>都内では、低地から山地にかけての林縁、原野、河川堤防、耕作地周辺の草地などの日当たりの良い場所に生育する。いずれの地域においても、半自然的な里山環境に生育している。</p>
確認状況	2022 年度に [ ] において、1 箇所 で確認された。
ギンラン（ラン科）	
東京都レッドリスト 絶滅危惧 IB 類 (EN)	
生態等	<p>多年草。花茎は直立し、高さ 10～30cm、葉は 3～6 個互生し、長楕円形、長さ 3～8cm、基部は茎を抱く。花期は 5～6 月。白色の花を数個つける。唇弁は基部に短い距がつく。山野の樹林内に生育する。</p> <p>都内では、各地の落葉または常緑樹林内から林縁にかけて生育する。</p>
確認状況	2022 年度に [ ] において、1 箇所 で確認された。



※写真は「レッドデータブック東京」より



※写真は「レッドデータブック東京」より



表 2.2.2-31 注目される植物種の生育状況（植物②）

	<p>キンラン（ラン科）                      環境省レッドリスト 絶滅危惧 II 類 (VU)                      東京都レッドリスト 準絶滅危惧 (NT)</p> <p>生態等                      多年草。花茎は直立し、高さ 40～70cm。葉は 6～8 個互生し、長楕円状披針形、長さ 8～15cm、幅 2～4.5cm、平滑。花期は 4～6 月。花は黄色で 3～12 個、唇弁基部は筒状で短い距となる。山野の樹林内に生育する。                      都内では各地の台地から丘陵地、山地の落葉または常緑樹林内に生育するが少ない。</p> <p>確認状況                      [ ] のほか、[ ] 等において、2021 年度に 5 箇所 で 23 株が、2022 年度に 4 箇所 で確認された。</p>
	<p>ササバギンラン（ラン科）                      東京都レッドリスト 準絶滅危惧 (NT)</p> <p>生態等                      多年草。茎は直立し高さ 30～50cm。葉は狭長楕円形で長さ 7～15cm、裏面、縁、花序などに微突起がある。苞葉は線形で下部の 1～2 枚は花序より長くなる特徴がある。花期は 5～6 月。花は白色で平開しない。唇弁基部に距がある。山野の林床に生育する。                      都内ではキンラン同様、各地の台地から丘陵地、山地の落葉または常緑樹林内に生育するが少ない。</p> <p>確認状況                      2021 年度に [ ] において、1 箇所 で 1 株が確認された。</p>
	<p>ノカンゾウ（ススキノキ科）                      東京都レッドリスト 準絶滅危惧 (NT)</p> <p>生態等                      湿りがちな用水路脇や溜池の土堤、河川敷、野原に生える多年草。根茎は長く這う。葉は長さ 50～70cm、幅 10～15mm。花茎は高さ 50～70cm、上部に小型の苞がつく。花期は 7～8 月、花序は 2 分してそれぞれに 10 花内外が開く。花筒は長さ 2～4cm あって他種よりはるかに長いのが特徴である。</p> <p>確認状況                      2021 年度に [ ] の草地において、2 箇所 で 60 株が確認された。このほか、2015 年度、2016 年度、2017 年度、2019 年度に [ ] において確認された。また、2022 年度に [ ] において 5 箇所 で確認された。</p>

表 2.2.2-32 注目される植物種の生育状況（植物③）

	<p>キツネノカミソリ（ヒガンバナ科） 東京都レッドリスト 絶滅危惧 II 類 (VU)</p>
	<p>生態等 多年草。鱗茎は広卵形で径 2～4cm、外皮は黒褐色。葉は早春に出て帯状、長さ 30～40cm、幅 8～10mm、淡緑色で初夏に枯れる。高さ 30～50cm の花茎を立て、頂に黄赤色の 3～5 花を散形花序につける。果実は球形のさく果で径 15mm、よく結実する。花期は 8 月ごろ。山野に生育する。 都内では、多摩地域の山地斜面から山麓部、丘陵地や台地脚部、区部の低地の肥沃な樹林内や旧河道の草地などに群生する。</p> <p>確認状況 2022 年度に <span style="border: 1px solid black; display: inline-block; width: 80px; height: 1em; vertical-align: middle;"></span> において 3 箇所 で確認された。</p>
	<p>ミクリ（ガマ科） 環境省レッドリスト 準絶滅危惧 (NT) 東京都レッドリスト 準絶滅危惧 (NT)</p>
	<p>生態等 抽水性の多年草。高さは 60～200cm。走出枝を伸ばして新株をつくる。葉は茎の基部から袴状に立ち、茎より長く、幅 8～15mm。花期は 6～8 月、茎上部の葉腋から枝を出し、下部に 1～3 個の無柄の雌性頭花、上部に多数の無柄の雄性頭花をつける。湖沼、河川、水路など、浅い水辺に生育する。 都内では多摩地域の丘陵地から台地の池沼や水路、区部の低地の河川源流域などに生育する。</p> <p>確認状況 <span style="border: 1px solid black; display: inline-block; width: 80px; height: 1em; vertical-align: middle;"></span> において 2015 年度に 3 箇所、2016 年度に 3 箇所、2017 年度に 4 箇所、2018 年度に 3 箇所、2019 年度に 8 箇所 で 10 株以上、2021 年度に 12 箇所 で 21 株が確認された。</p>

※写真は「レッドデータブック東京」より



表 2.2.2-33 注目される植物種の生育状況（植物④）



	<p>ウキヤガラ（カヤツリグサ科）</p>
	<p>東京都レッドリスト 絶滅危惧 II 類 (VU)</p>
<p>生態等</p>	<p>抽水性の多年草。地下茎は太く這い、稈は高さ 1～1.5m。葉は細長く、幅 5～10mm、花序は頂生し、葉状苞がつく。小穂は長さ 1～2cm。果は長さ 4mm、倒卵形で三稜があり、基部はくさび形、白色～黒褐色になり光沢がある。花期は 5 月。浅いため池、湿原、水辺などに群生する。</p> <p>都内では多摩地域の丘陵地の湿地やため池、放棄水田、台地から区部にかけての川岸などに、極めて稀に群生する。</p>
<p>確認状況</p>	<p>〇〇や〇〇において、2015 年度に 3 箇所、2016 年度に 5 箇所、2017 年度に 4 箇所、2018 年度に 5 箇所、2019 年度に 16 箇所、2021 年度に 19 箇所 で 49 株以上が確認された。</p>
	<p>ミコシガヤ（カヤツリグサ科）</p>
	<p>東京都レッドリスト 準絶滅危惧 (NT)</p>
<p>生態等</p>	<p>平地や河川の縁などの草地に生える多年草。匍枝がなく密に叢生し、有花茎は高さ 30～60cm、鈍稜があつて平滑。葉は幅 2～3mm。小穂は多数集まって長さ 3～6cm の狭卵形の密な花序をつくり、おのおの上方に雄花、下方に雌花をつけて卵円形、柄はなく長さ 4～8mm、下方の 2～3 個の苞は長い葉状で開出する。5～6 月に熟す。</p>
<p>確認状況</p>	<p>2021 年度に〇〇において、1 箇所 で 1 株が確認されたが、その後の草刈りで見当たらなくなった。このほか、2016 年度、2017 年度、2018 年度、2019 年度に〇〇において確認された。</p> <p>※調査 I（2021 年度）の夏季に確認された個体は、その後の草刈りにより消失したとされる。（資料：環境概況調査委託（2 北南－小金井 3・4・11 外 1 路線）報告書（令和 3 年 11 月、ユーロフイン日本環境株式会社））</p>



表 2.2.2-34 注目される植物種の生育状況（植物⑤）

	<p>カンエンガヤツリ（カヤツリグサ科）                      環境省レッドリスト 絶滅危惧 II 類 (VU)                      東京都レッドリスト 準絶滅危惧 (NT)</p> <p>生態等                      一年草。叢生し、茎は高さ 80～120cm、葉は幅 8～15mm、花茎より短い。花期は 8～9 月、花序は大型で茎頂に集まり、長さ幅とも 10～30cm に達し、苞は葉状で花序より著しく長い。小穂は線形で長さ 4～18mm、扁平、熟すと光沢のある褐色となる。そう果は三稜形、柱頭 3 岐。朝鮮半島では古くからワングルの名で広く栽培され、編物細工に使用されている。河原や池畔など湿地に生育する。                      都内では多摩地域の河川敷や区部の低地のかく乱頻度の高い湿地に生育するが、発生は散発的である。区部東部の池では水位が下がった年にしばしば大群生が発生している。</p>
<p>確認状況</p>	<p>〇〇〇〇や〇〇〇〇において、2016 年度に 4 箇所を確認された。</p>
	<p>ニリンソウ（キンボウゲ科）                      東京都レッドリスト 準絶滅危惧 (NT)</p> <p>生態等                      多年草。根出葉は 3 全裂し、側裂片はさらに 2 深裂する。4～5 月頃、花茎に径 2cm ぐらいの花を 1～4 個つける。萼片は 5～7 枚、楕円形で、白色、裏面はときに紅色を帯びる。そう果は楕円形で細毛を密生する。樹林内や林縁、ときに草原にも生育する。                      都内では台地から丘陵地、山地まで分布し、段丘崖、谷筋などの適湿土壤に群落を形成して生育する。区部及び北多摩で特に自生地が減少している。</p>
<p>確認状況</p>	<p>〇〇〇〇において、2021 年度に 1 箇所                      で 30 株（小規模な群落状）、2022 年度に 2 箇所                      で確認された。</p>

表 2.2.2-35 注目される植物種の生育状況（植物⑥）

ズミ（バラ科）	
東京都レッドリスト 絶滅危惧 II 類 (VU)	
生態等	<p>落葉性の低木～小高木。高さ 10m に達する。短枝はしばしば刺状となる。葉は狭卵形、楕円形から長楕円形または狭倒卵形、長さ 3～10cm。花は白色ではじめ紅色を帯び、径 2～3cm、4～8 個が短枝に散状につき、5～6 月に咲く。果実は球形で無毛、径 6～10mm、赤色に熟す。山林原野に生育する。</p> <p>都内では北多摩及び南多摩の丘陵地下部のシイ・カシ林の林縁、西多摩の山地の温帯林の尾根などに生育する。</p>
確認状況	<p>2017 年度に [ ] において確認された。</p>
ズミ（バラ科）	
東京都レッドリスト 準絶滅危惧 (NT)	
生態等	<p>落葉高木。別名オオシロヤナギ。高さ 5～10m になる。葉は狭楕円形で長さ 10～15cm、幅 1～2.5cm。葉の裏面は粉白色で、両面とも無毛である。雌雄別株だが雌株だけが知られている。花期は 3～4 月で、葉の展開と同時に開花する。花序は長さ約 1.5cm の楕円形で、黄色の腺体が 2 個あり、子房と苞に白い毛が密生する。湿地に多く生育する。</p> <p>都内では河川中流域から下流域にかけての河川敷、また丘陵地の谷戸の湿地に生育する。西多摩、南多摩では、多摩川の河川敷と谷戸の湿地に散見される。</p>
確認状況	<p>2018 年度に [ ] において、1 箇所ですべて 1 株が確認された。</p> <p>※2019 年度以降は確認されておらず、小型の株だったため消失されたとされる。 （資料：環境概況調査委託（2 北南-小金井 3・4・11 外 1 路線）報告書（令和 3 年 11 月、ユーロフィン日本環境株式会社））</p>



※写真は「レッドデータブック東京」より



※写真は「レッドデータブック東京」より



表 2.2.2-36 注目される植物種の生育状況（植物⑦）

	<p>カワヂシャ（オオバコ科）</p>
	<p>環境省レッドリスト 準絶滅危惧 (NT) 東京都レッドリスト 絶滅危惧 II 類 (VU)</p>
 <p>※写真は「レッドデータブック東京」より</p>	<p>生態等</p>
	<p>川岸や水路、水田などに生える越年草。茎は直立または斜上して高さ 10～100cm、葉とともに無毛である。葉は狭卵形または長楕円状狭卵形で先はややとがり、基部は円形で柄がなく茎をやや包み、縁にはややとがる鋸歯があり、長さ 2.5-8cm、幅 0.5cm-2.5cm。花期は 5～6 月、葉腋に長さ 5～15cm、幅 1～1.5cm の細い花序を出し、50～120 個の花をつける。花冠は白色から白紫色で淡紫色の脈があり、皿状に広く開き、径 4～6mm。帰化種オオカワヂシャと雑種を作り、これをホナガカワヂシャという。</p> <p>確認状況</p> <p>〇〇や〇〇において、2016 年度に 1 箇所、2019 年度に 3 箇所、2021 年度に 1 箇所、2022 年度に 5 箇所が確認された。</p>
<p>写真なし</p>	<p>ハッカ（シソ科）</p>
	<p>東京都レッドリスト 絶滅危惧 II 類 (VU)</p>
<p>生態等</p>	<p>湿地や田の畔、用水路脇などに生える多年草。横走する地下茎があり、地上部は全体に芳香がある。茎は四角で、高さ 20～50cm、葉や芽とともに軟毛がある。葉は狭卵形～長楕円形、長さ 2～8cm、幅 1～2.5cm、鋭い鋸歯があり、両端はとがり、5～15mm の葉柄がある。花期は 8～10 月、上部の葉腋に球状に集まり、ごく薄い淡紫色。</p>
	<p>確認状況</p> <p>2017 年度、2018 年度、2019 年度に〇〇で確認された。</p>
<p>タカサブロウ（キク科）</p>	<p>東京都レッドリスト 留意種 (*)</p>
	<p>水田や湿地などに多い一年草。茎は高さ 10～60cm、葉は対生で、披針形または楕円～線状披針形、長さ 3～10cm、幅 5～25mm で、茎とともに短い剛毛があつて、両面はいちじるしくざらつく。花期は 7～9 月。頭花は開花時に径約 6mm、花後約 9mm、柄は 2～4.5cm。舌状花は 2 列、白色で長さ 2.5～3mm、先端は 2 裂する。筒状花は白色で多数。瘦果は長さ 2.5～3mm、厚みがあつて縁は翼状、側面中央部にこぶ状の隆起があり、表面はざらつく。</p> <p>確認状況</p> <p>2017 年度に〇〇や〇〇で確認された。</p>



#### ④植生

2021年度に調査、作成された植生図を図 2.2.2-5 に示す。

調査範囲の多くは都市公園内であり、植栽された樹林となっている。構成種はコナラやクヌギ、ケヤキ、サクラ類、アメリカスズカケノキ、エノキといった落葉広葉樹が多く、ほかにシラカシ、マテバシイ、クスノキ、タブノキなどの常緑広葉樹やアカマツ、ヒノキ、サワラ、ドイツトウヒなどの針葉樹が植栽されており、樹高は20m前後に達している。

「ハケの森」と呼ばれる国分寺崖線の斜面林は、コナラやクヌギ、ムクノキ、イロハモミジなどの落葉広葉樹やアカマツ、モミなどの針葉樹、ツバキ類、シラカシなどの常緑広葉樹からなる雑木林の状況であるが、明らかに植栽されたものも混じっている。林床はアズマネザサやクマザサなどのササ類が繁茂しているが除草等の管理がされている。

法面を含む自然再生事業実施地は、オギを主体とした草地が広く、  
にはノカンゾウが生育している。はウキヤガラやヒメガマが良く茂った抽水植物群落となっている。はウキヤガラやヒメガマに混じってミクリが生育する抽水植物群落となっている。



資料：環境概況調査委託（2北南－小金井3・4・11外1路線）報告書  
 （令和3年11月、ユーロフィン日本環境株式会社）

図 2.2.2-5 植生図

## ⑤生態系

### a. 計画路線周辺の環境類型区分

計画路線周辺の基盤環境、植生、地形等を考慮し、表 2.2.2-38 に示す6つの環境類型区分を設定した。また、設定した環境類型区分に沿って環境類型区分図を整理した。

表 2.2.2-37 計画道路周辺の自然環境の概要




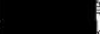

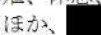



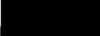

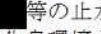





地形	水域	土地利用	地形の状況	植生の状況
台地・丘陵地	—	樹林	崖線斜面	一部が造成されているがコナラやクヌギ等の落葉広葉樹にシラカシ等の常緑広葉樹が混じる混交林で、一般市民が立ち入らない閉鎖管理地となっている。
低地	止水域	自然再生事業地、調節池、水田	池沼の水域及び平坦地	野川の左岸側に位置する、自然再生事業地が含まれる調節池。かつて野川周辺にみられた水田や湿地が復元されており、湿性草地在が広がる。
	流水域	河川、堤防	河川の水域及び平坦地	野川に沿って、水辺に抽水植物が優占する湿性草地在が連続している。
	—	公園緑地、建築物、道路	堤内地の平坦地	野川の右岸側に位置し、ケヤキやドイツトウヒ等の多様な高木が植栽されている。一部は野球場やバーベキュー広場として利用されており、芝地等の草地在がみられる。

### b. 環境類型区分の代表種と食物連鎖模式図

既往の現地調査結果等を基に、環境類型区分毎に生息・生育している主な動植物を整理した。また、環境類型区分と生息・生育している動植物の相互関係を整理し、地域を特徴づける生態系の食物連鎖模式図を整理した。



表 2.2.2-38 環境類型区分

環境類型区分	植生の状況 (対応する植生図の植生凡例)	特徴	占有面積 (ha)	占有率 (%)	備考
樹林地		<ul style="list-style-type: none"> <li>・国分寺崖線の斜面上に成立する樹林環境</li> <li>・クヌギ、コナラ、シラカシ、ムクノキ等の高木性樹種が優占するほか、 </li> <li>・等の里山を代表する重要種が生育</li> <li>・やコゲラ等の鳥類が繁殖、休息、採餌環境として樹林地を利用するほか、</li> <li>・やコクワガタ等の樹林性の動物が生息する</li> </ul>	0.44	5.4	国分寺崖線
湿性草地・水域 (流水域)		<ul style="list-style-type: none"> <li>・野川の水辺に成立する湿性の草地環境</li> <li>・野川の上流から流下する水によって涵養されている</li> <li>・オギ草地や抽水植物群落（ヒメガマ等）が主に分布しており、野川に沿って連続している</li> <li>・採餌環境として水辺を利用する鳥類、水域と陸域の移行帯に生息する両生類や、産卵や稚魚の生息環境として利用する魚類、底生動物等が生息する</li> </ul>	0.48	5.9	野川
湿性草地・水域 (止水域)		<ul style="list-style-type: none"> <li>・第一調節池に整備された水田や湿地に成立する湿性の草地環境</li> <li>・国分寺崖線からの湧水によって涵養されている</li> <li>・オギ草地や抽水植物群落（）が主に分布する</li> <li>・等の湧水に依存する種や、や等の止水環境で繁殖する種、産卵や稚魚の生息環境として利用する魚類、底生動物等が生息する</li> </ul>	0.38	4.8	
植栽樹群		<ul style="list-style-type: none"> <li>・武蔵野公園内に植栽された高木性樹種が優占する樹林環境</li> <li>・植栽されたケヤキやドイツトウヒ、モウソウチク等が生育</li> <li>・調査地域の43%以上を占める、最も優占率の高い区分である</li> <li>・鳥類が繁殖、休息、採餌環境として植栽樹群を利用するほか、ミカン科の植物を食草とするアゲハや公園の植栽木や庭木等を利用するカネタタキ等の樹林性の動物が生息する</li> </ul>	3.54	43.2	武蔵野公園
乾性草地 (人工草地)		<ul style="list-style-type: none"> <li>・主に武蔵野公園の野球グラウンドや東広場、野川左岸側に成立する比較的乾燥した草地環境</li> <li>・植栽されたシバのほか、シロツメクサやオオバコ等が生育</li> <li>・調査地域の約19%程度を占める、植栽樹群に次いで優占率の高い区分である</li> <li>・開放的な草地環境を好むムクドリやハクセキレイ等の鳥類や草本を食草とする昆虫類が生息する</li> </ul>	1.52	18.5	
人工構造物等		<ul style="list-style-type: none"> <li>・調査地域の約22%を占める</li> <li>・地表がコンクリート等で被覆され、動植物の経常的な利用がない環境</li> <li>・都市的環境に適応したやアライグマ等の動物が生息する可能性がある</li> </ul>	1.36	22.4	武蔵野公園 ・ハケの道 ・国分寺崖線

※専有面積、占有率は、「環境概況調査委託（2北南-小金井3・4・11外1路線）報告書（令和3年11月、ユーロフィン日本環境株式会社）」の植生図（GISデータ）を基に算出した。



図 2.2.2-6 環境類型区分図



表 2.2.2-39 環境類型区分と生息・生育している主な動植物

項目	湿性草地・水域 (流水域)	湿性草地・水域 (止水域)	乾性草地 (人工草地)	植栽樹群	樹林地	人工構造物等
哺乳類	アライグマ	アライグマ	アライグマ、アライグマ、ネコ、タヌキ	アライグマ、アライグマ、ネコ	アライグマ、アライグマ、アライグマ、ネコ	アライグマ、ネコ
鳥類	カウモ、アマガシ、タビ、カウモ	カウモ、アマガシ、タビ	カウモ、アマガシ、タビ、カウモ、アマガシ	カウモ、アマガシ、タビ	カウモ、アマガシ、タビ	—
両生類・爬虫類	ミシジキアマガシ	カウモ、アマガシ	カウモ	カウモ、アマガシ	カウモ、アマガシ	—
昆虫類	アマガシ、カウモ、アマガシ、カウモ	アマガシ、カウモ、アマガシ	アマガシ、カウモ、アマガシ	アマガシ、カウモ	アマガシ、カウモ	—
魚類	コイ(飼育型)、カウモ、アマガシ	コイ(飼育型)、カウモ	—	—	—	—
底生	カウモ、アマガシ、カウモ	カウモ、アマガシ	—	—	—	—
植物	カウモ、アマガシ、カウモ	カウモ、アマガシ	カウモ、アマガシ	カウモ、アマガシ	カウモ、アマガシ	—
植生	カウモ、アマガシ	カウモ、アマガシ	カウモ、アマガシ	カウモ、アマガシ	カウモ、アマガシ	カウモ、アマガシ

※下線の種は「注目される種」を示す。



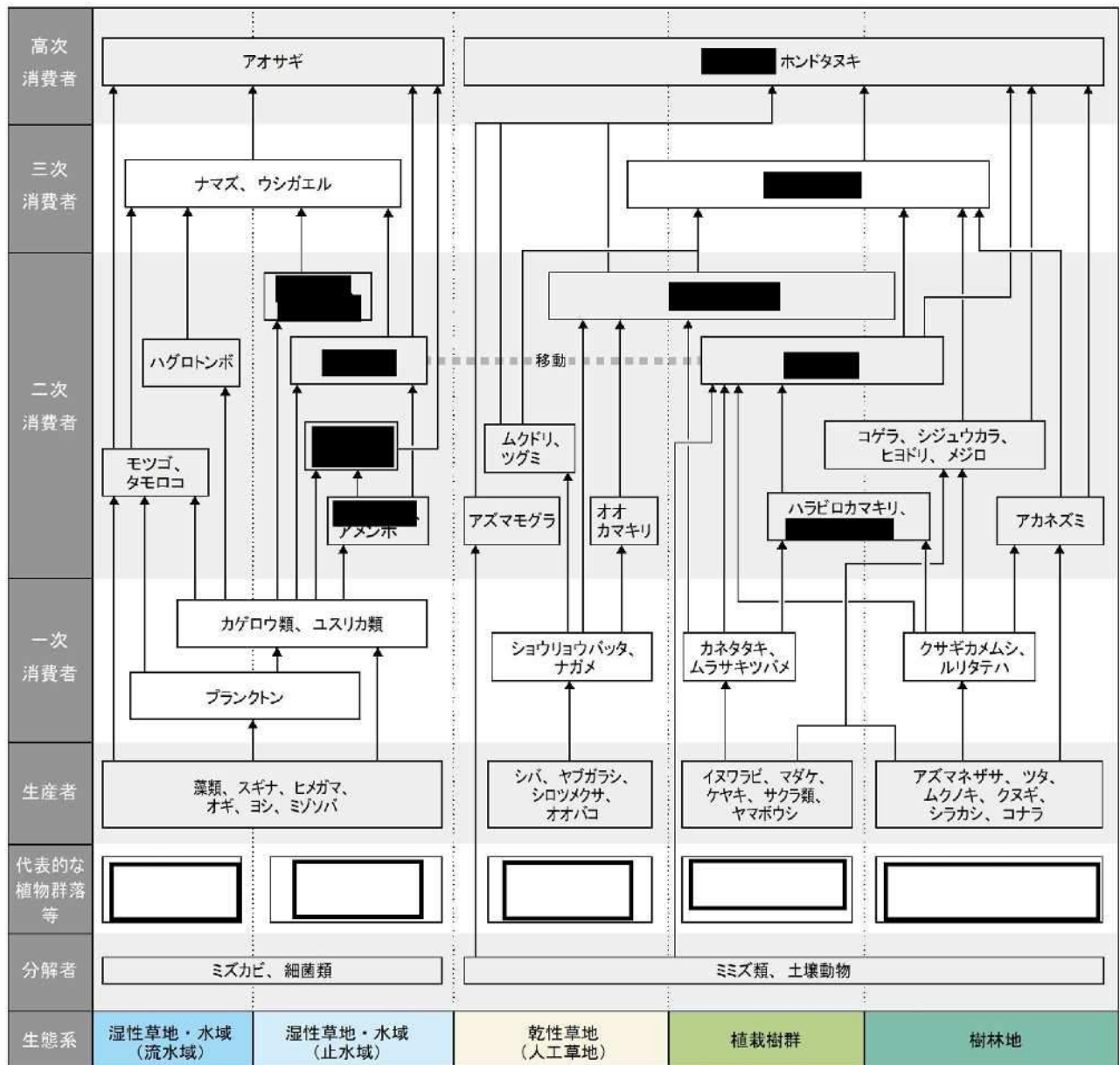


図 2.2.2-7 食物連鎖模式図

c. 注目される種

I. 上位性、典型性、特殊性の種の選定

調査地域の生態系を特徴づける動植物種として表 2.2.2-40 に示す選定基準により、上位性、典型性、特殊性を示す種を選定した。

表 2.2.2-40 生態系において注目される種の選定基準

項目	選定基準
上位性	調査地域における食物連鎖の上位に位置する（栄養段階が上位に位置する）種及び群集
典型性	調査地域の生態系の中で、重要な機能的役割を持つ、生物多様性を特徴づける等、当該生態系の特徴をよく示す種及び群集
特殊性	調査地域の中で占有面積は比較的小規模であっても、特殊な環境に生息・生育するほか、特殊な環境を指標する種及び群集

表 2.2.2-41 生態系において注目される種

環境	項目	選定種	選定理由
水域	上位性	アオサギ	大型のサギ類で、水辺で様々な動物を捕食する。計画路線周辺を利用する種の中で、水域生態系の上位に位置するため、上位性種として選定した。
	典型性	モツゴ	池沼や河川の下流域等に広く生息する小型の魚類。野川の水辺を代表するヒメガマやヨシ等の抽水植物が繁茂する植生を生息、繁殖の場として利用し、予測地域の水域を代表する種であるため、典型性種として選定した。
	特殊性	なし	予測地域では、特殊な環境又は特殊な環境を指標とする種及び群集が確認されなかったため、選定しなかった。
陸域	上位性	タヌキ	雑食性の哺乳類で、植物のほか様々な動物を捕食する。計画路線周辺を利用する種の中で、陸域生態系の上位に位置するため、上位性種として選定した。
	典型性	シジュウカラ	留鳥として1年を通して生息しており、予測地域の陸域（樹林環境）を代表する種であるため、典型性種として選定した。
		ムクドリ	留鳥として1年を通して生息しており、予測地域の陸域（草地環境）を代表する種であるため、典型性種として選定した。
特殊性	なし	予測地域では、特殊な環境又は特殊な環境を指標とする種及び群集が確認されなかったため、選定しなかった。	

## II. 生態系において注目される種の確認状況

生態系において注目される種の確認状況を表 2.2.2-42 に示す。

表 2.2.2-42 生態系において注目される種の確認状況

環境	項目	選定種	注目される種の確認状況
水域	上位性	アオサギ	<p>2021年度に実施したラインセンサス法による調査結果では、秋季及び冬季に合計3例が確認された。</p> <p>本種は、留鳥または漂鳥として分布し、平地から丘陵地の樹林に集団でコロニーをつくる。浅瀬で魚類のほか両生類、爬虫類、小型哺乳類、鳥類の雛等、様々な動物を捕食する。野川や自然再生事業地の湿地では、本種の餌となる魚類や両生類等が多いことから、野川及び自然再生事業地の水辺が主な餌場になっているものと考えられる。</p>
	典型性	モツゴ	<p>2021年度に実施した調査では、夏季に野川において、事業実施区域の上流側及び下流側で合計10個体が確認された。なお、2019年度以前に第一調節池においても確認された記録がある。</p> <p>本種は、富栄養化に強く、泥が深く堆積した水路やため池でも生息でき、石や抽水植物等に産卵する。本種が確認された野川は、本種の餌となるプランクトンや、産卵基質となる石や抽水植物の茎等が多く存在することから、生息・繁殖の場として利用していると考えられる。</p>
陸域	上位性	タヌキ	<p>2021年度に実施した無人撮影による調査結果では、春季に閉鎖管理地とバードサンクチュアリで確認され、とくに閉鎖管理地では2個体が撮影されていた。</p> <p>本種は、日中は巣穴で休息する。夜間に出現し、果実や穀類のほか、昆虫類、魚類、両生類、鳥類等を捕食する。本種の生態から、樹林地、湿性草地・水域、植栽樹群、乾性草地（人工草地）等、当該地域にみられる様々な環境を採食の場として利用していると考えられる。</p>
	典型性	シジュウカラ	<p>2021年度に実施したラインセンサス法による調査結果では、年間を通して合計21例が確認され、2番目に優占する種（約11%）であった。</p> <p>本種は、留鳥として平地から山地の樹林地に生息する。樹木の多い市街地でも良く確認され、主に樹上で昆虫類か裸木の実等を採食する雑食性である。また、樹洞やキツツキ類の古巣等に営巣する。本種の生態から、広葉樹の生育する樹林地や植栽樹群を採食・繁殖の場として利用していると考えられる。</p>
		ムクドリ	<p>2021年度に実施したラインセンサス法による調査結果では、年間を通して合計13例が確認され、5番目に優占する種（約7%）であった。</p> <p>本種は、留鳥として農地や市街地等に生息する。地上で昆虫類や植物の種子、果実等を採食する雑食性である。また、樹洞や巣箱等に営巣する。本種の生態から、樹林地や植栽樹群、乾性草地（人工草地）を採食・繁殖の場として利用していると考えられる。</p>



## (2) 予測・評価及び環境保全対策の検討

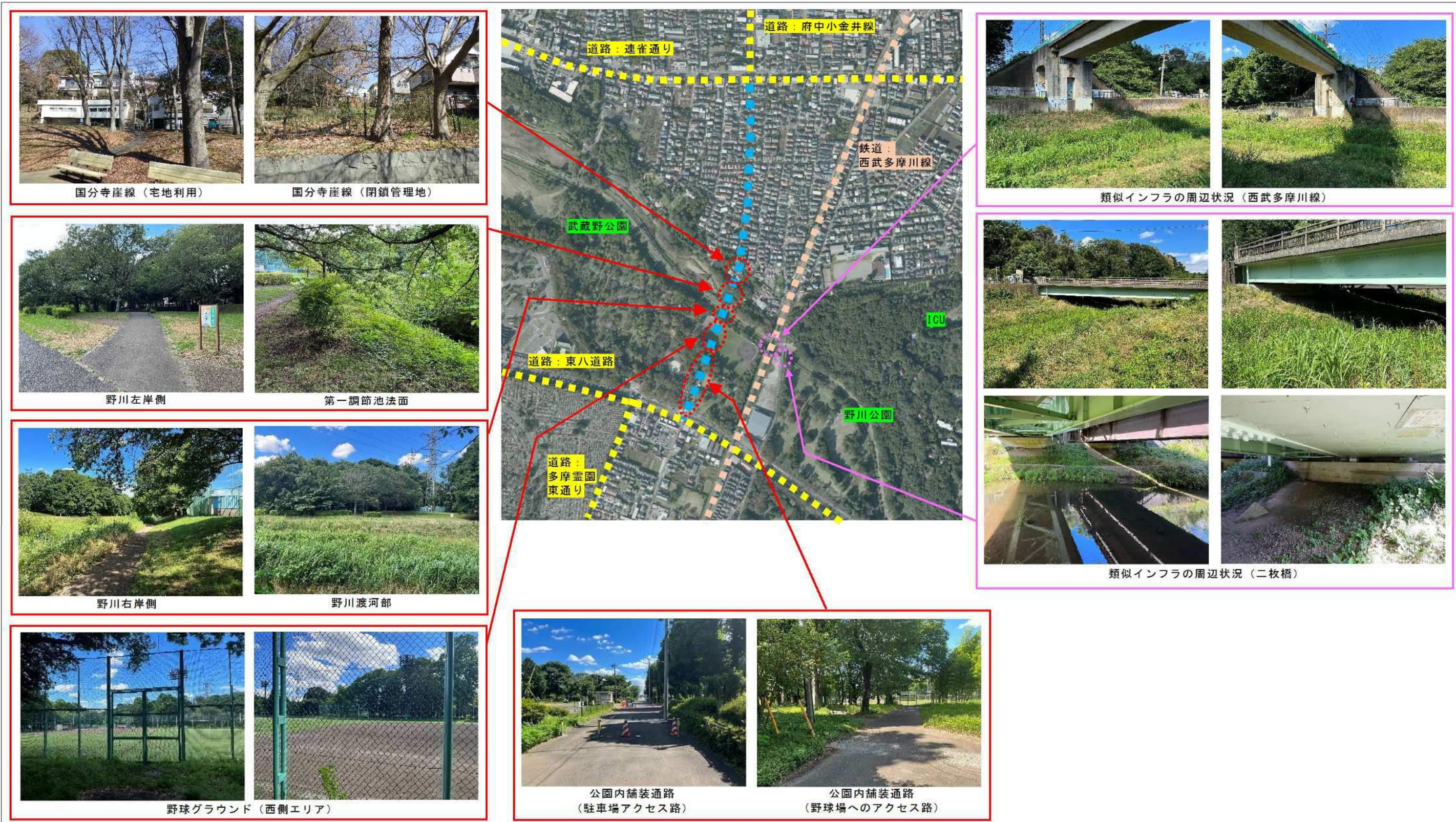
事業の実施に伴う動植物への影響について、計画路線周辺の動植物の状況と事業計画を重ね合わせ、定性的に予測を実施した。また、動植物への影響を最小限に留めるための環境保全対策について検討を行った。予測対象種は、既往の現地調査から把握した注目される種とした。

なお、本検討においては、現時点で橋梁、掘削、地下の3つの計画案が検討されているため、各案毎に検討を行い比較評価を行った。

### ア 予測・評価の前提条件

前提とした計画路線周辺の状況や計画案の概要等を次項以降に示す。





● 周辺環境の概要

- ・ 計画路線が関連する「武蔵野公園」、「野川」、「国分寺崖線」は隣接する「野川公園」、「IUC 樹林地」と併せ、地域のまとまった緑地として生物の主要な生息・生育環境となっている。
- ・ 一方で、事業実施区域は市街化された地域であり、周辺には本事業と同じ線の公共交通施設である道路（府中小金井線、連雀通り、東八道路、多摩霊園東通り）と鉄道（西武多摩川線）が存在する。
- ・ 特に西武多摩川線は、地域のまとまった緑地を南北に貫く形で存在している。

図 2.2.2-8 予測・評価の前提条件（計画路線周辺の状況）



表 2.2.2-43 予測・評価の前提条件（変更範囲の状況）

	橋梁案	掘割案	地下案
<p>●事業実施区域内（公園入口～崖線まで約370m）の現状は以下のとおり。 事業の実施に伴いこれらを改変する。</p>			
<p>●武蔵野公園出入口（東八道路）～公園管理事務所付近まで</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・延長約100m（全体の約27%）</li> <li>・公園内の自動車通路（舗装路）が整備されている区間。</li> <li>・通路沿いに低木・中高木が混在した植栽帯が整備されている。</li> <li>・隣接する西側エリアには西側駐車場や噴水広場（じゃぶじゃぶ池）、東側エリアは東側駐車場や芝地・遊歩道を主体とした東広場が整備されている。</li> </ul>			
<p>●公園管理事務所～野球グラウンド出入口まで</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・延長約60m（全体の約16%）</li> <li>・歩行者通路（舗装路）が整備されている区間。</li> <li>・通路沿いには公園植栽樹群として中高木が生育している。</li> </ul>			
<p>●野球グラウンド内</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・約70m（全体の約19%）</li> <li>・野球グラウンド内で、内野側は裸地であるが、外野側の一部は草地となっている。</li> </ul>			
<p>●野川、野川河川敷</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・約30m（全体の約8%）</li> <li>・野川とその河川敷。水域・湿性環境である。</li> </ul>			
<p>●野川左岸側（野川河川敷～ハケの道）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・約70m（全体の約19%）</li> <li>・武蔵野公園の一部であり、公園植栽樹群として中高木が生育している。</li> <li>・第一調節池が存在する。</li> </ul>			
<p>●国分寺崖線</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・約40m（全体の約11%）</li> <li>・国分寺崖線であるが、事業実施区域内の殆どは既に宅地利用されている。</li> </ul>			
備考			



表 2.2.2-44 予測・評価の前提条件（環境類型区分の状況と変更範囲）

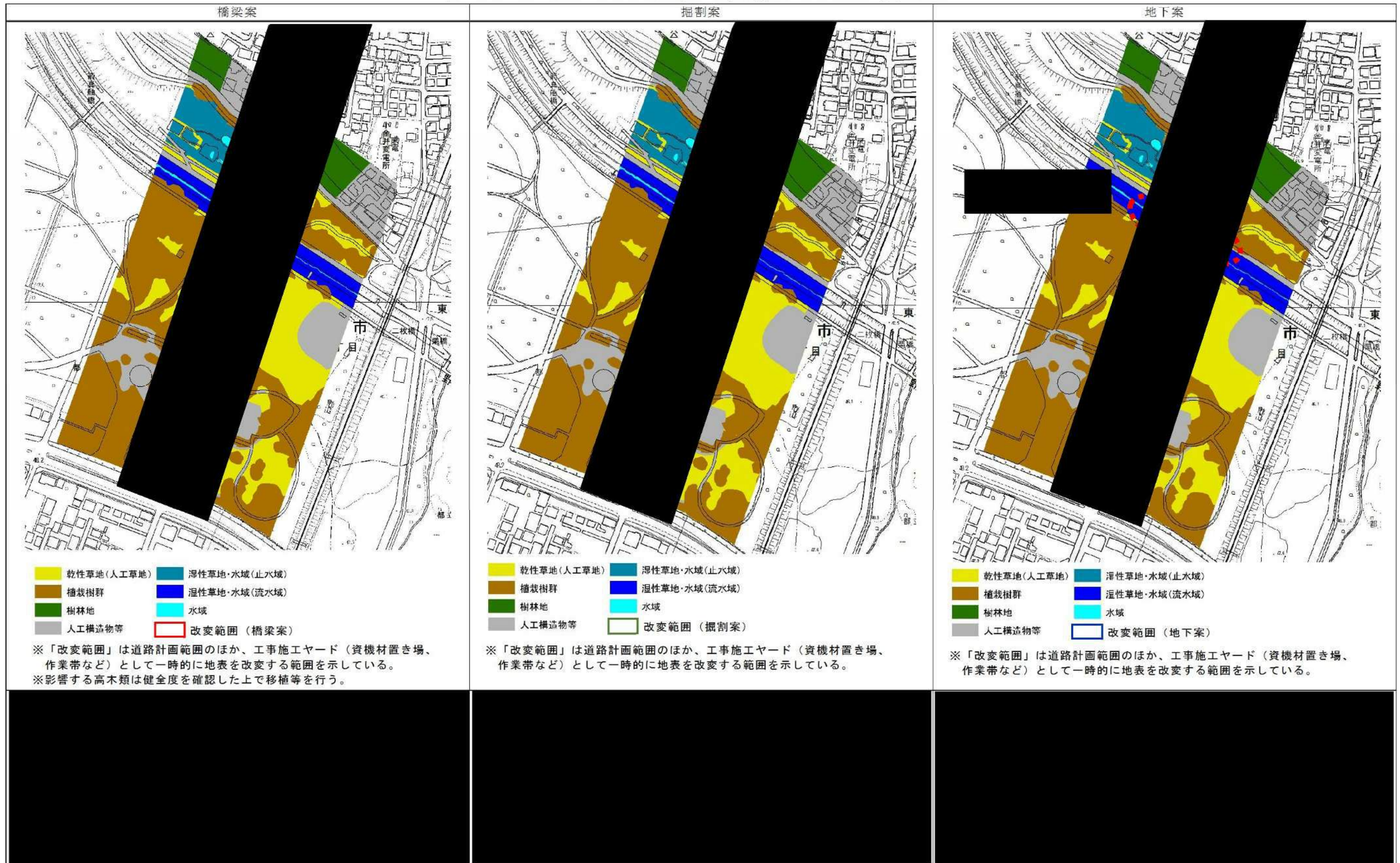




表 2.2.2-45 予測・評価の前提条件（環境類型区分の状況と構造物の出現範囲）

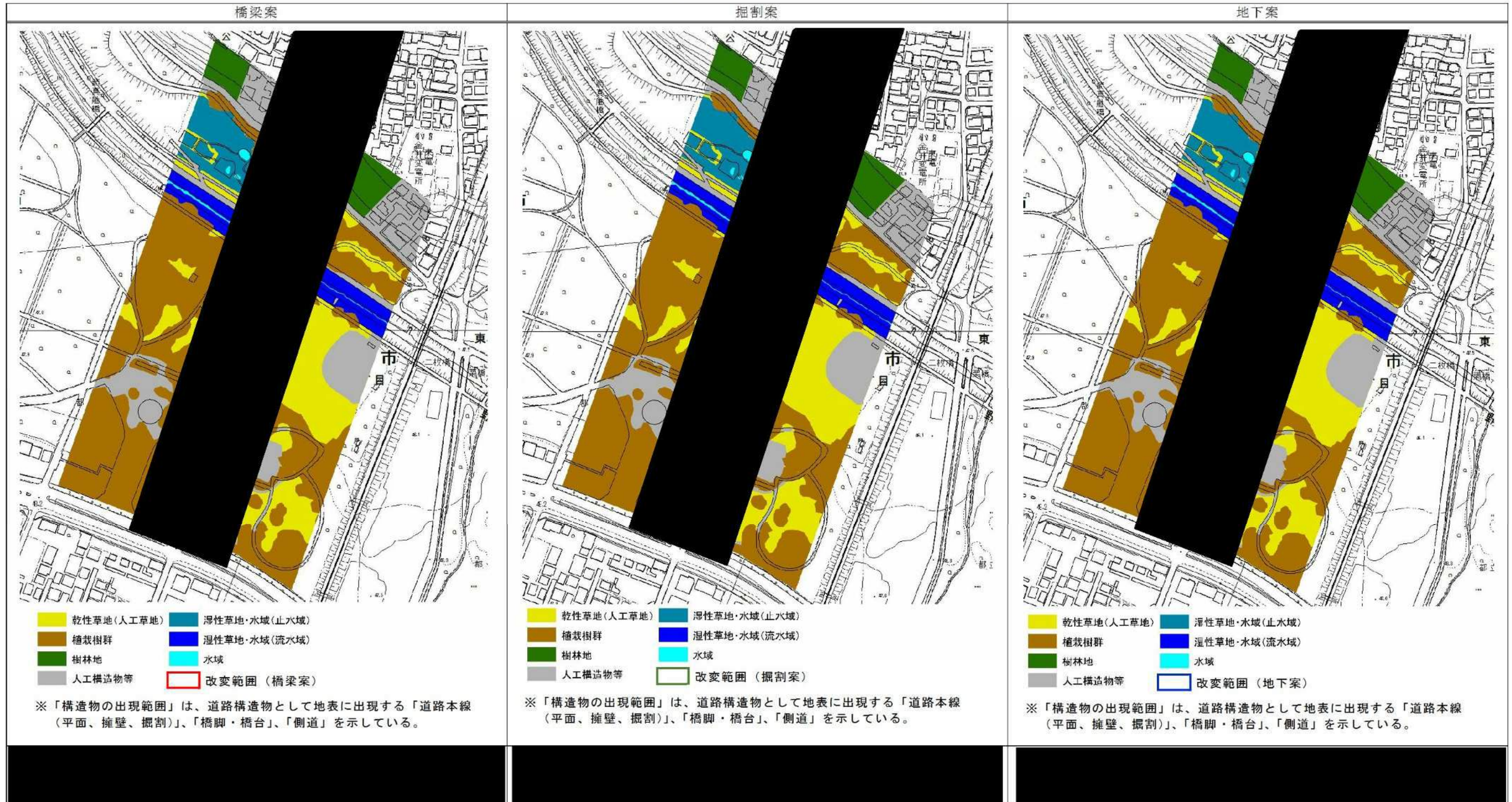




表 2.2.2-46 予測・評価の前提条件（環境類型区分の状況と改変範囲・構造物の出現範囲）（橋梁案）

	環境類型区分					「改変範囲」、「構造物の出現範囲」の合計 (人工構造物等を除く)
	人工 構造物等	樹林地	湿性草地・ 水域(流水域)	湿性草地・ 水域(止水域)	植栽樹群	
武蔵野公園						
野川						
崖線						

※表中の面積は、環境類型区分図（植生図を基に整理）と事業計画を重ね合わせて概算面積を計上したものである。  
 現況面積は植生図の作成範囲（道路計画線端部から片側100m程度の範囲）を対象とした面積である。  
 （資料：環境概況調査委託（2北南一小金井3・4・11外1路線）報告書（令和3年11月、ユーロフィン日本環境株式会社））

※影響する高木類は健全度を確認した上で移植等を行う。



表 2.2.2-47 予測・評価の前提条件（環境類型区分の状況と改変範囲・構造物の出現範囲）（掘割案）

	環境類型区分					「改変範囲」、 「構造物の出現 範囲」の合計 (人工構造物等を除く)
	人工 構造物等	樹林地	湿性草地・ 水域(流水域)	湿性草地・ 水域(止水域)	植栽樹群	
武蔵野公園						
野川						
崖線						

※表中の面積は、環境類型区分図（植生図を基に整理）と事業計画を重ね合わせて概算面積を計上したものである。  
 現況面積は植生図の作成範囲（道路計画線端部から片側100m程度の範囲）を対象とした面積である。  
 （資料：環境概況調査委託（2北南一小金井3・4・11外1路線）報告書（令和3年11月、ユーロフィン日本環境株式会社））

表 2.2.2-48 予測・評価の前提条件（環境類型区分の状況と改変範囲・構造物の出現範囲）（地下案）

	環境類型区分					「改変範囲」、 「構造物の出現 範囲」の合計 (人工構造物等を除く)
	人工 構造物等	樹林地	湿性草地・ 水域(流水域)	湿性草地・ 水域(止水域)	植栽樹群	
武蔵野公園						
野川						
崖線						

※表中の面積は、環境類型区分図（植生図を基に整理）と事業計画を重ね合わせて概算面積を計上したものである。  
 現況面積は植生図の作成範囲（道路計画線端部から片側100m程度の範囲）を対象とした面積である。  
 （資料：環境概況調査委託（2北南一小金井3・4・11外1路線）報告書（令和3年11月、ユニーロフィン日本環境株式会社））



イ 予測・評価の結果

予測・評価の結果を表 2.2.2-49 に示す。また、環境保全対策を表 2.2.2-50 に示す。

※種毎の予測結果は表 2.2.2-51～表 2.2.2-80 に示す。

表 2.2.2-49 予測・評価の結果（動物・植物）

橋梁案	掘割案	地下案



表 2.2.2-50 環境保全対策（動物・植物）

環境保全対策	橋梁案	掘割案	地下案
[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]

※関連する案に「○」を示した。

表 2.2.2-51 予測結果（鳥類①）

種名	項目	橋梁案	掘削案	地下案
クイナ	確認状況	調査Ⅰ：秋季に [ ] において、1箇所ですべて1例が確認された。		
	予測結果	[ ]		
ツミ	確認状況	調査Ⅶ：春季に [ ] を飛行する1例が確認された。		
	予測結果	[ ]		

表 2.2.2-52 予測結果（鳥類②）

種名	項目	橋梁案	掘削案	地下案
オオタカ	確認状況	調査Ⅰ：秋季に [ ] を飛翔する1例が確認された。 調査Ⅶ：春季に [ ] を飛翔する1例が確認された。 その他調査： [ ] 内における繁殖が確認された。		
	予測結果			
カワセミ	確認状況	調査Ⅰ：秋季及び冬季に [ ] において、3箇所 で 3例が確認された。		
	予測結果			



表 2.2.2-53 予測結果（鳥類②）

種名	項目	橋梁案	掘削案	地下案
サンショウクイ	確認状況	調査Ⅶ：春季に [ ] を飛翔する1例が確認された。		
	予測結果	[ ]	[ ]	[ ]
リュウキュウサンショウクイ	確認状況	調査Ⅶ：秋季に [ ] 内において、1箇所1例が確認された。		
	予測結果	[ ]	[ ]	[ ]
モズ	確認状況	調査Ⅰ：秋季及び冬季に [ ] 付近や [ ] 付近において、3箇所3例が確認された。 調査Ⅶ：秋季に [ ] 内において、1箇所1例が確認された。		
	予測結果	[ ]	[ ]	[ ]

表 2.2.2-54 予測結果（鳥類③）

種名	項目	橋梁案	掘削案	地下案
オナガ	確認状況	調査Ⅰ：春季に [ ] において、1箇所ですべての音が確認された。		
	予測結果	[ ]		
センダイムシクイ	確認状況	調査Ⅰ：春季に [ ] において、1箇所ですべての音が確認された。 調査Ⅶ：春季に [ ] 内において1箇所ですべての音が確認された。		
	予測結果	[ ]		
イカル	確認状況	調査Ⅰ：冬季に [ ] 1箇所ですべての音が確認されたほか、 夏季に [ ] 付近において、1箇所ですべての音が確認された。		
	予測結果	[ ]		

表 2.2.2-55 予測結果（爬虫類①）

種名	項目	橋梁案	掘割案	地下案
ニホンヤモリ	確認状況	調査 I : [ ] 等の 4 箇所 で成体 4 個体が確認された。		
	予測結果	[ ]	[ ]	[ ]
ヒガシニホントカゲ	確認状況	調査 I : [ ] の 2 箇所 で幼体や成体が確認された。 調査 VII : [ ] 内の 2 箇所 で確認された。		
	予測結果	[ ]	[ ]	[ ]
ニホンカナヘビ	確認状況	調査 I : [ ] 内やその周辺等の 6 箇所 で幼体及び成体が確認された。 調査 VII : [ ] 内の広範囲 で確認された。		
	予測結果	[ ]	[ ]	[ ]



表 2.2.2-56 予測結果（爬虫類②）

種名	項目	橋梁案	掘割案	地下案
シマヘビ	確認状況	調査Ⅶ： [ ] 内において、1箇所を確認された。		
	予測結果	[ ]	[ ]	[ ]
アオダイショウ	確認状況	調査Ⅰ： [ ] 内の2箇所にて成体2個体を確認された。 調査Ⅶ： [ ] 内の1箇所を確認された。		
	予測結果	[ ]	[ ]	[ ]

表 2.2.2-57 予測結果（両生類）

種名	項目	橋梁案	掘割案	地下案
ヒキガエル	確認状況	調査Ⅰ：[ ]等の3箇所で幼体が、[ ]等の3箇所で幼生が確認された。 調査Ⅶ：[ ]の1箇所で確認された。		
	予測結果			
ニホンアマガエル	確認状況	調査Ⅰ：[ ]の1箇所で2個体の鳴き声が確認された。		
	予測結果			

※ヒキガエルは「アズマヒキガエル」の場合を想定して予測した。

表 2.2.2-58 予測結果（昆虫類①）

種名	項目	橋梁案	掘削案	地下案
ホソミオツネトンボ	確認状況	調査Ⅶ： [ ] において1箇所を確認された。		
	予測結果	[ ]	[ ]	[ ]
アオイトトンボ	確認状況	調査Ⅱ： [ ] 周辺の2箇所を確認された。 調査Ⅶ： [ ] 内の1箇所を確認された。		
	予測結果	[ ]	[ ]	[ ]
ハラビロトンボ	確認状況	調査Ⅰ： [ ] 1箇所にて1個体が確認された。		
	予測結果	[ ]	[ ]	[ ]



表 2.2.2-59 予測結果（昆虫類②）

種名	項目	橋梁案	掘削案	地下案
マユタテアカネ	確認状況	調査Ⅱ： [ ] において確認された。 調査Ⅶ： [ ] 内の1箇所で確認された。		
	予測結果	[ ]	[ ]	[ ]
ミヤマアカネ	確認状況	調査Ⅱ： [ ] において確認された。 調査Ⅲ： [ ] において確認された。 調査Ⅵ： [ ] において確認された。		
	予測結果	[ ]	[ ]	[ ]
リスアカネ	確認状況	調査Ⅰ： [ ] 1箇所で1個体が確認された。		
	予測結果	[ ]	[ ]	[ ]

表 2.2.2-60 予測結果（昆虫類③）

種名	項目	橋梁案	掘割案	地下案
エノキカイガラ キジラミ	確認 状況	調査 I : [ ] 内において、合計 4 箇所 で 210 個 の虫えいが確認された。		
	予測 結果	[ ]	[ ]	[ ]
オオアメンボ	確認 状況	調査 I : [ ] 1 箇所 で 1 個体が確認された。		
	予測 結果	[ ]	[ ]	[ ]
ギンイチモン ジセセリ	確認 状況	調査 VII : [ ] の 1 箇所 で確認された。		
	予測 結果	[ ]	[ ]	[ ]
ジャノメチョ ウ	確認 状況	調査 II : [ ] において確認された。		
	予測 結果	[ ]	[ ]	[ ]

表 2.2.2-61 予測結果（昆虫類⑤）

種名	項目	橋梁案	掘削案	地下案
ホシミスジ	確認状況	調査VI： [ ] において確認された。 調査VII： [ ] 内の1箇所を確認された。		
	予測結果			
ヒオドシチョウ	確認状況	調査I： [ ] 内の2箇所にてエノキを食べる幼虫106個体が確認された。		
	予測結果			
ムナピロアオゴミムシ	確認状況	調査I： [ ] において確認された。		
	予測結果			
ウバタマムシ	確認状況	調査I： [ ] 1箇所にて1個体が確認された。		
	予測結果			



表 2.2.2-62 予測結果（昆虫類⑥）

種名	項目	橋梁案	掘削案	地下案
ヤマトタマムシ	確認状況	調査Ⅲ： [ ] において確認された。 調査Ⅵ： [ ] において確認された。 調査Ⅶ： [ ] において1箇所確認された。		
	予測結果			
トラフカミキリ	確認状況	調査Ⅰ： [ ] 付近において、1箇所1個体が確認された		
	予測結果			
モンスズメバチ	確認状況	調査Ⅰ： [ ] 内において、2箇所7個体が確認された。 調査Ⅲ： [ ] において1箇所確認された。		
	予測結果			
クロマルハナバチ	確認状況	調査Ⅶ： [ ] 内において1箇所確認された。		
	予測結果			

表 2.2.2-63 予測結果（クモ類）

種名	項目	橋梁案	掘割案	地下案
キシノウエト タテグモ	確認 状況	調査Ⅶ： <input type="text"/> 内において1箇所確認された。		
	予測 結果			

表 2.2.2-64 予測結果（陸産貝類）

種名	項目	橋梁案	掘割案	地下案
スナガイ	確認 状況	調査Ⅶ： <input type="text"/> 内において1箇所確認された。		
	予測 結果			

表 2.2.2-65 予測結果（魚類①）

種名	項目	橋梁案	掘割案	地下案
ギンブナ (フナ類)	確認 状況	調査 I : [ ] において、6 箇所 で 6 個 体 が 確 認 さ れ た。 調査 III : [ ] において 確 認 さ れ た。 調査 IV : [ ] において 確 認 さ れ た。 調査 V : [ ] において 1 箇 所 以 上 確 認 さ れ た。 調査 VI : [ ] において 確 認 さ れ た。		
	予 測 結 果			
オイカワ	確認 状況	調査 I : [ ] の 11 箇 所 で 11 個 体 が 確 認 さ れ た。 調査 II : [ ] において 確 認 さ れ た。 調査 III : [ ] において 確 認 さ れ た。 調査 IV : [ ] において 確 認 さ れ た。 調査 V : [ ] において 確 認 さ れ た。 調査 VI : [ ] において 確 認 さ れ た。		
	予 測 結 果			



表 2.2.2-66 予測結果（魚類②）

種名	項目	橋梁案	掘割案	地下案
ドジョウ類	確認状況	調査Ⅰ： [ ] において、1箇所ですべて確認された。 調査Ⅱ： [ ] において1箇所ですべて確認された。 調査Ⅲ： [ ] において1箇所ですべて確認された。 調査Ⅳ： [ ] において2箇所ですべて確認された。 調査Ⅴ： [ ] において1箇所ですべて確認された。 調査Ⅵ： [ ] において3箇所ですべて10個体が確認された。		
	予測結果			
ヒガシシマドジョウ（シマドジョウ種群）	確認状況	調査Ⅰ： [ ] の16箇所ですべて16個体が確認された。 調査Ⅱ： [ ] の2箇所ですべて確認された。 調査Ⅲ： [ ] の1箇所ですべて確認された。 調査Ⅵ： [ ] の3箇所ですべて7個体が確認された。		
	予測結果			

表 2.2.2-67 予測結果（魚類③）

種名	項目	橋梁案	掘割案	地下案
ホトケドジョウ	確認状況	調査Ⅱ： [ ] において1箇所を確認された。		
	予測結果	[ ]		
ミナミメダカ (メダカ類)	確認状況	調査Ⅰ： [ ] において7箇所て7個体を確認された。 調査Ⅱ： [ ] において7箇所て確認された。 調査Ⅲ： [ ] において5箇所て確認された。 調査Ⅳ： [ ] において6箇所て確認された。 調査Ⅴ： [ ] において12箇所て確認された。 調査Ⅵ： [ ] 確認された。		
	予測結果	[ ]		
ウキゴリ	確認状況	調査Ⅴ： [ ] において確認された。		
	予測結果	[ ]		

表 2.2.2-68 予測結果（底生動物①）

種名	項目	橋梁案	掘削案	地下案
ナガオカモノ アラガイ	確認 状況	調査 I : [ ] に生育する植物上の 1 箇所 で 2 個体 が 確認 され た。		
	予測 結果	[ ]		
カワコザラガ イ	確認 状況	調査 IV : [ ] において 確認 された。 調査 VI : [ ] において 確認 された。		
	予測 結果	[ ]		



表 2.2.2-69 予測結果（底生動物②）

種名	項目	橋梁案	掘割案	地下案
スジエビ	確認状況	調査Ⅰ： [ ] において1箇所にて2個体が確認された。 調査Ⅱ： [ ] において1箇所にて2個体が確認された。 調査Ⅵ： [ ] において1箇所にて2個体が確認された。		
	予測結果	[Redacted]		
オオアメンボ	確認状況	調査Ⅰ： [ ] の1箇所にて1個体が確認された。		
	予測結果	[Redacted]		

表 2.2.2-70 予測結果（底生動物③）

種名	項目	橋梁案	掘削案	地下案
センブリ属	確認 状況	調査VI : <span style="border: 1px solid black; display: inline-block; width: 50px; height: 15px;"></span> において確認された。		
	予測 結果			

※センブリ属は「ネグロセンブリ」、「トウホククロセンブリ」、「ヤマトセンブリ」の場合を想定して予測した。

表 2.2.2-71 予測結果（植物①）

種名	項目	橋梁案	掘割案	地下案
ナツノハナワ ラビ	確認 状況	調査Ⅰ： [ ] 内の 3 箇所 で 3 株 が 確認 された。		
	予測 結果	[ ]		
ウマノスズク サ	確認 状況	調査Ⅶ： [ ] 内の 1 箇所 で 確認 された。		
	予測 結果	[ ]		
ギンラン	確認 状況	調査Ⅶ： [ ] 内の 1 箇所 で 確認 された。		
	予測 結果	[ ]		



表 2.2.2-72 予測結果 (植物②)

種名	項目	橋梁案	掘割案	地下案
キンラン	確認状況	調査 I : [ ] などの 2 箇所 で 17 株 が 確認 され た。また、[ ] 内の 3 箇所 で 6 株 が 確認 され た。 調査 VII : [ ] などの 3 箇所 で 確認 され た。また、[ ] 内の 1 箇所 で 確認 され た。		
	予測結果			
ササバギンラン	確認状況	調査 I : [ ] 内の 1 箇所 で 1 株 が 確認 され た。		
	予測結果			
ノカンゾウ	確認状況	調査 I : [ ] 沿いの 草地 の 2 箇所 で 60 株 が 確認 され た。 調査 II : [ ] で 確認 され た。 調査 III : [ ] で 確認 され た。 調査 IV : [ ] で 確認 され た。 調査 VI : [ ] で 確認 され た。 調査 VII : [ ] 内の 5 箇所 で 確認 され た。		
	予測結果			

表 2.2.2-73 予測結果 (植物③)

種名	項目	橋梁案	掘割案	地下案
キツネノカミソリ	確認状況	調査Ⅶ： <input type="checkbox"/> 内の3箇所を確認された。		
	予測結果	[Redacted]		
ミクリ	確認状況	調査Ⅰ： <input type="checkbox"/> の12箇所で21株が確認された。 調査Ⅱ： <input type="checkbox"/> の3箇所を確認された。 調査Ⅲ： <input type="checkbox"/> の3箇所を確認された。 調査Ⅳ： <input type="checkbox"/> の4箇所を確認された。 調査Ⅴ： <input type="checkbox"/> の3箇所を確認された。 調査Ⅵ： <input type="checkbox"/> の8箇所で10株以上が確認された。		
	予測結果	[Redacted]		

表 2.2.2-74 予測結果 (植物④)

種名	項目	橋梁案	掘割案	地下案
ウキヤガラ	確認状況	調査 I : [ ] の 19 箇所 で 49 株 以上 が 確認 され た。 調査 II : [ ] で 3 箇所 確認 され た。 調査 III : [ ] で 5 箇所 確認 され た。 調査 IV : [ ] で 4 箇所 確認 され た。 調査 V : [ ] で 5 箇所 確認 され た。 調査 VI : [ ] の 16 箇所 で 15 株 以上 が 確認 され た。		
	予測結果			
ミコシガヤ	確認状況	調査 I : [ ] 1 箇所 で 1 株 が 確認 され た。 調査 III : [ ] で 確認 され た。 調査 IV : [ ] で 確認 され た。 調査 V : [ ] で 確認 され た。 調査 VI : [ ] で 確認 され た。 ※調査 I (2021 年度) の 夏季 に 確認 され た 個 体 は、その 後の 草刈り により 消 失 し た と され る。(資 料 : 環 境 概 況 調 査 委 託 (2 北 南 - 小 金 井 3 ・ 4 ・ 11 外 1 路 線) 報 告 書 (令 和 3 年 11 月、ユ ーロフ ィ ン 日 本 環 境 株 式 会 社))		
	予測結果			



表 2.2.2-75 予測結果 (植物⑤)

種名	項目	橋梁案	掘割案	地下案
カンエンガヤツリ	確認状況	調査Ⅲ： [ ] の4箇所を確認された。		
	予測結果	[ ]		
ニリンソウ	確認状況	調査Ⅰ： [ ] の1箇所、調査Ⅶ： [ ] の2箇所、調査Ⅷ： [ ] の2箇所を確認された。		
	予測結果	[ ]		
ズミ	確認状況	調査Ⅳ： [ ] で確認された。		
	予測結果	[ ]		

表 2.2.2-76 予測結果 (植物⑥)

種名	項目	橋梁案	掘割案	地下案
ジャヤナギ	確認状況	調査Ⅴ： [ ] において、1箇所1株が確認された。 ※2019年度以降は確認されておらず、小型の株だったため消失されたとされる。(資料：環境概況調査委託(2北南-小金井3・4・11外1路線)報告書(令和3年11月、ユーロフィン日本環境株式会社))		
	予測結果	[ ]		
カワヂシャ	確認状況	調査Ⅰ： [ ] で1箇所1株が確認された。 調査Ⅲ： [ ] で1箇所が確認された。 調査Ⅵ： [ ] で3箇所4.3m <sup>2</sup> が確認された。		
	予測結果	[ ]		

表 2.2.2-77 予測結果 (植物⑦)

種名	項目	橋梁案	掘割案	地下案
ハッカ	確認 状況	調査Ⅳ： <input type="checkbox"/> で確認された。 調査Ⅴ： <input type="checkbox"/> で確認された。 調査Ⅵ： <input type="checkbox"/> で確認された。		
	予測 結果			
タカサブロウ	確認 状況	調査Ⅳ： <input type="checkbox"/> で確認された。		
	予測 結果			



表 2.2.2-78 予測結果（生態系：環境類型区分の変化の内容及びその程度）

種名	橋梁案	掘削案	地下案
樹林地	[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]
湿性草地・水域 (流水域)			
湿性草地・水域 (止水域)	[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]
植栽樹群			
乾性草地 (人工草地)			

表 2.2.2-79 予測結果（生態系：生態系において注目される種への影響）

環境	項目	選定種	橋梁案	掘削案	地下案
水域	上位性	アオサギ			
	典型性	モツゴ			
陸域	上位性	タヌキ			
	典型性	シジュウカラ			
		ムクドリ			

表 2.2.2-80 予測結果（生態系：生物の相互関係への影響）

橋梁案	掘削案	地下案



## 資料編

### 注目される種確認位置図

橋梁案	資- 1
掘割案	資-14
地下案	資-27

※各案の計画線および改変範囲と注目される種の位置関係を示した図をそれぞれ作成した。

※()内の数字は、確認数(確認面積)を示している。なお、調査報告書に確認数の記録がないものについては「不明」としている。

※東京都及び環境省のレッドリストの更新に伴い、追加となった種に関しては、調査Ⅱ(2015年度)～調査Ⅵ(2019年度)において位置情報の記録を行っていないため、図面には記載していない。

対象外

凡例

- 計画線(橋梁案)
- 施工範囲(橋梁案)
- 動物調査範囲
- 調査Ⅰ 2021年度
- 調査Ⅶ 2022年度

※影響する高木類は健全度を確認した上で移植等を行う。

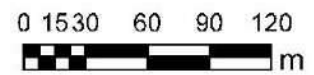


図 注目される種確認位置 (鳥類)  
(橋梁案)

対象外



凡例

- 計画線(橋梁案)
- 調査Ⅰ 2021年度
- 施工範囲(橋梁案)
- 調査Ⅶ 2022年度
- 動物調査範囲

※影響する高木類は健全度を確認した上で移植等を行う。

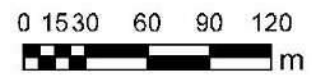
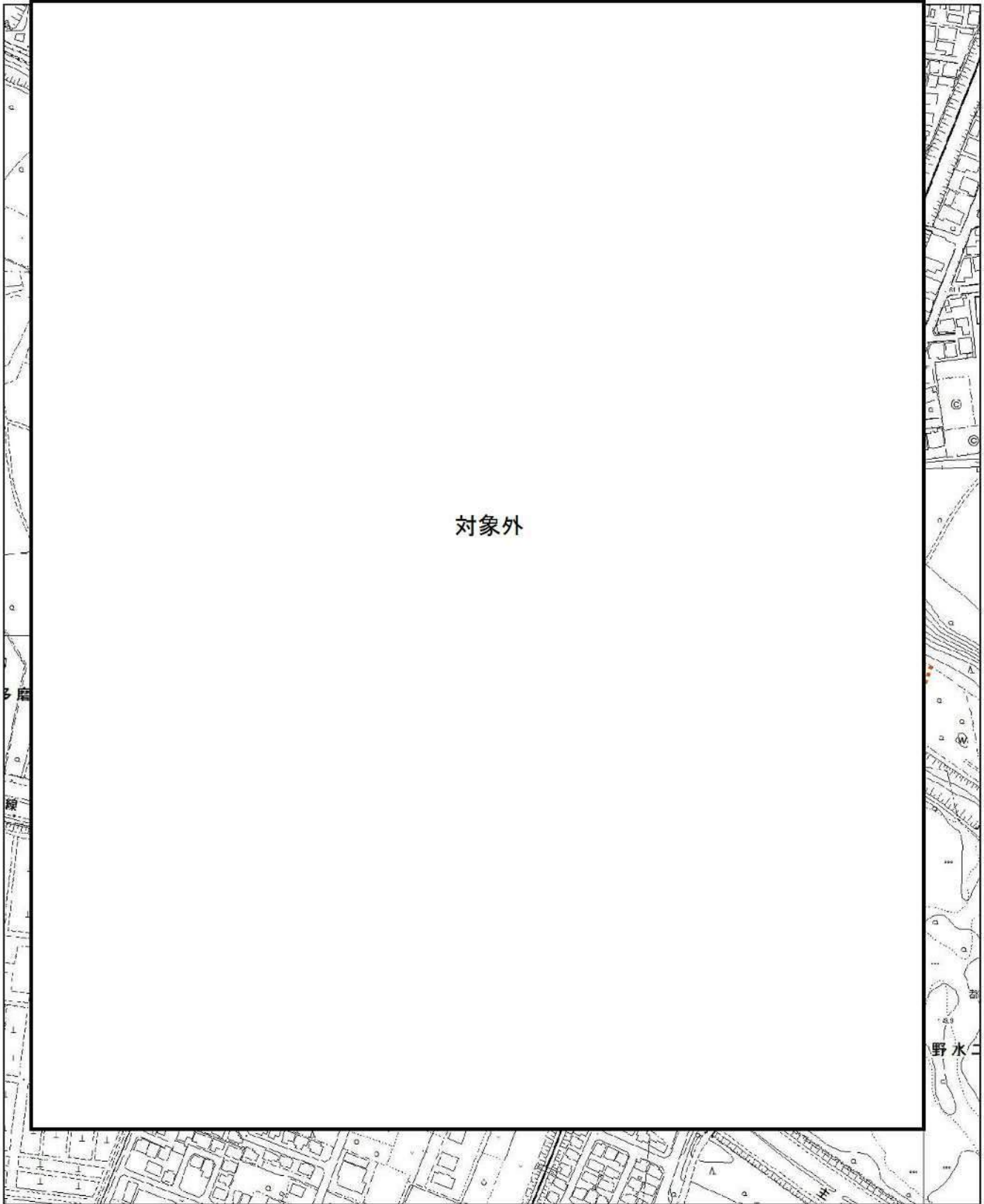


図 注目される種確認位置 (爬虫類)  
(橋梁案)





対象外

野水二

**凡例**

※影響する高木類は健全度を確認した上で移植等を行う。

- 計画線(橋梁案)
- 施工範囲(橋梁案)
- 動物調査範囲
- 調査Ⅰ 2021年度
- 調査Ⅶ 2022年度

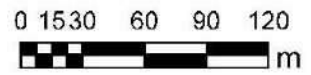


図 注目される種確認位置 (両生類)  
(橋梁案)

対象外



凡例

※影響する高木類は健全度を確認した上で移植等を行う。

- |             |              |              |
|-------------|--------------|--------------|
| —— 計画線(橋梁案) | ● 調査Ⅰ 2021年度 | ● 調査Ⅴ 2018年度 |
| ■ 施工範囲(橋梁案) | ● 調査Ⅱ 2015年度 | ● 調査Ⅵ 2019年度 |
| □ 動物調査範囲    | ● 調査Ⅲ 2016年度 | ● 調査Ⅶ 2022年度 |
|             | ● 調査Ⅳ 2017年度 |              |

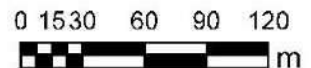
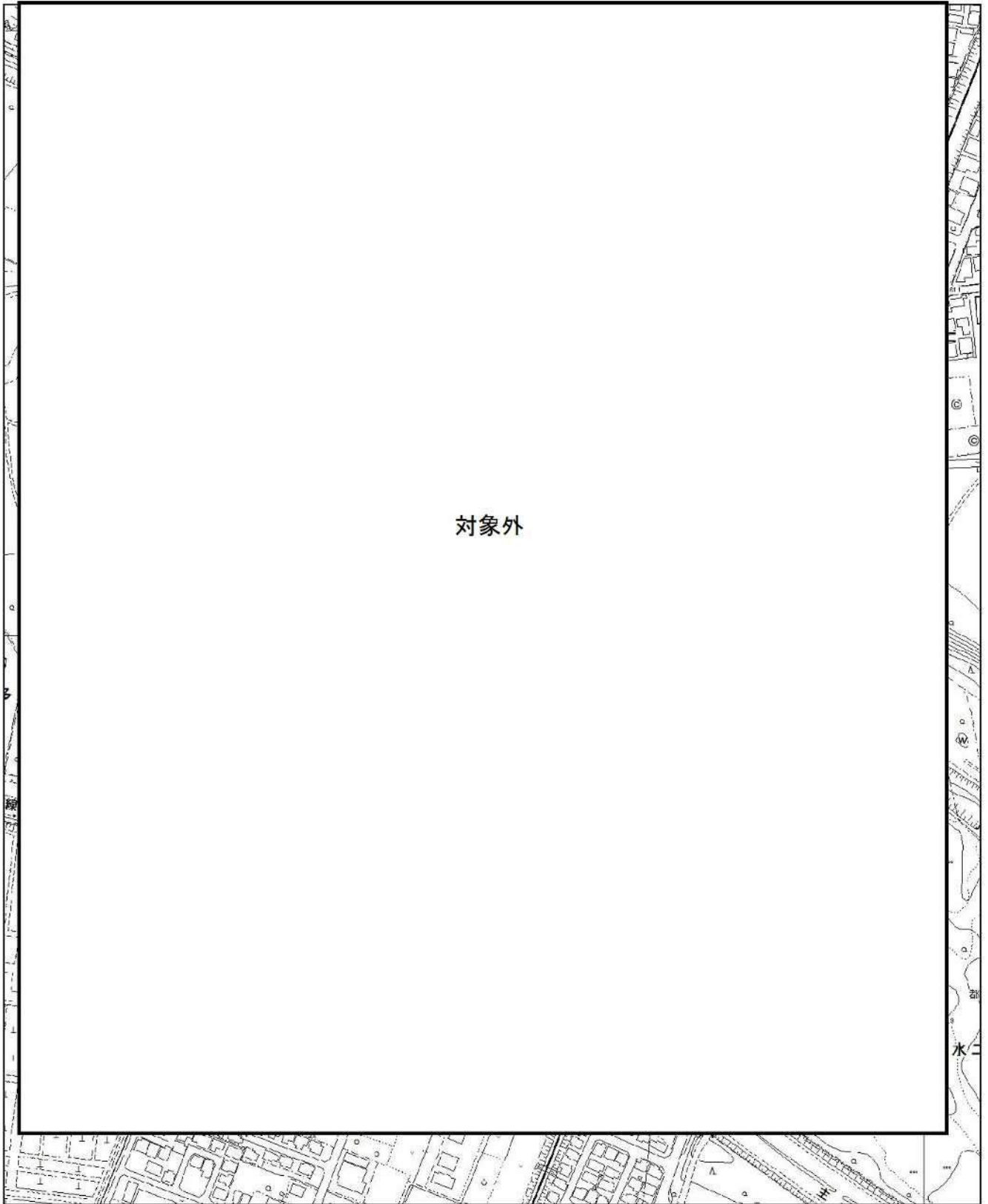


図 注目される種確認位置 (昆虫類)  
(橋梁案)



対象外

水二

**凡例**

※影響する高木類は健全度を確認した上で移植等を行う。

- 計画線(橋梁案)
- 調査Ⅶ 2022年度
- 施工範囲(橋梁案)
- 動物調査範囲

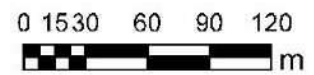
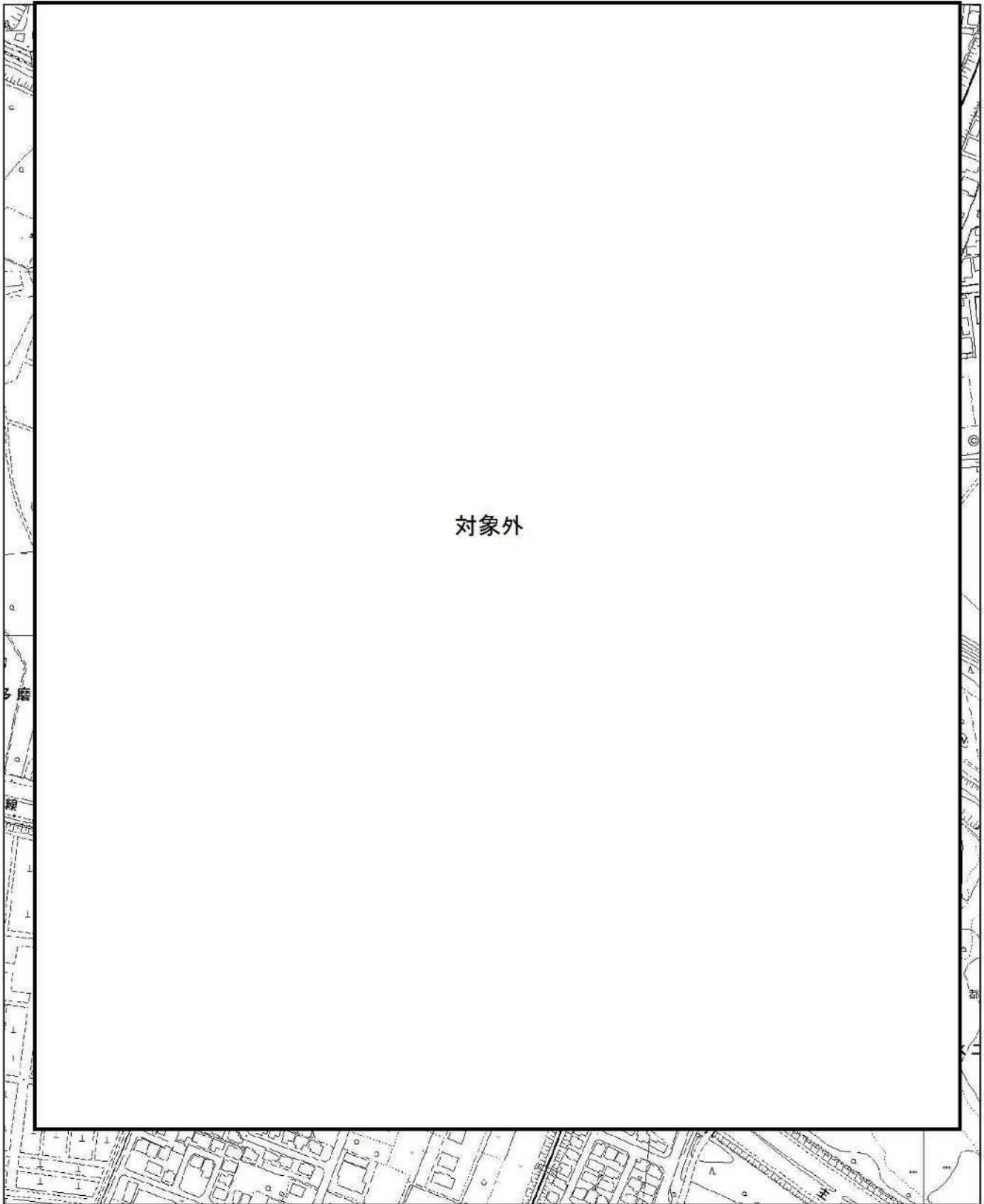


図 注目される種確認位置 (クモ類)  
(橋梁案)





※影響する高木類は健全度を確認した上で移植等を行う。

**凡例**

- 計画線(橋梁案)      ● 調査Ⅶ 2022年度
- 施工範囲(橋梁案)
- 動物調査範囲

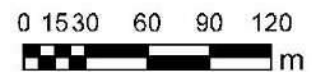
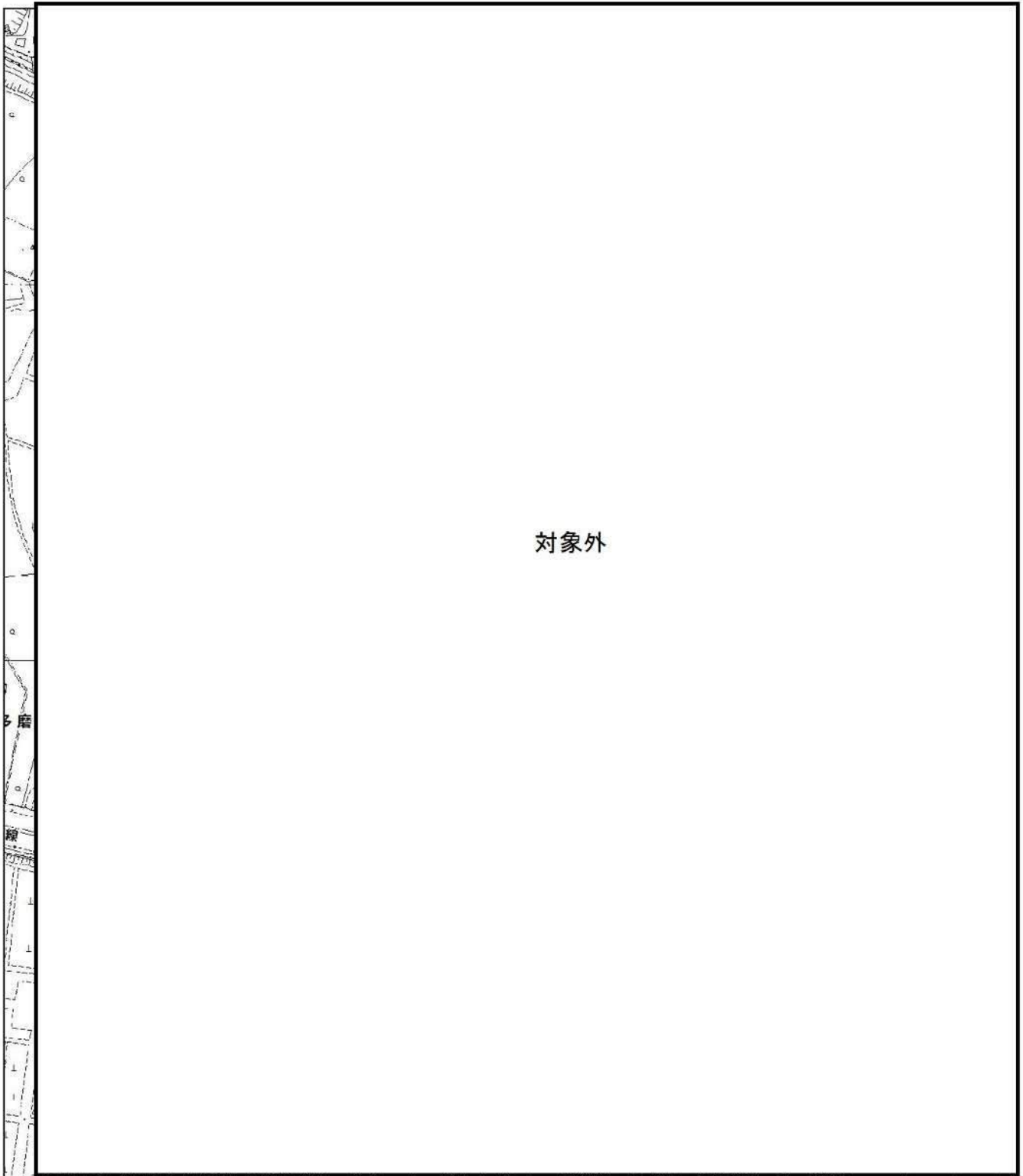


図 注目される種確認位置 (陸産貝類)  
(橋梁案)



対象外

凡例

※影響する高木類は健全度を確認した上で移植等を行う。

- 計画線(橋梁案)
- 施工範囲(橋梁案)
- 動物調査範囲
- 調査 I 2021年度
- 調査 II 2015年度
- 調査 III 2016年度
- 調査 IV 2017年度
- 調査 V 2018年度
- 調査 VI 2019年度



図 注目される種確認位置 (魚類)  
(橋梁案)

対象外

凡例

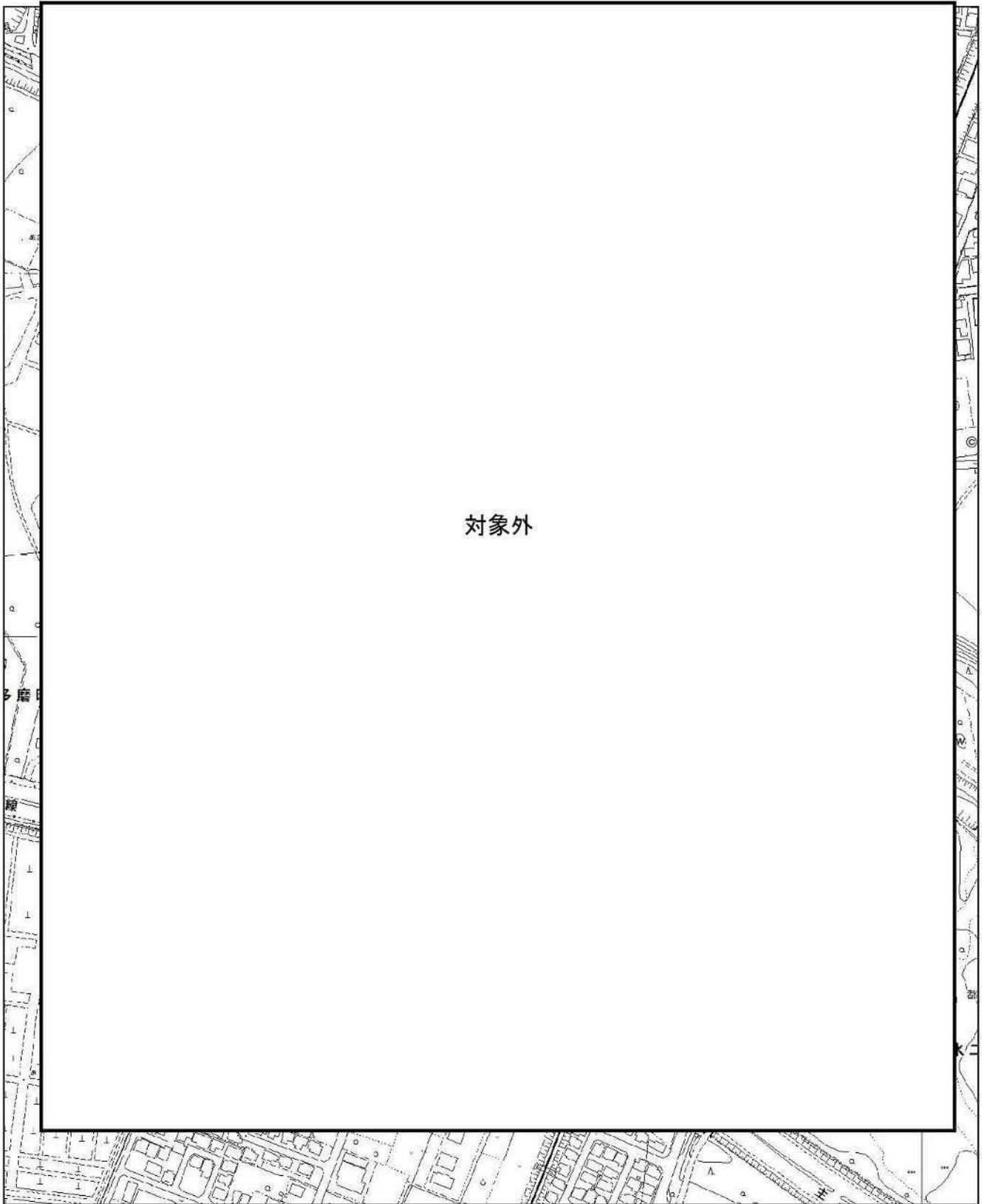
- 計画線(橋梁案)
- 施工範囲(橋梁案)
- 動物調査範囲
- 調査 I 2021年度
- 調査 II 2015年度
- 調査 III 2016年度
- 調査 IV 2017年度
- 調査 V 2018年度
- 調査 VI 2019年度

※影響する高木類は健全度を確認した上で移植等を行う。



図 注目される種確認位置  
(シマドジョウ種群) (橋梁案)





対象外

凡例

- 計画線(橋梁案)
  - 施工範囲(橋梁案)
  - 動物調査範囲
- |   |  |            |
|---|--|------------|
| ● |  | 調査Ⅰ 2021年度 |
| ● |  | 調査Ⅱ 2015年度 |
| ● |  | 調査Ⅲ 2016年度 |
| ● |  | 調査Ⅳ 2017年度 |
| ● |  | 調査Ⅴ 2018年度 |
| ● |  | 調査Ⅵ 2019年度 |

※影響する高木類は健全度を確認した上で移植等を行う。

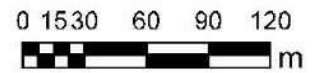


図 注目される種確認位置 (メダカ類)  
(橋梁案)

対象外

凡例

- 計画線(橋梁案)
- 施工範囲(橋梁案)
- 動物調査範囲
- 調査 I 2021年度
- 調査 II 2015年度
- 調査 III 2016年度
- 調査 IV 2017年度
- 調査 V 2018年度
- 調査 VI 2019年度

※影響する高木類は健全度を確認した上で移植等を行う。

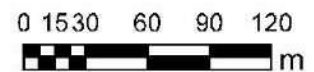
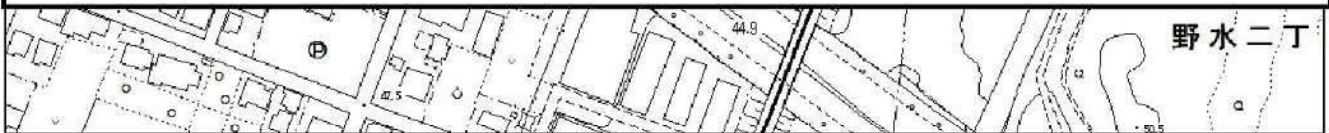


図 注目される種確認位置 (底生動物)  
(橋梁案)

対象外



※影響する高木類は健全度を確認した上で移植等を行う。

### 凡例

- |             |                 |                 |
|-------------|-----------------|-----------------|
| —— 計画線(橋梁案) | ● 調査 I 2021年度   | ● 調査 VI 2019年度  |
| ■ 施工範囲(橋梁案) | ■ 調査 I 2021年度   | ● 調査 VII 2022年度 |
| □ 植物調査範囲    | ● 調査 II 2015年度  | ■ 調査 VII 2022年度 |
|             | ● 調査 III 2016年度 |                 |
|             | ● 調査 IV 2017年度  |                 |
|             | ● 調査 V 2018年度   |                 |

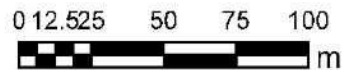
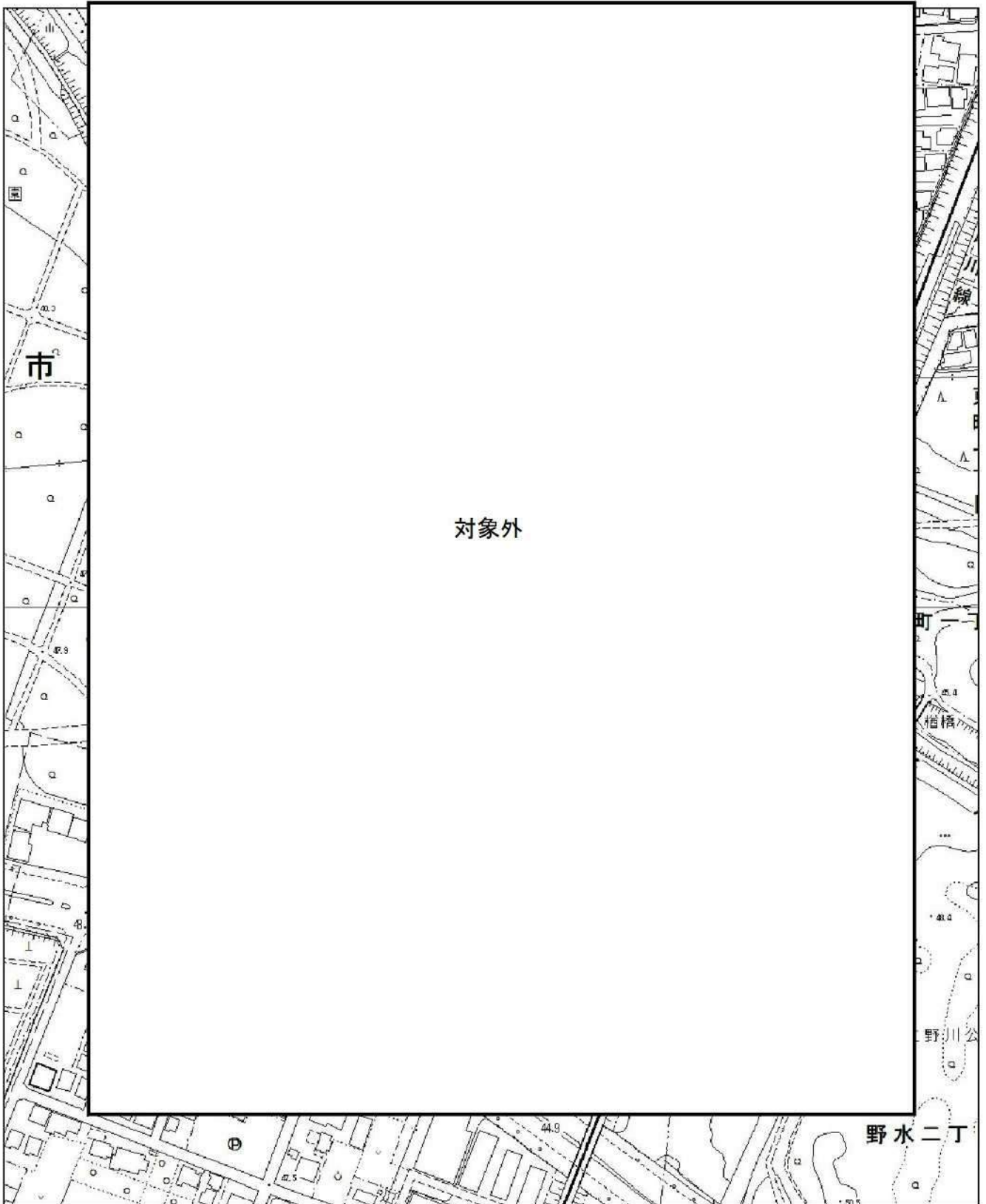


図 注目される種確認位置 (植物)  
(橋梁案)





対象外

野水二丁

凡例

※影響する高木類は健全度を確認した上で移植等を行う。

- |             |                 |                 |
|-------------|-----------------|-----------------|
| —— 計画線(橋梁案) | ● 調査 I 2021年度   | ● 調査 VI 2019年度  |
| ■ 施工範囲(橋梁案) | ■ 調査 I 2021年度   | ● 調査 VII 2022年度 |
| □ 植物調査範囲    | ● 調査 II 2015年度  | ■ 調査 VII 2022年度 |
|             | ● 調査 III 2016年度 |                 |
|             | ● 調査 IV 2017年度  |                 |
|             | ● 調査 V 2018年度   |                 |

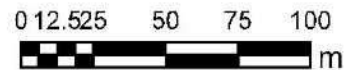
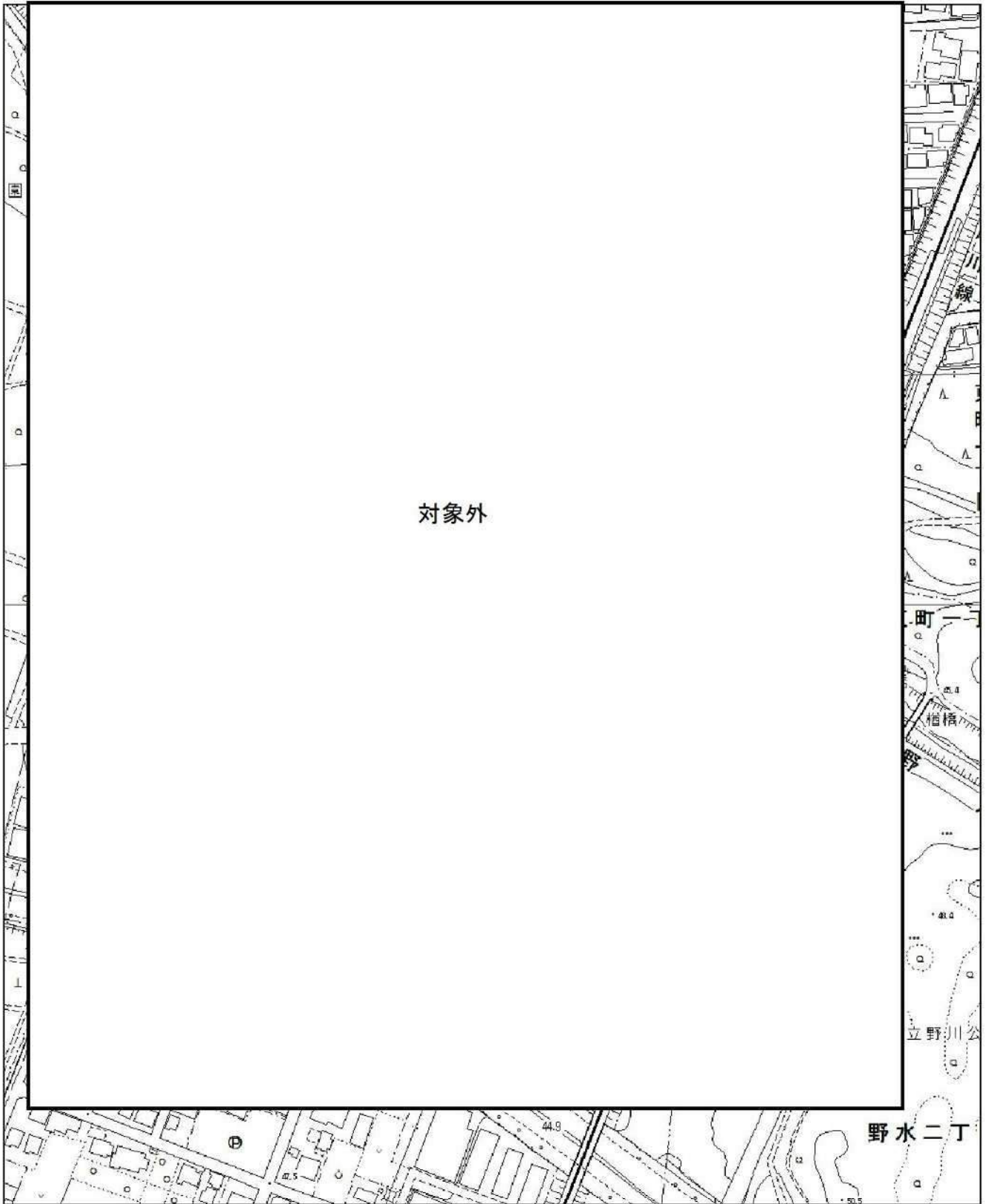


図 注目される種確認位置 (ミクリ) (橋梁案)



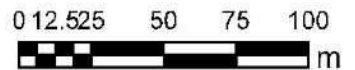
対象外

野水二丁

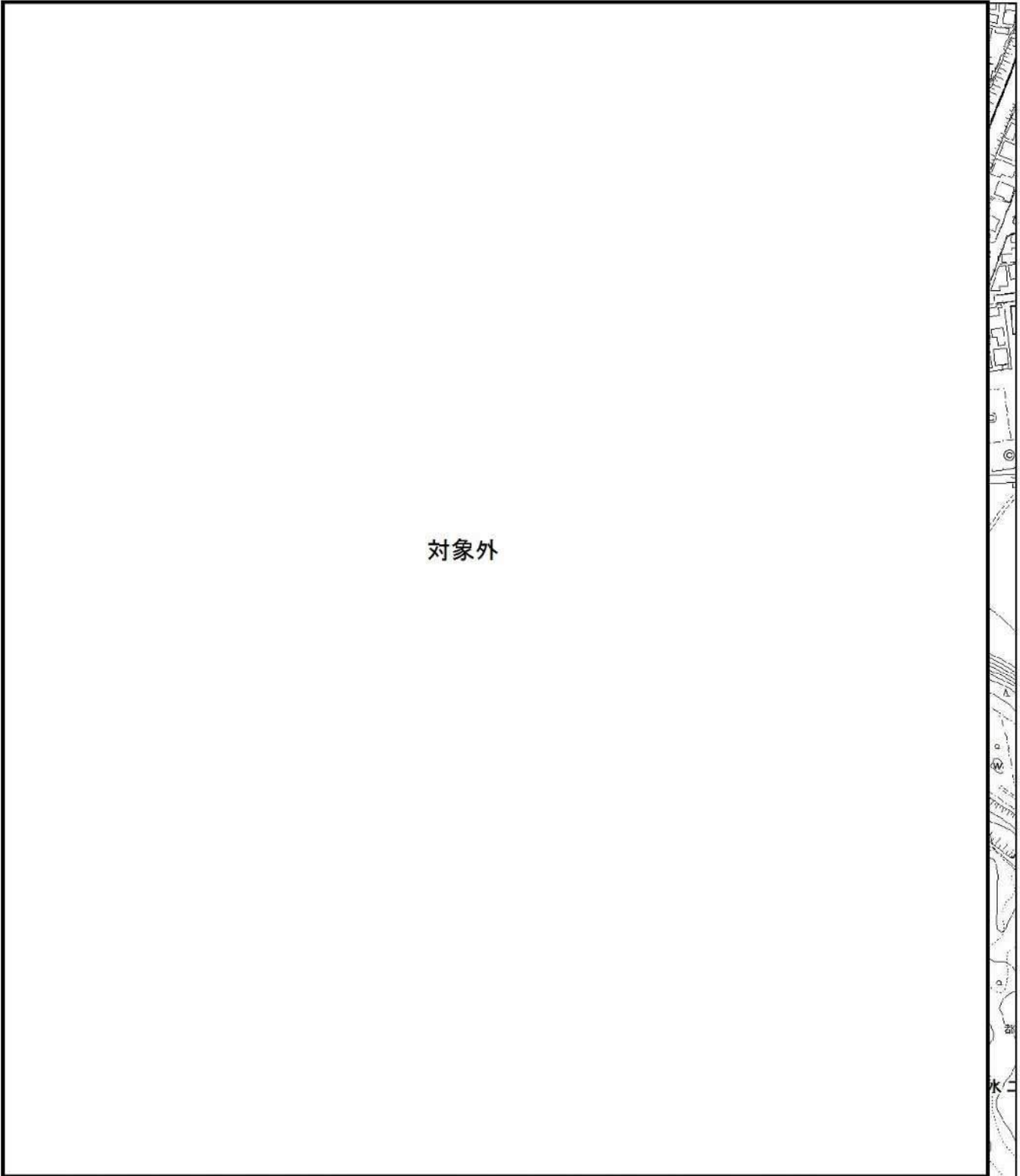
凡例

※影響する高木類は健全度を確認した上で移植等を行う。

- |             |                 |                 |
|-------------|-----------------|-----------------|
| —— 計画線(橋梁案) | ● 調査 I 2021年度   | ● 調査 VI 2019年度  |
| ■ 施工範囲(橋梁案) | ■ 調査 I 2021年度   | ● 調査 VII 2022年度 |
| □ 植物調査範囲    | ● 調査 II 2015年度  | ■ 調査 VII 2022年度 |
|             | ● 調査 III 2016年度 |                 |
|             | ● 調査 IV 2017年度  |                 |
|             | ● 調査 V 2018年度   |                 |



Ⓜ 注目される種確認位置  
(ウキヤガラ) (橋梁案)



対象外



凡例

- 計画線(掘割案)      ● 調査Ⅰ 2021年度
- 施工範囲(掘割案)      ● 調査Ⅶ 2022年度
- 動物調査範囲

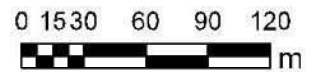


図 注目される種確認位置 (鳥類)  
(掘割案)

対象外

凡例

- 計画線(掘割案)
- 施工範囲(掘割案)
- 動物調査範囲
- 調査Ⅰ 2021年度
- 調査Ⅶ 2022年度

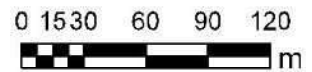
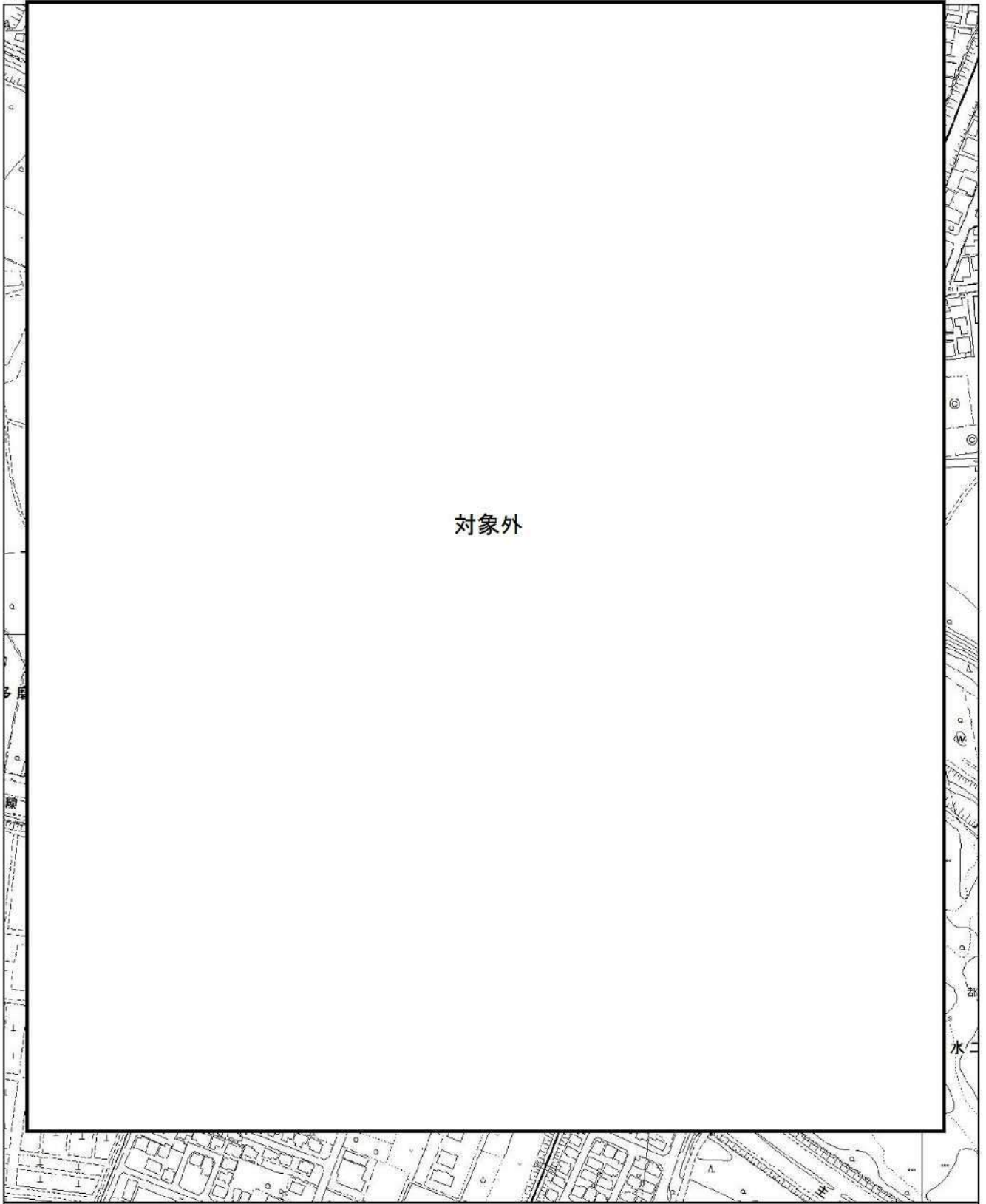


図 注目される種確認位置 (爬虫類)  
(掘割案)





対象外

凡例

- 計画線(掘割案)      ● 調査Ⅰ 2021年度
- 施工範囲(掘割案)      ● 調査Ⅶ 2022年度
- 動物調査範囲

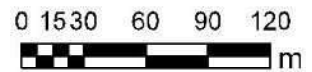



図 注目される種確認位置 (両生類)  
(掘割案)


対象外



凡例

—— 計画線(掘割案)

 施工範囲(掘割案)

 動物調査範囲

● 調査Ⅰ 2021年度

● 調査Ⅱ 2015年度

● 調査Ⅲ 2016年度

● 調査Ⅳ 2017年度

● 調査Ⅴ 2018年度

● 調査Ⅵ 2019年度

● 調査Ⅶ 2022年度




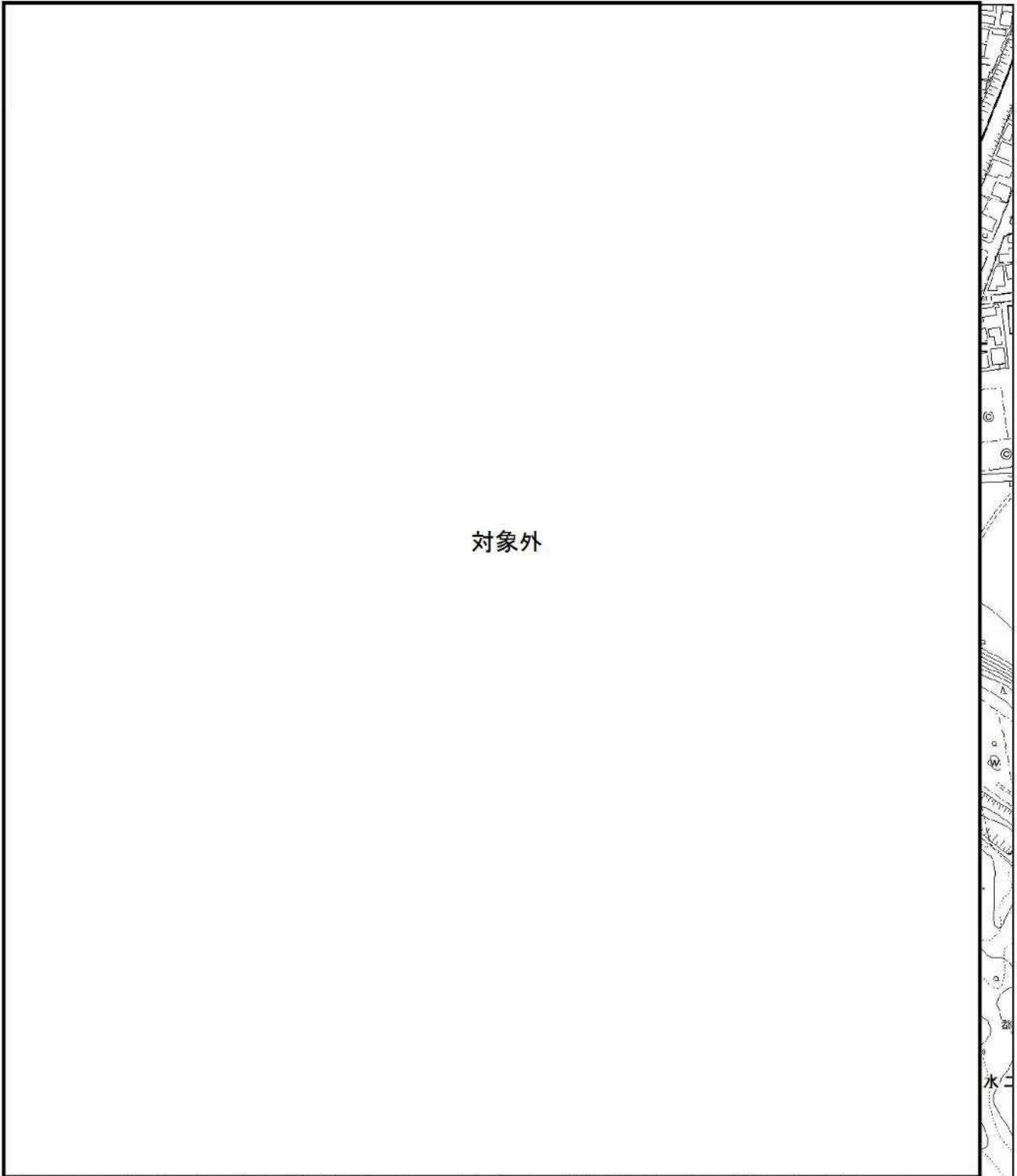
0 15 30 60 90 120  
 m

図 注目される種確認位置 (昆虫類)  
(掘割案)



対象外

**凡例**

- 計画線(掘割案)
- 調査Ⅶ 2022年度
- 施工範囲(掘割案)
- 動物調査範囲

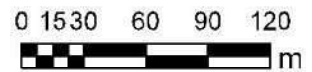
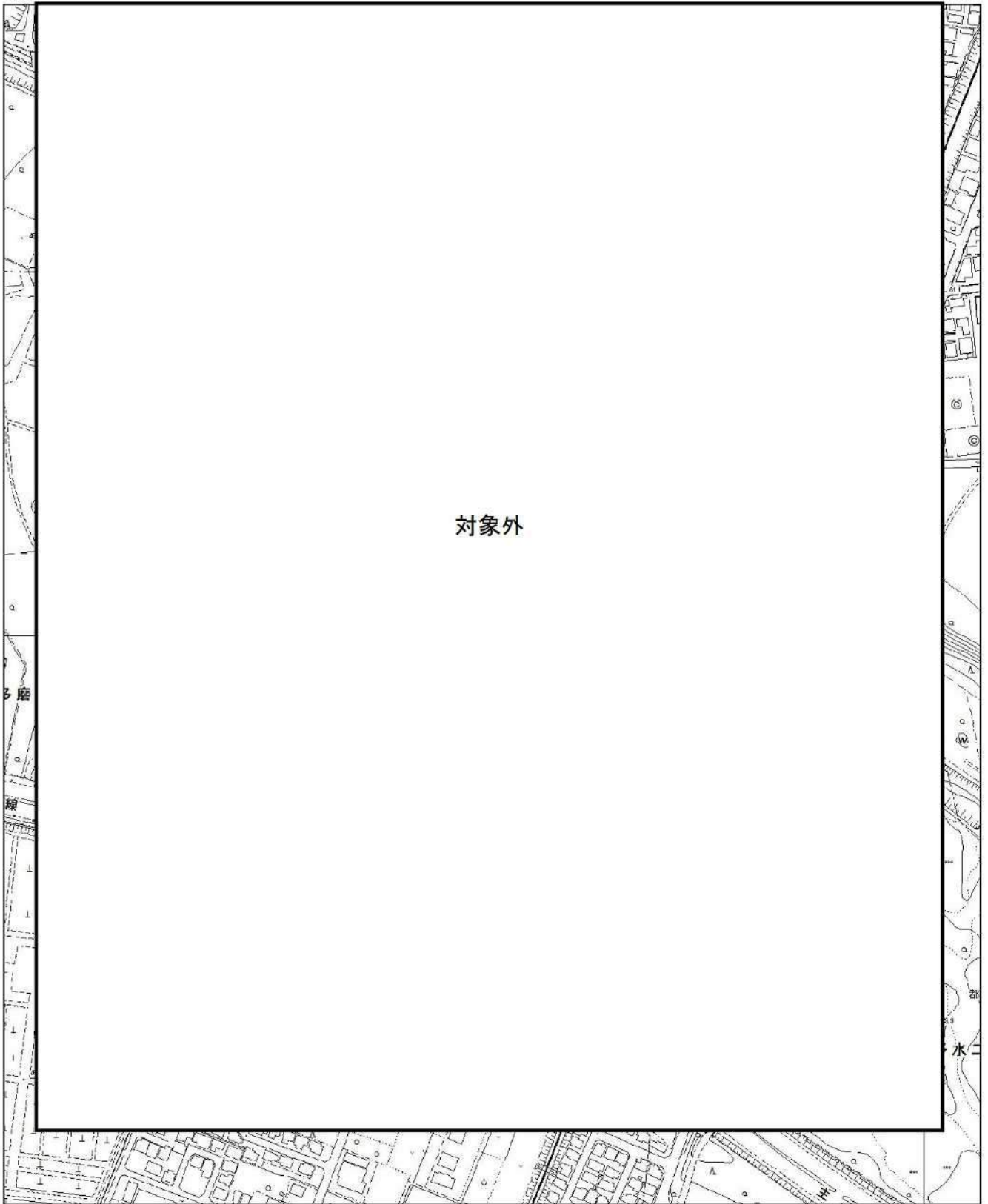


図 注目される種確認位置 (クモ類)  
(掘割案)



対象外

**凡例**

- 計画線(掘割案)
- 調査Ⅶ 2022年度
- 施工範囲(掘割案)
- 動物調査範囲

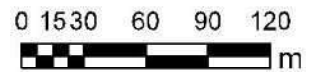


図 注目される種確認位置 (陸産貝類)  
(掘割案)



対象外

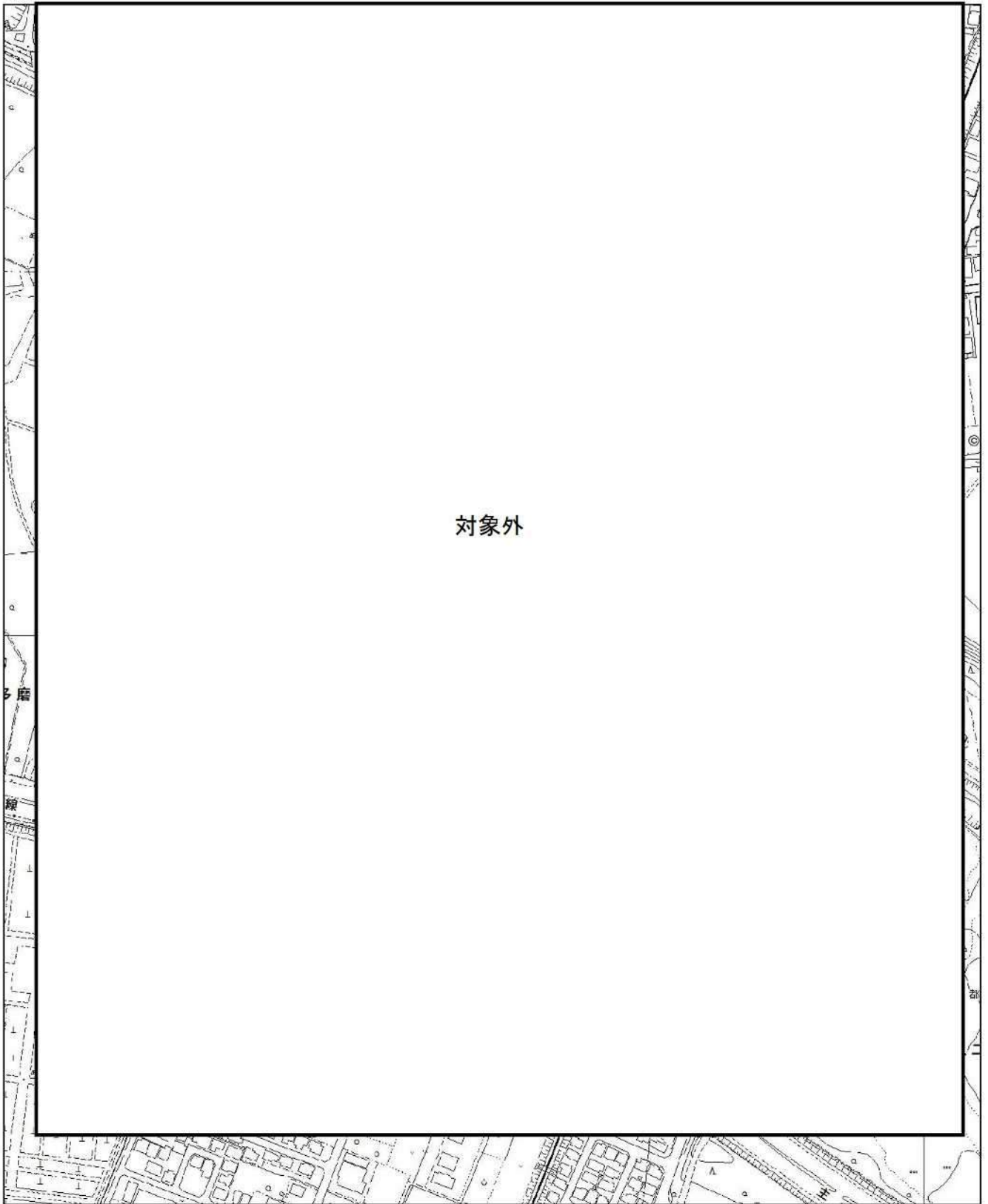
凡例

- |             |   |   |            |
|-------------|---|---|------------|
| —— 計画線(掘割案) | ● | ■ | 調査Ⅰ 2021年度 |
| ■ 施工範囲(掘割案) | ● | ■ | 調査Ⅱ 2015年度 |
| ■ 動物調査範囲    | ● | ■ | 調査Ⅲ 2016年度 |
|             | ● | ■ | 調査Ⅳ 2017年度 |
|             | ● | ■ | 調査Ⅴ 2018年度 |
|             | ● | ■ | 調査Ⅵ 2019年度 |



0 15 30 60 90 120  
m

図 注目される種確認位置(魚類)  
(掘割案)



対象外

凡例

- |             |   |   |            |
|-------------|---|---|------------|
| —— 計画線(掘割案) | ● | ■ | 調査Ⅰ 2021年度 |
| ■ 施工範囲(掘割案) | ● | ■ | 調査Ⅱ 2015年度 |
| ■ 動物調査範囲    | ● | ■ | 調査Ⅲ 2016年度 |
|             | ● | ■ | 調査Ⅳ 2017年度 |
|             | ● | ■ | 調査Ⅴ 2018年度 |
|             | ● | ■ | 調査Ⅵ 2019年度 |

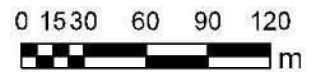
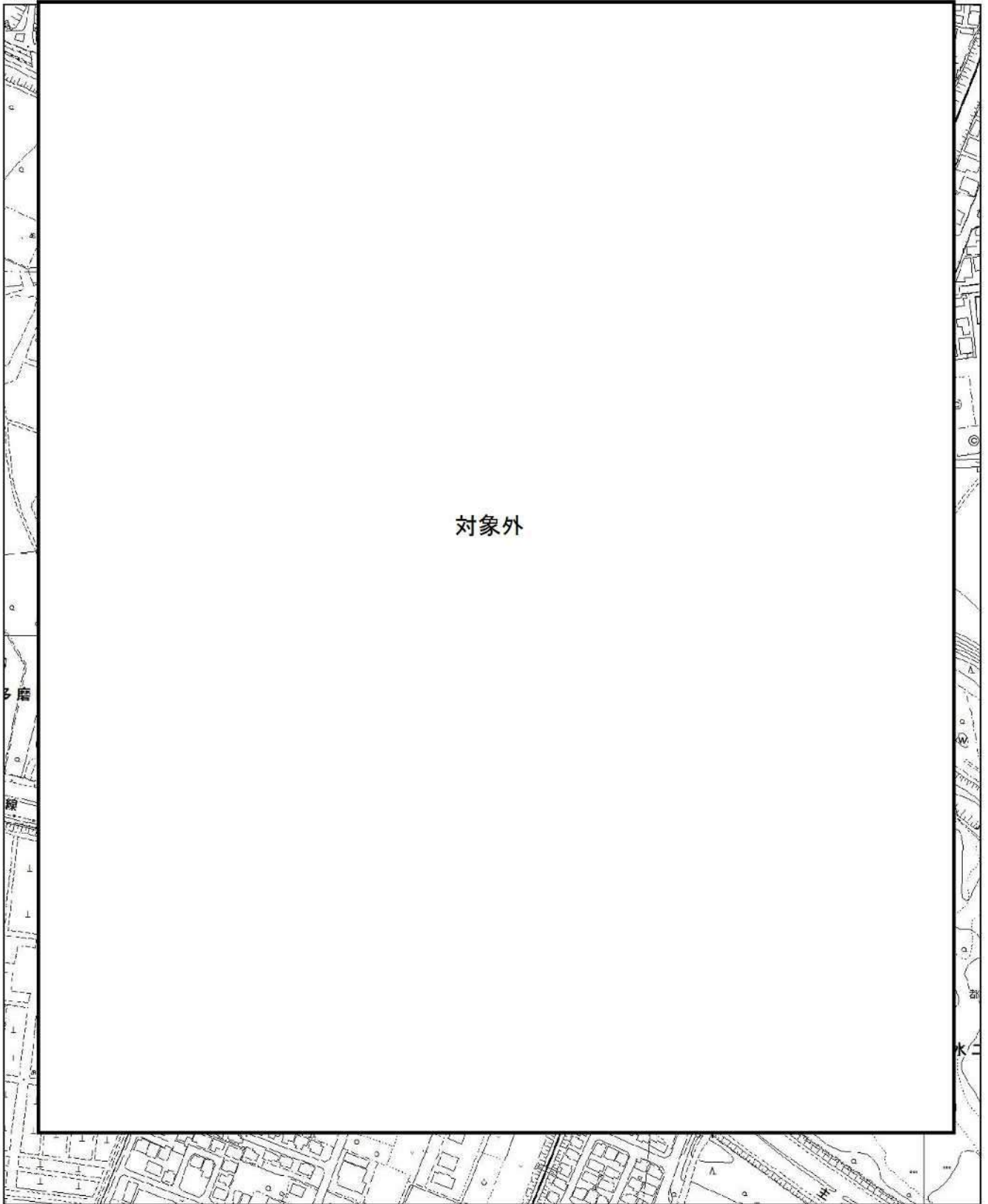


図 注目される種確認位置  
(シマドジョウ種群) (掘割案)



対象外

凡例

- |             |   |               |
|-------------|---|---------------|
| —— 計画線(掘割案) | ● | 調査 I 2021年度   |
| ■ 施工範囲(掘割案) | ● | 調査 II 2015年度  |
| □ 動物調査範囲    | ● | 調査 III 2016年度 |
|             | ● | 調査 IV 2017年度  |
|             | ● | 調査 V 2018年度   |
|             | ● | 調査 VI 2019年度  |

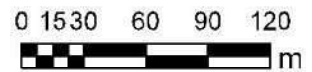
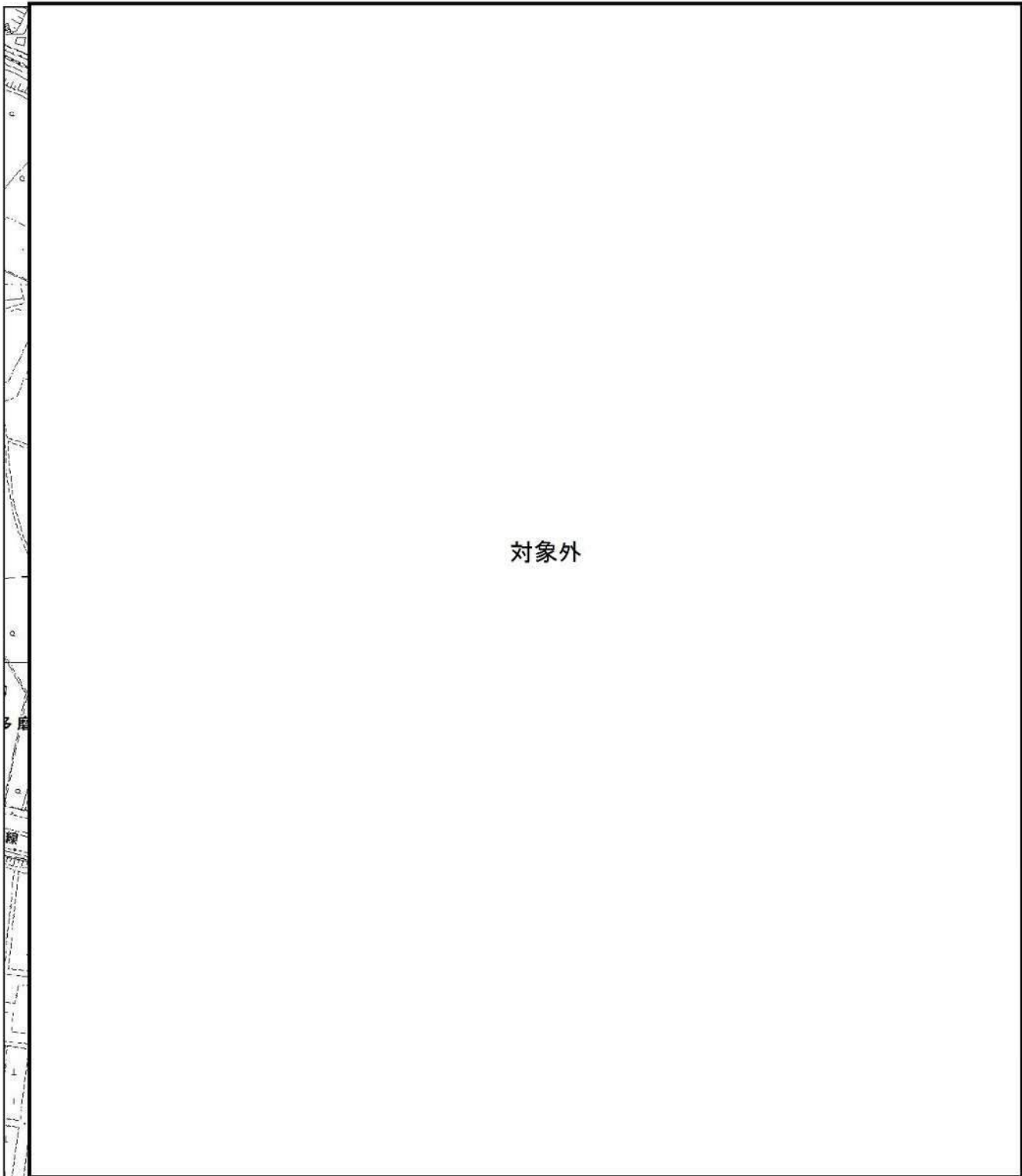


図 注目される種確認位置 (メダカ類) (掘割案)



対象外



凡例

- 計画線(掘割案)
  - 施工範囲(掘割案)
  - 動物調査範囲
- |   |  |            |
|---|--|------------|
| ● |  | 調査Ⅰ 2021年度 |
| ● |  | 調査Ⅱ 2015年度 |
| ● |  | 調査Ⅲ 2016年度 |
| ● |  | 調査Ⅳ 2017年度 |
| ● |  | 調査Ⅴ 2018年度 |
| ● |  | 調査Ⅵ 2019年度 |

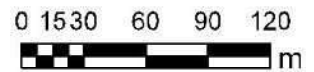


図 注目される種確認位置 (底生動物) (掘割案)



対象外



### 凡例

- |             |              |              |
|-------------|--------------|--------------|
| —— 計画線(掘割案) | ● 調査Ⅰ 2021年度 | ● 調査Ⅵ 2019年度 |
| ■ 施工範囲(掘割案) | ■ 調査Ⅰ 2021年度 | ● 調査Ⅶ 2022年度 |
| □ 植物調査範囲    | ● 調査Ⅱ 2015年度 | ■ 調査Ⅶ 2022年度 |
|             | ● 調査Ⅲ 2016年度 |              |
|             | ● 調査Ⅳ 2017年度 |              |
|             | ● 調査Ⅴ 2018年度 |              |

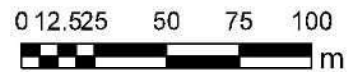
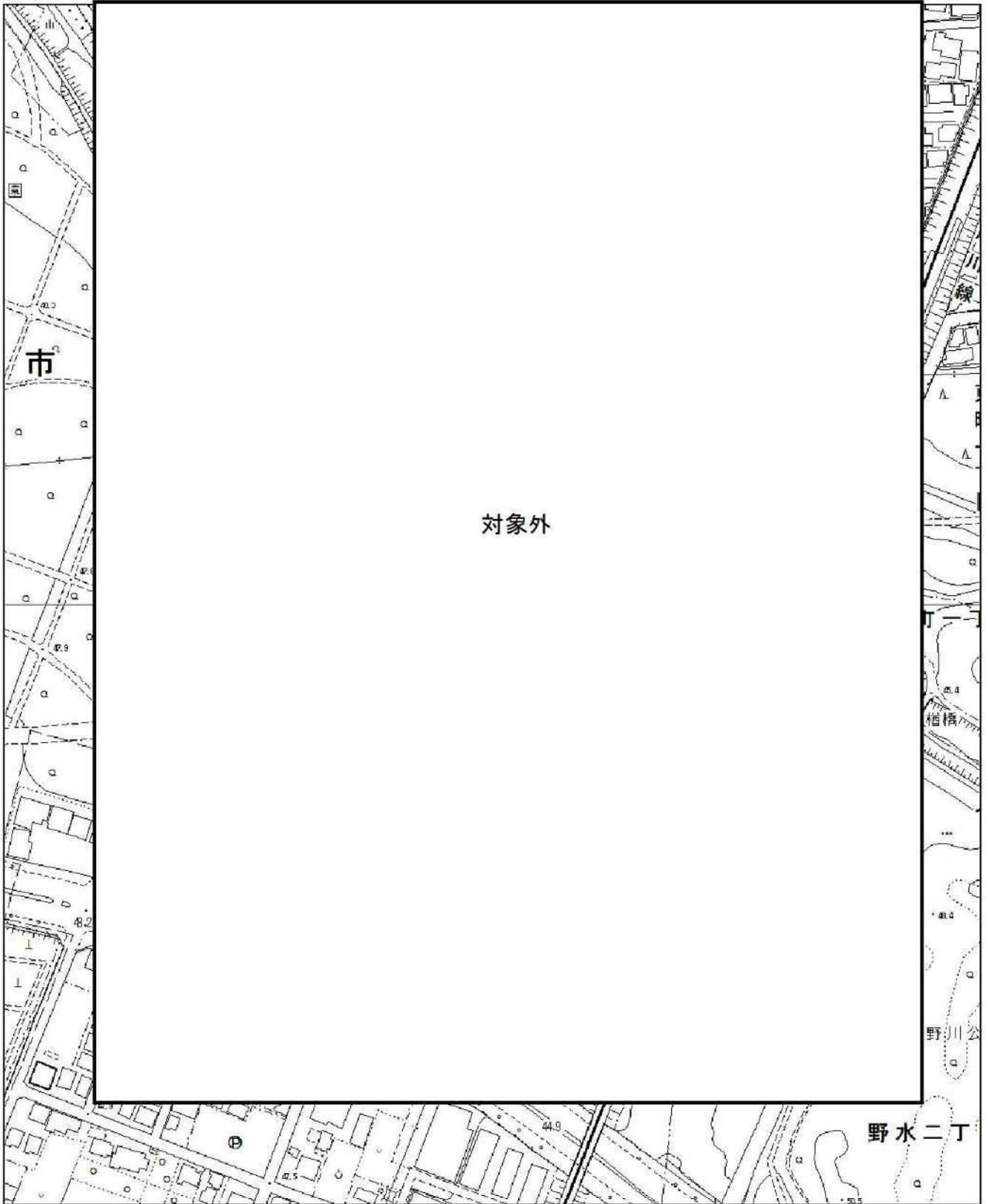


図 注目される種確認位置(植物)  
(掘割案)



対象外

市

橋

野川公

野水二丁

凡例

- 計画線(掘割案)
- 施工範囲(掘割案)
- 植物調査範囲
- 調査 I 2021年度
- 調査 II 2015年度
- 調査 III 2016年度
- 調査 IV 2017年度
- 調査 V 2018年度
- 調査 VI 2019年度
- 調査 VII 2022年度
- 調査 VII 2022年度

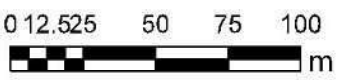
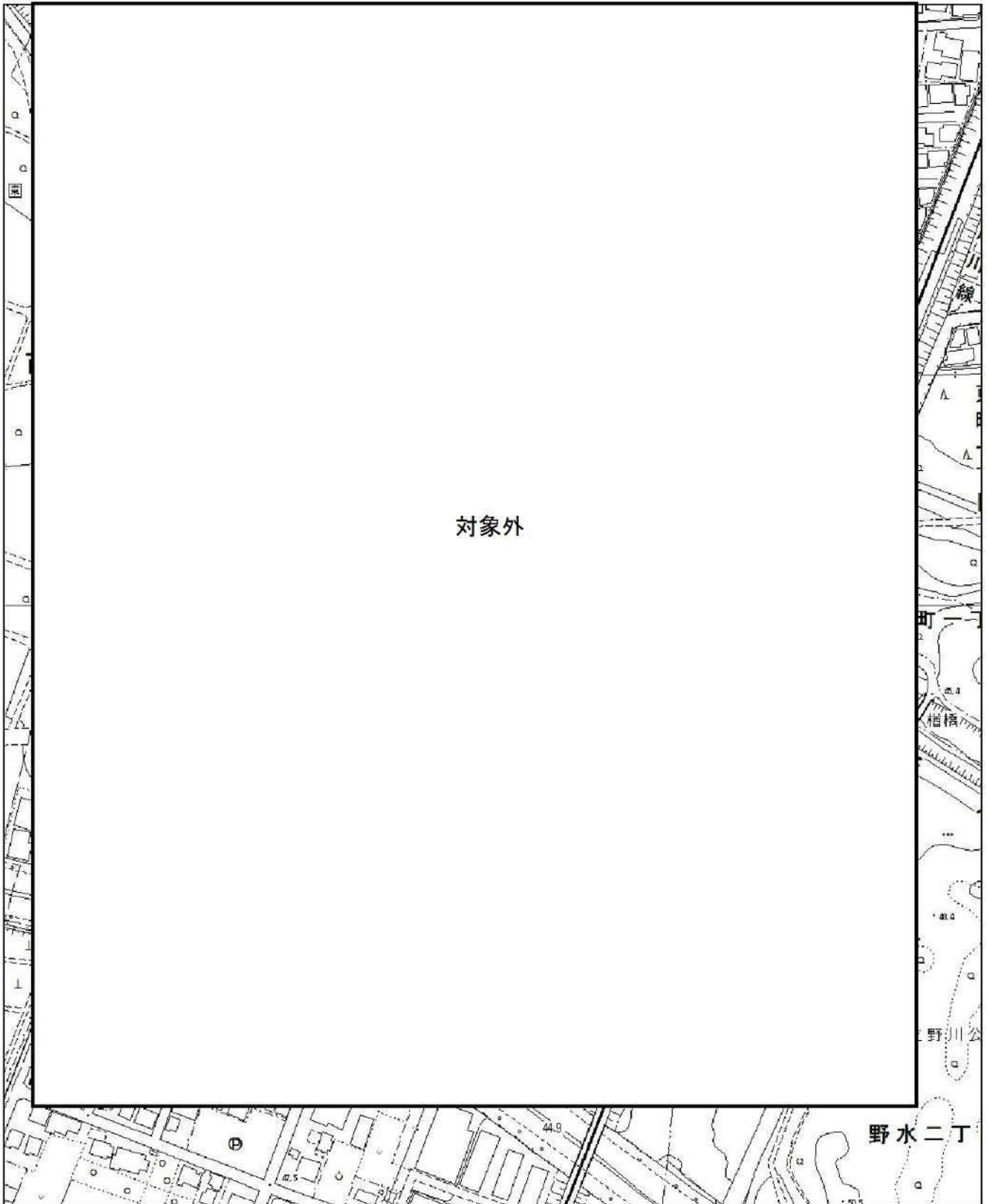


図 注目される種確認位置 (ミクリ) (掘割案)



**凡例**

- |             |                 |                 |
|-------------|-----------------|-----------------|
| —— 計画線(掘割案) | ● 調査 I 2021年度   | ● 調査 VI 2019年度  |
| ■ 施工範囲(掘割案) | ■ 調査 I 2021年度   | ● 調査 VII 2022年度 |
| □ 植物調査範囲    | ● 調査 II 2015年度  | ■ 調査 VII 2022年度 |
|             | ● 調査 III 2016年度 |                 |
|             | ● 調査 IV 2017年度  |                 |
|             | ● 調査 V 2018年度   |                 |

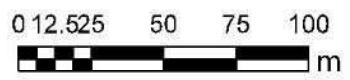
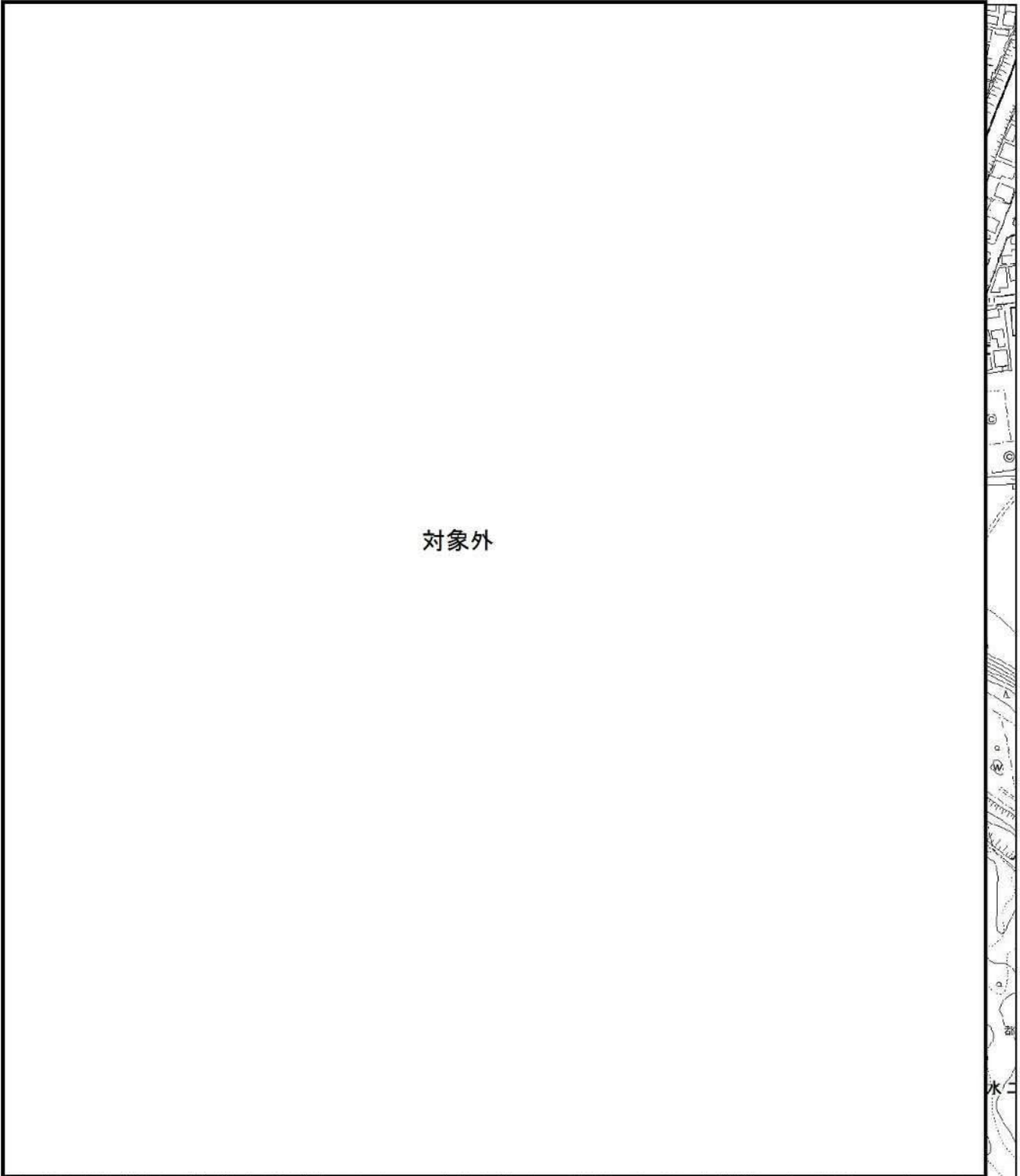


図 注目される種確認位置 (ウキヤガラ) (掘割案)



対象外



凡例

- 計画線(地下案)
- 施工範囲(地下案)
- 動物調査範囲
- 調査Ⅰ 2021年度
- 調査Ⅶ 2022年度

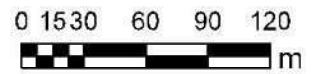


図 注目される種確認位置 (鳥類)  
(地下案)



対象外

凡例

- 計画線(地下案)
- 施工範囲(地下案)
- 動物調査範囲
- 調査Ⅰ 2021年度
- 調査Ⅶ 2022年度

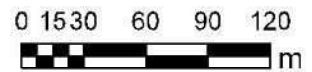
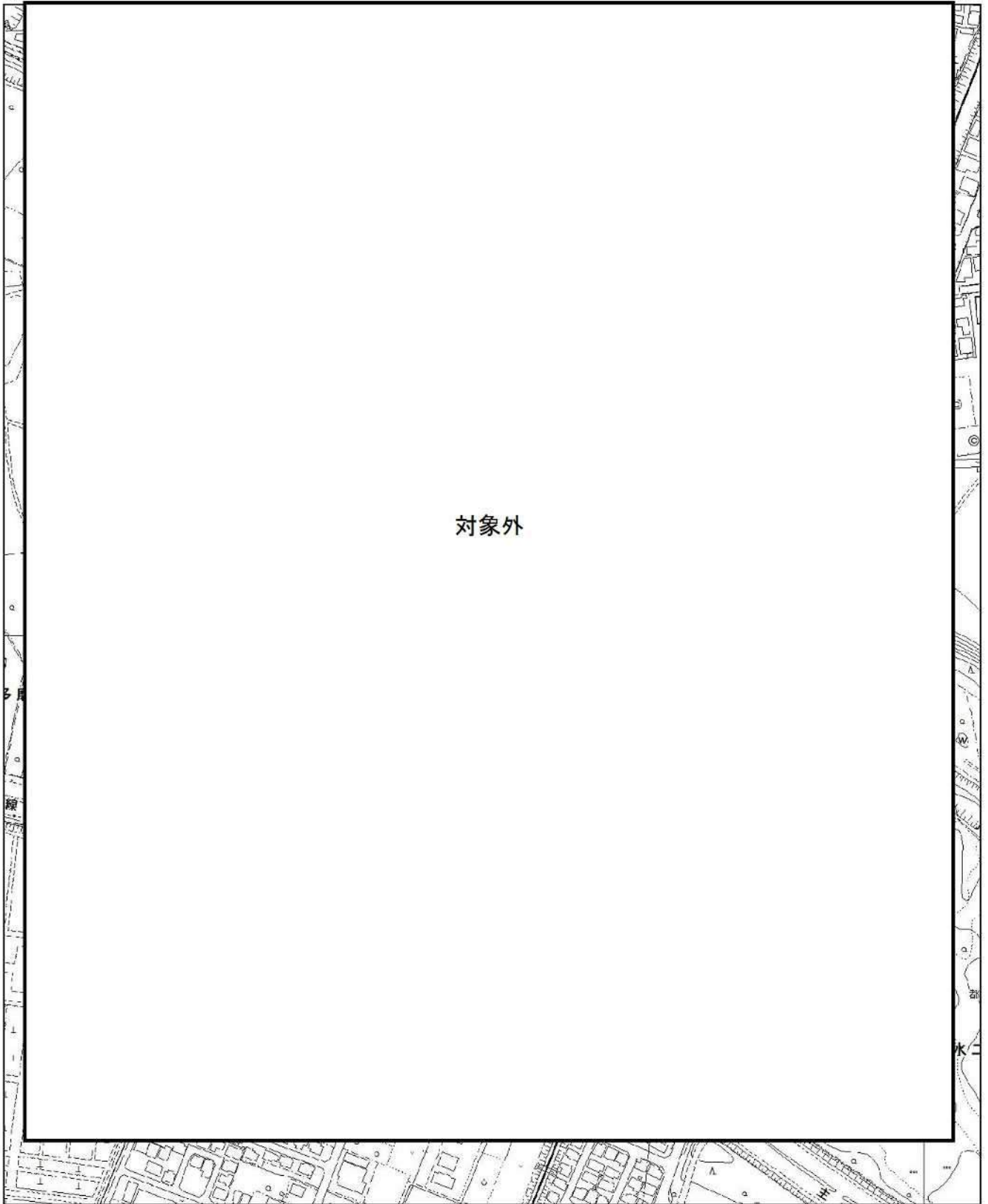


図 注目される種確認位置 (爬虫類)  
(地下案)



対象外

凡例

- 計画線(地下案)      ● 調査Ⅰ 2021年度
- 施工範囲(地下案)      ● 調査Ⅶ 2022年度
- 動物調査範囲

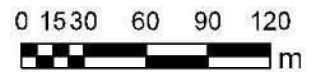



図 注目される種確認位置 (両生類)  
(地下案)


対象外



凡例

—— 計画線(地下案)

 施工範囲(地下案)

 動物調査範囲

● 調査Ⅰ 2021年度

● 調査Ⅱ 2015年度

● 調査Ⅲ 2016年度

● 調査Ⅳ 2017年度

● 調査Ⅴ 2018年度

● 調査Ⅵ 2019年度

● 調査Ⅶ 2022年度




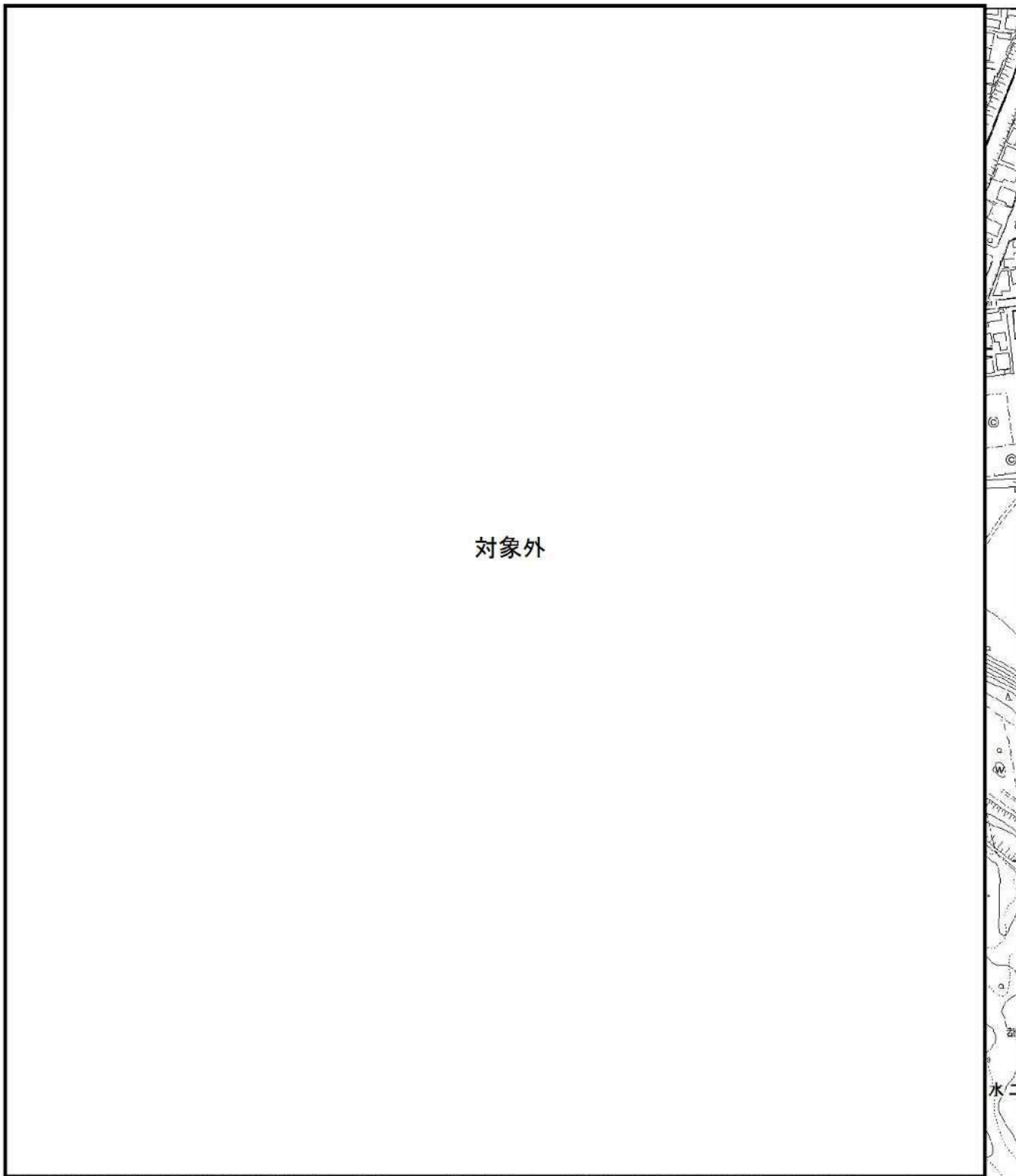
0 15 30 60 90 120  
 m

図 注目される種確認位置 (昆虫類)  
(地下案)



対象外

**凡例**

- 計画線(地下案)      ● 調査Ⅶ 2022年度
- 施工範囲(地下案)
- 動物調査範囲

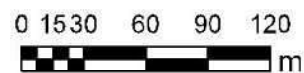
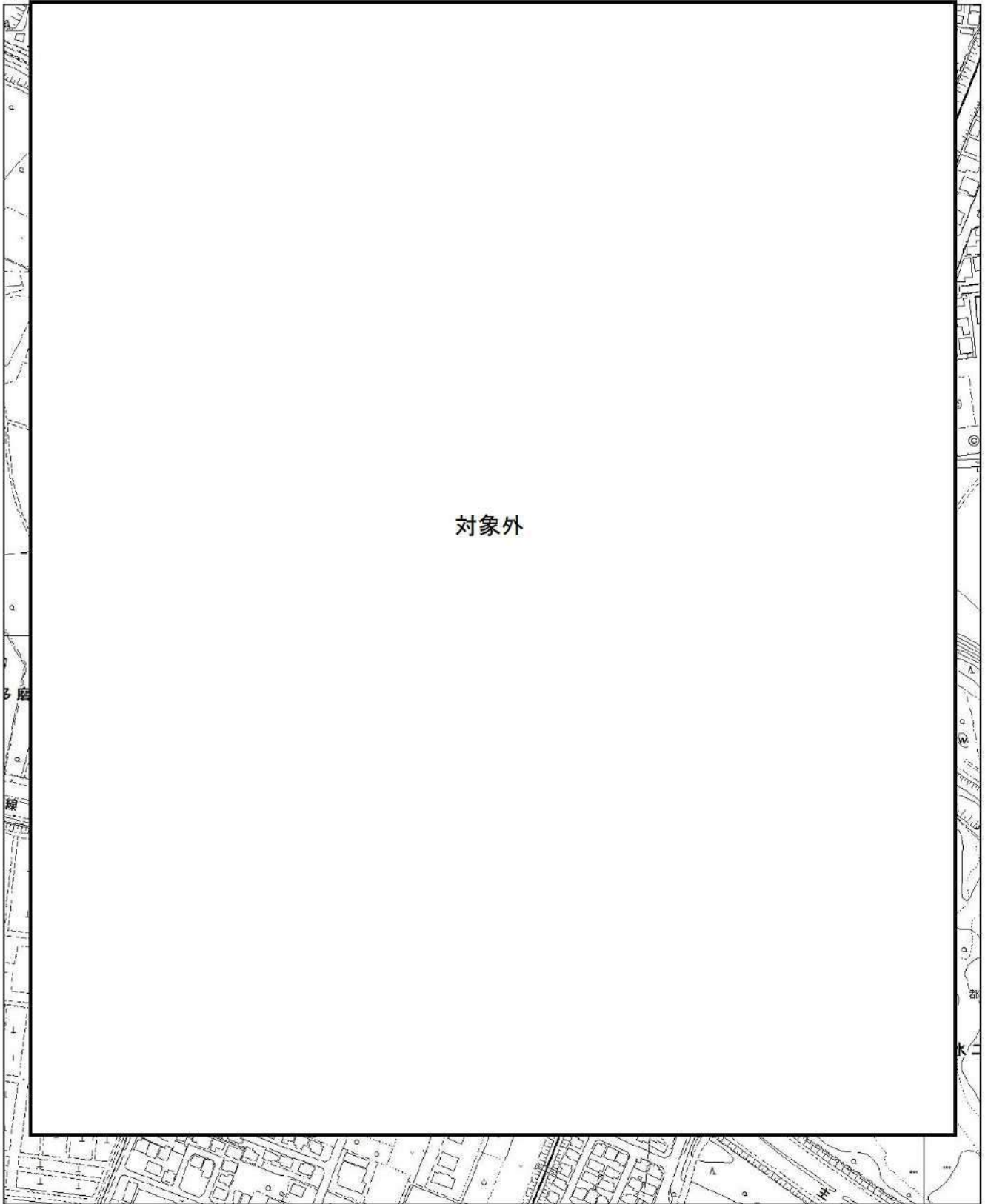


図 注目される種確認位置 (クモ類)  
(地下案)





対象外

**凡例**

- 計画線(地下案)      ● 調査Ⅶ 2022年度
- 施工範囲(地下案)
- 動物調査範囲

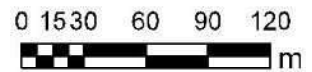


図 注目される種確認位置 (陸産貝類)  
(地下案)

対象外

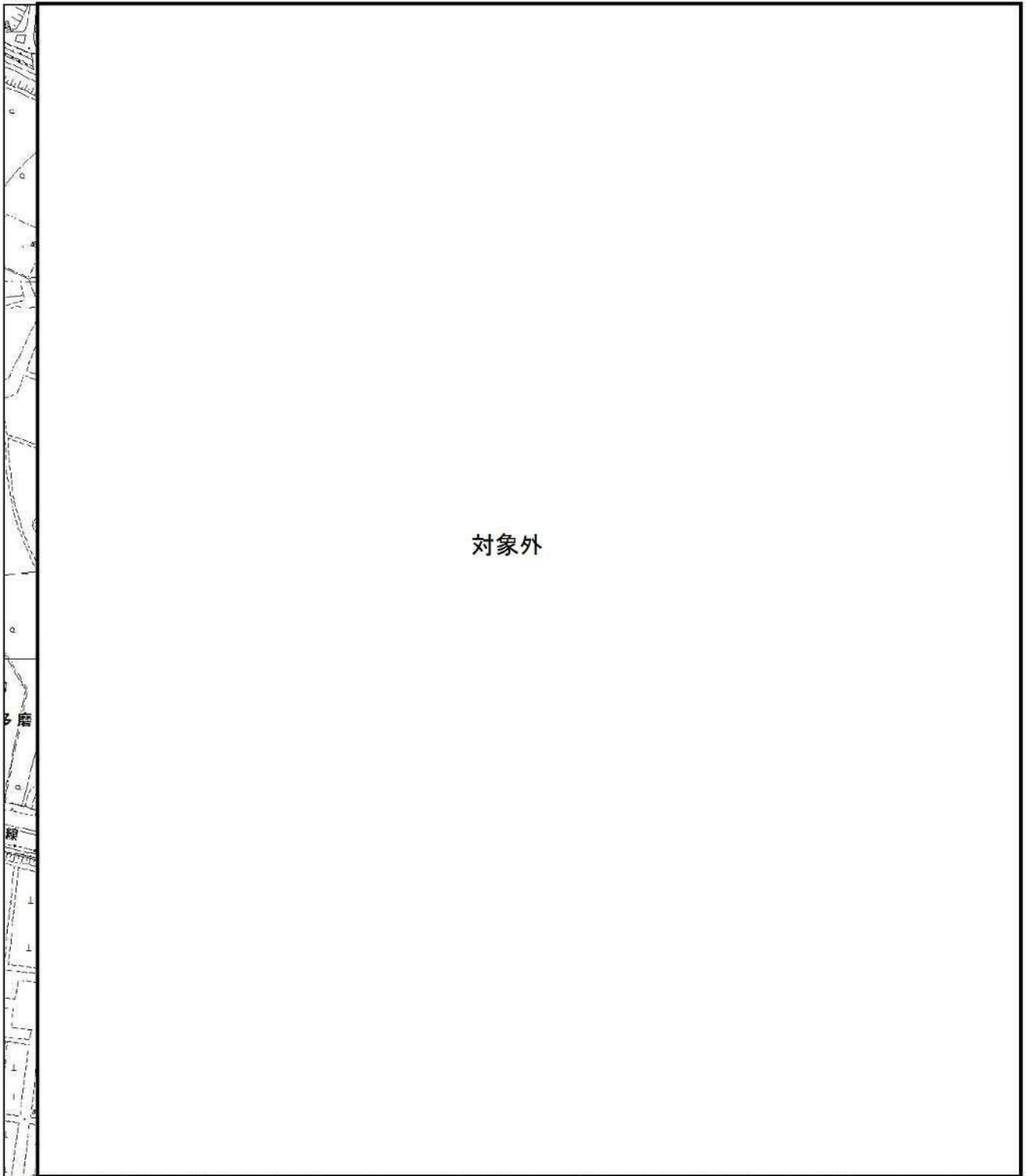
凡例

- 計画線(地下案)
- 施工範囲(地下案)
- 動物調査範囲
- 調査 I 2021年度
- 調査 II 2015年度
- 調査 III 2016年度
- 調査 IV 2017年度
- 調査 V 2018年度
- 調査 VI 2019年度



0 15 30 60 90 120  
m

図 注目される種確認位置(魚類)  
(地下案)



対象外

凡例

- 計画線(地下案)
- 施工範囲(地下案)
- 動物調査範囲
- 調査 I 2021年度
- 調査 II 2015年度
- 調査 III 2016年度
- 調査 IV 2017年度
- 調査 V 2018年度
- 調査 VI 2019年度

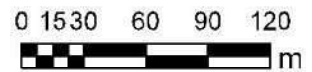
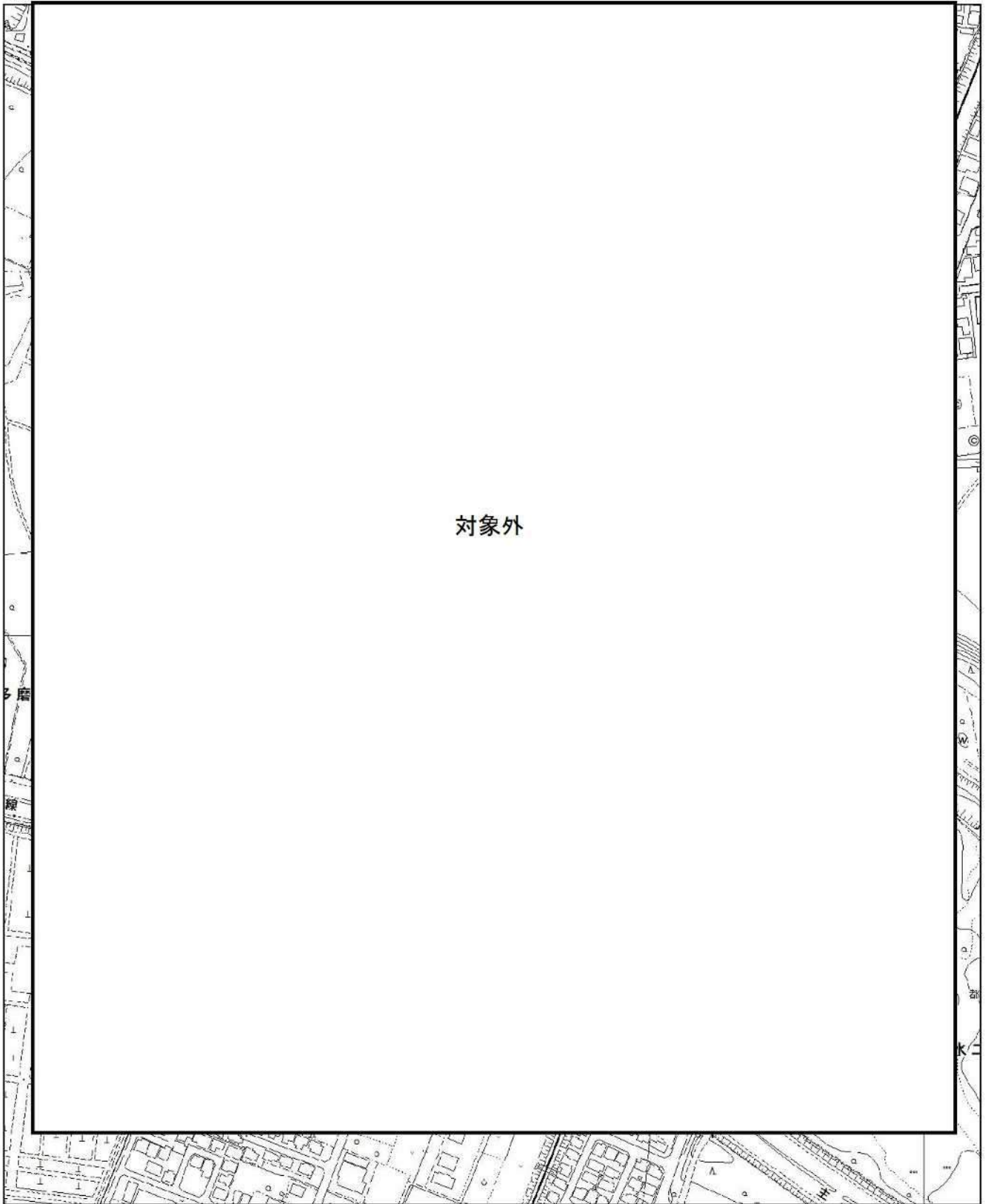


図 注目される種確認位置  
(シマドジョウ種群) (地下案)



対象外

凡例

- 計画線(地下案)
- 施工範囲(地下案)
- 動物調査範囲
- 調査Ⅰ 2021年度
- 調査Ⅱ 2015年度
- 調査Ⅲ 2016年度
- 調査Ⅳ 2017年度
- 調査Ⅴ 2018年度
- 調査Ⅵ 2019年度

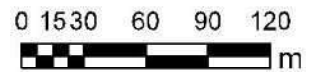


図 注目される種確認位置 (メダカ類)  
(地下案)



対象外

凡例

- 計画線(地下案)
- 施工範囲(地下案)
- 動物調査範囲
- 調査Ⅰ 2021年度
- 調査Ⅱ 2015年度
- 調査Ⅲ 2016年度
- 調査Ⅳ 2017年度
- 調査Ⅴ 2018年度
- 調査Ⅵ 2019年度

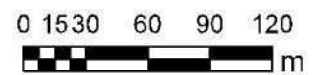


図 注目される種確認位置 (底生動物)  
(地下案)

対象外



凡例

- |             |                 |                |
|-------------|-----------------|----------------|
| —— 計画線(地下案) | ● 調査 I 2021年度   | ● 調査VI 2019年度  |
| ■ 施工範囲(地下案) | ■ 調査 I 2021年度   | ● 調査VII 2022年度 |
| □ 植物調査範囲    | ● 調査 II 2015年度  | ■ 調査VII 2022年度 |
|             | ● 調査 III 2016年度 |                |
|             | ● 調査 IV 2017年度  |                |
|             | ● 調査 V 2018年度   |                |

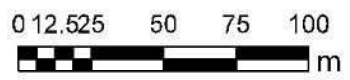
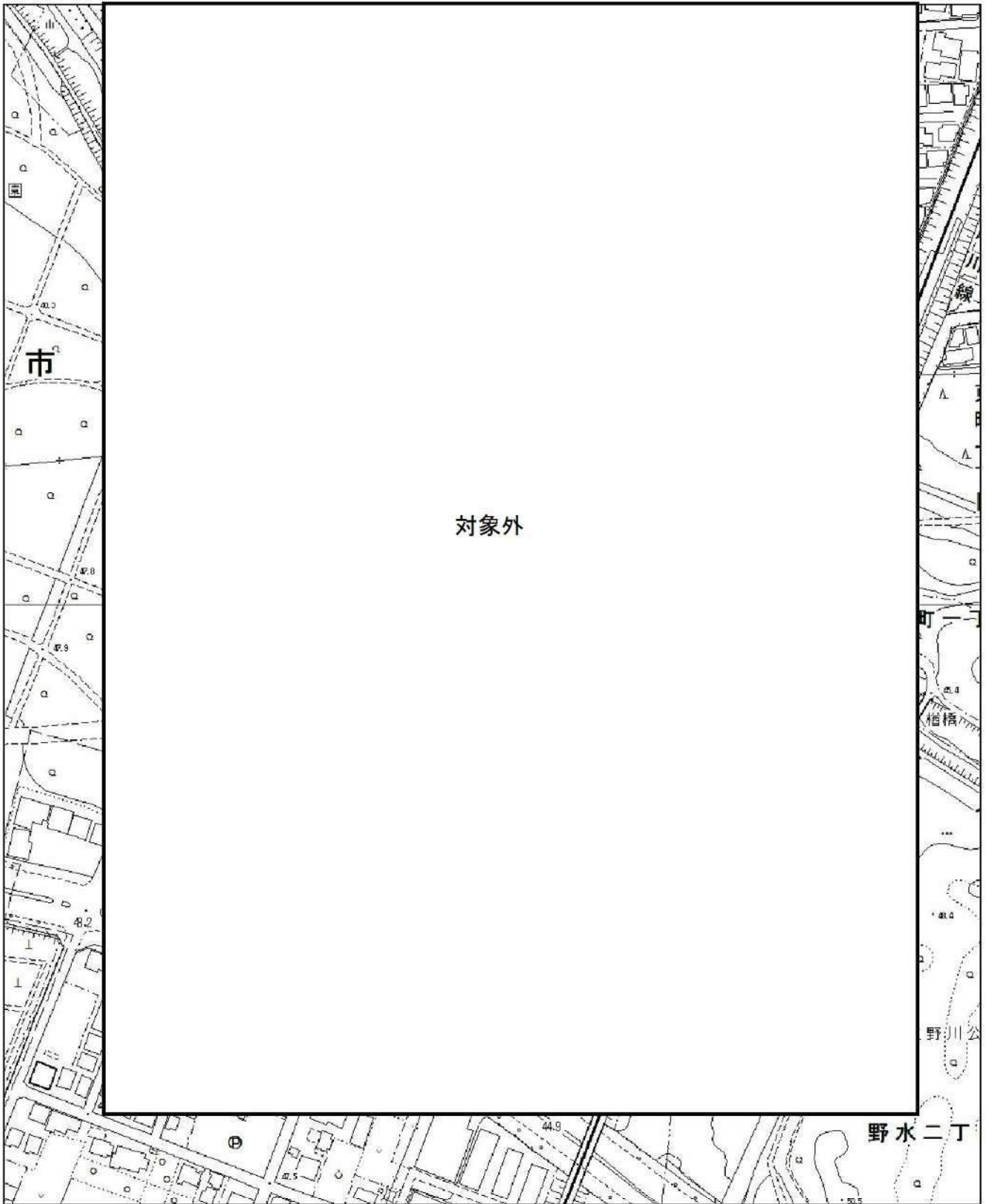


図 注目される種確認位置 (植物)  
(地下案)



凡例

- |             |                |                |
|-------------|----------------|----------------|
| —— 計画線(地下案) | ● 調査 I 2021年度  | ● 調査VI 2019年度  |
| ■ 施工範囲(地下案) | ■ 調査 I 2021年度  | ● 調査VII 2022年度 |
| □ 植物調査範囲    | ● 調査 II 2015年度 | ■ 調査VII 2022年度 |
|             | ● 調査III 2016年度 |                |
|             | ● 調査IV 2017年度  |                |
|             | ● 調査V 2018年度   |                |

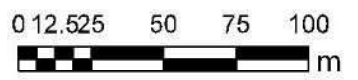
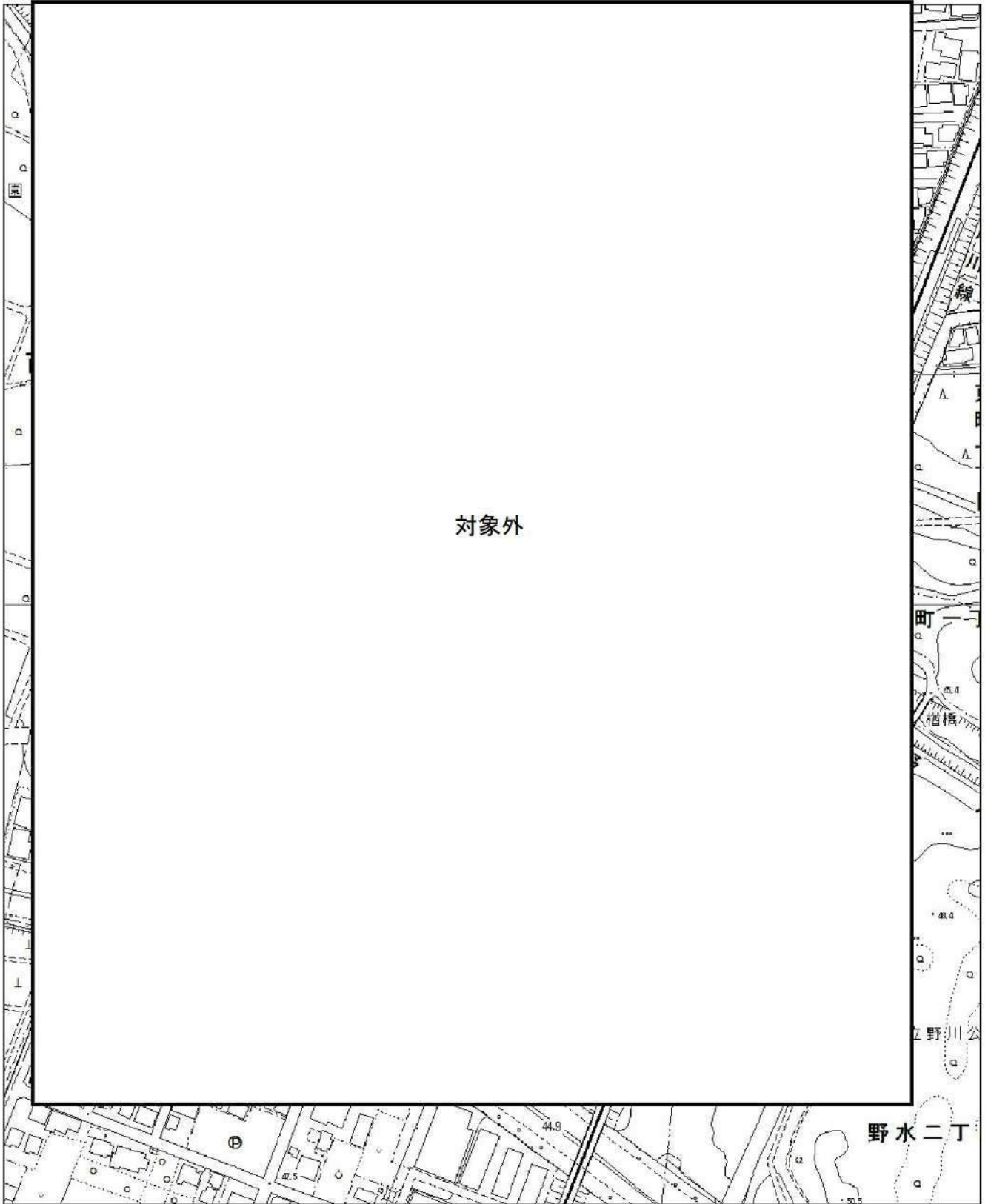


図 注目される種確認位置 (ミクリ) (地下案)



**凡例**

- |             |                 |                 |
|-------------|-----------------|-----------------|
| —— 計画線(地下案) | ● 調査 I 2021年度   | ● 調査 VI 2019年度  |
| ■ 施工範囲(地下案) | ■ 調査 I 2021年度   | ● 調査 VII 2022年度 |
| □ 植物調査範囲    | ● 調査 II 2015年度  | ■ 調査 VII 2022年度 |
|             | ● 調査 III 2016年度 |                 |
|             | ● 調査 IV 2017年度  |                 |
|             | ● 調査 V 2018年度   |                 |

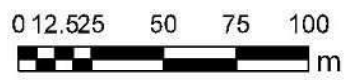


図 注目される種確認位置 (ウキヤガラ) (地下案)